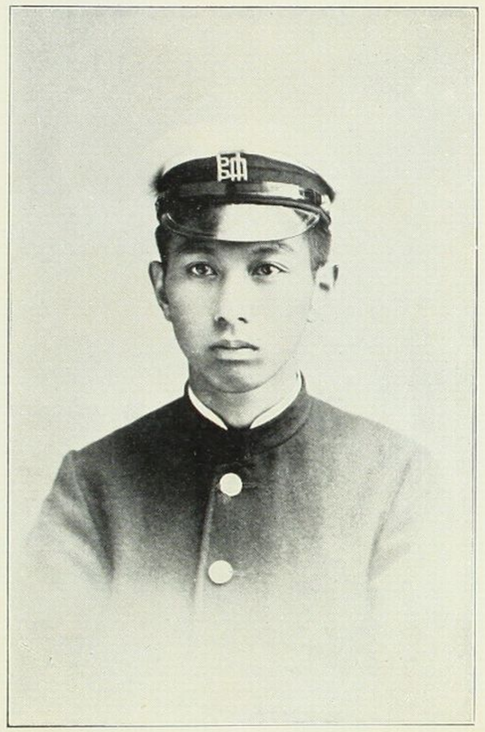
白氏文集遺稿

一冊

白氏文集遺稿

此書を故人白命に同情を表せらるゝ諸兄姉に頒つ



故高橋常八君小傳

高橋常八君は、明治十五年二月二日陸中國紫波郡煙山村に生る。六歳にして郷里の小學校に入り、後家事を祐くること年あり。三十一年七月母君に別れ。三十三年五月盛岡江南義塾に入り、三十四年四月に岩手師範學校に入りぬ。此年六月妹多美子に別れ、三十五年九月父君に別る。三十六年七月姉君逝き。三十七年四月祖母君九月妹佐野子に別る。此間家庭と境遇とに健闘せる君は、病を得て屢々郷里に歸りき。三十八年二月六日、君其卒業に先つこと一ヶ月にして遂に盛岡病院に逝きぬ。君文藝、科學に通し特に史學に興味を持てりき。嘗て郷里に於て桃色會を起し、又校友等と幽薫會を起して、創作、研究に勉めたり。文峯、月花、玉暦、白命は其號なりき。

怠慢なる汝を鞭つ

香にふれて匂ひに浴びて歌う身を

霜がれころの蝶に望むか。（白命）

序

高橋常八ハ紫波郡煙山村ノ人ナリ。明治卅四年四月笈ヲ負ヒテ我校ニ學ブ。人ト爲リ謹厚ニシテ剛毅、能ク文ヲ屬シ歌ヲ詠ジ常ニ儕輩ノ推重スル所トナリ、予等亦大ニ望ヲ後來ニ屬セリ。然ルニ天乎命乎昨冬、病ニ臥シ、爾來治療百端遂ニ起タズ。實ニ其ノ卒業ヲ距ル月ナリ。悲夫。

今回親友小笠原謙吉君及學友高橋松次郎高野俊治君等遺稿中ノ較佳ナルモノヲ集メテ一卷トナシ、之ヲ梓ニ上セ以テ同志ノ士ニ分タントシ、予ニ序ヲ請フ。予常八ノ名聲

ノ後世ニ垂ルヽヲ忻ヒ、且ツ某等ノ友義ニ厚キヲ嘉ミシ、常八カ在校中ノ顚末ヲ記シテ以テ之レヲ與フ。

岩手縣師範學校長　小林鼎

緒言

此書『白命遺稿』を編輯出版するに就きては、故著者逝去後直ちに吾等の間に協議整ひて、四月中に印刷出版すべきの計企略々成りしも、材料の蒐集未だ其期に到らざりしと、三月學校を卒業して地方に赴任するものありしとのため、荏苒今日に至りたる次第也。

本書は遺文の半をも收めざれども、其創作の主要なるものをば網羅したりと言ず。尙ほ漏したる重なるものには「知らぬ記」、「俗謠」、「童謠」、「手毬唄」、「書翰」等にして、これ等を收めて全集を出版せんことは、素より吾等の希望なりしも、微力よくする處にあらざれば、僅かに此小出版を以て其靈に捧ぐると同時に、又併せて江湖の故著者に同情を表せらるゝ諸兄姉に頒たざるべからざるに至りたるは、遺友吾等の深く憾みとする處のもの也。

抑も著者が筆を取り初めしは明治三十年以後にして、其頃の作物は重に『小夜みだれ』の一部に收れり。『菜園集』に掲げられたる「輕風」は、此世の絶筆となり終んぬ。「詠草」は學校時代幽薫會のためにものしたるものにして、「磯鷄」は『校友會雜誌』に出でたる中の傑出せしものなりき、『櫻傘』及び『小夜みだれ』は、著者が筐底に藏しありし詩集也。其他「手向草」、「落日賦」の如きは桃色會のために述作せしものにして、「史的俗謠」、「繼母の研究」は能く晩年の思索を伺ふに足るべく、特に「南昌山」を書かんとしては、昨夏病軀を抱いて實地に踏査をなし、山を迷ふて家に歸らざることさへありき。『志和の城變遷史稿』には幾多著者の造始する所あるべく、而して『知らぬ記』四卷に至りては、著者が一代の思想史也。健鬪史也。字々皆血を以て書し涙を以て沫したる日誌也。否、無韻詩集也。故著者が人格及び平生を研究せんとするもの是によらぜして何にかは求め得べけんや。されど吾人の本稿末文に收めたる「妹を思ふ」の外、之を割かざるべからざるの止むを得ざるに至りしは、實に其紙數の豫定を超過することと多大なる所以にして、江湖の諸兄姉と共に吾人の深く遺憾とするところのもの也。

卷頭の肖像は、多くありしもの〻中より吾等の撰みたるものにして、二年前の撮影にかゝり。二葉の短冊は學校時代の手蹟にして、其一葉は著者が造始せる書式也、何れも其平生を伺ふに餘りありぬべし。表紙書は同窓早川良雄君の丹精になり、實に故著者が生前梨花の色をめで號を白命と撰ばれたるに因めるもの也。裏書は故著者が紋所なりとす。

偖て岩手縣師範學校長小林鼎氏には特に好意を表せられて序文を賜はれ、恩師白井種德氏には編輯の事に就きて注意を與へられ、印刷者工藤倉吉氏が印刷体裁の事につきて種々研究苦心せられたると、在校生佐々木理平治、堀内正夫二君の吾等が依賴を快託せられ植字校正の任に當られたる等は、本書出版の光榮として記して厚く謝せざるべからぜ。

其他、在京中の上田寅次郎氏には幸に歸鄉せられしを以て親しく協議するとを得、

齋藤甚助君は東京より歸村せられ、宮崎一君は公務を排して共に萬事に注意を與へられ。材料の蒐集等に關しては遺弟正太郎君を煩し、清書校合につきては小笠原太郎治君を勞し。小田野健三、阿部末吉、多田金三郎、川井春子、高橋理左衞門の諸君には、夫々便宜の勞を取られたる等の厚意は、深謝するところ也。

本書の編輯につきては、主として小笠原其責一切を負ふものとす。

終に吾等故著者が貴き意志を繼ぎて、其發展を計らん爲めに白命會を成立して、先づ『白命遺稿』出版の事業を起しぬ。尚ほ『白命評論』及び『白命追悼集』を綴らんとす、若し吾等と情を同うする江湖の諸兄姉にして、詩文を寄せられ給ふ人あらば、明年二月までに右小笠原に宛てゝ贈與せられんことを、偏に祈り申すになん。

明治三十八年九月二十三日

故著者が三年前白命と名のりし日

高橋松次郎

高野俊治

小笠原謙吉

白命遺稿目次

◎輕風（三十七年十二月『菜園集』所載）一
◎幽薫會詠草（三十六年二月より三十七年七月まで）二
詠草　行く秋　農・夫
◎櫻傘（三十五年五月より三十七年八月まで）一六
櫻　傘　夏のおもひ　夕つかた　弔故友吉田君
◎小夜みだれ（三十年九月より三十七年頃まで）二七
小引　小夜みだれ　小半里（卅四年八月『桃色』所載）　桃いろぞめ（卅四年九月『桃色』所載）
◎磯鷄（三十七年七月『校友會雜誌』所載）六八
◎すごり箱（三十六年七月『校友會雜誌』所載）七六
◎露（三十五年六月『桃色』所載）七七

◎手向草（三十五年七月『桃色』所載）七九
◎落日賦（三十五年八月『桃色』所載）八二
◎懷風（三十七年二月『花摺草』所載）八五
◎秋風（三十二年頃）八七
◎郷の山八九
◎潜水艇九二
◎『桃色』六卷の首に（三十五年八月）九六
◎たらちねの君かむざり給へるを悲しむ（三十一年十一月十二月『小波』所載）九七
◎朝顔の記（三十七年八月『秋草』合綴）一〇一
◎歸りみち（三十五年七月『桃色』所載）一〇三
◎蟲籠（三十六年十月『桃色一日會號』所載）一〇七
◎魂祭（三十六年十月）一一〇
◎哀別恨（三十六年四月）一一七
◎憐れなる同胞（三十四年五月作）一二一
◎悲憤錄（三十五年二月頃）一二六
◎妹を思ふ（三十七年九月六日『知らぬ記』）一二八
◎史的俗謠上（三十五年十一月『桃色』所載）一三三
◎史的俗謠下（三十六年一月『桃色』所載）一三八
◎繼母の研究（三十六年九月『桃色』所載）一四四
一緒言　二繼母の意義（缺）　三繼母の史的研究（缺）
四法律が認むる繼母（缺）　五繼母の品性　六繼母の德義（缺）
七繼母の罪惡（缺）　八繼母と家庭（缺）（A）配偶者との關係＝（B）家政との關係＝（C）交際との關係＝（D）子弟との關係　九結論（缺）

◎南昌山（三十七年十二月『校友會雜誌』所載）　一五一
發端　史的方面　山稱起原＝南昌山神社　地的方面　位置＝地質＝河流＝風景＝植物（隱花植物、顯花植物）＝動物　結末
◎煙山名蹟誌稿（三十六年十月頃）　一六九
煙山村沿革（一）起原＝（二）營構（三）＝位置境堺　南昌山　陸奥古道　鹿妻堰　淺子留　鍋屋敷　煙山館　實相寺　燒觀音　五日市又兵衛墓（缺）
◎志和の城變遷史稿（二十五年十月作）　二二九
志和の城　城墟　變遷第一　康平時代　變遷第二　比爪氏時代　變遷第三　斯波氏時代　變遷第四　南部氏時代
◎書翰（三十五年五月より三十七年四月まで）　二七〇
上　小笠原迷宮　中　宮崎紫岡　下　齋藤北洋

白命遺稿

輕風

栗の葉は松にきくより風輕ろし舟のこぐ如ちるはかわゆし。

暗海にめしひし魚とふるゝまは貴名は負はぎ奇はし緋珊瑚。

秋よ今一夜榮葉の五万燈かゞやきふけしさゞめきのあと。

遠くやる文なかばして燭よぶに栗の雄花のちる夕かな。

かきけ障子に振ふおたけびや雛しゝ足りて秋はくれたり。

子は二人義務に失せて爐をひろう落葉をたくに風流もなし。

（三十七年十一月『菜園集』）

幽薫會詠草

一響谷にくづるゝ雪の音に荒鷲高く峯を飛びたる。

雪の夜は劍も欲しく感ふ哉男の子の夢と亞比利亞にあり。

燈籠の火影まばたく明け方を丹塗の塔に雪しづかなり。

輿に入りて庭に雪ふむ裸足の子今朝はさすがに母もとがめぢ。

小さき蓑新しき雪靴ふさはしや着ろめはきろめ雪も初雪。

み袴のみ裾あぶなき下駄のひくさ市の大路は初雪二寸。

行きなやむ下駄の運びを杖の手に傘もちかへてしばし息らふ。（以上雪）

地圖に見よ我が栖む國のなと小さき何をおごりの大和櫻や。

愛し爪は杉にとられて殘る糸を卷く手冷く淡雪のふる。

艶の君紅梅がさね白リボン前髪重く春を怨むる。

鞭あらば厩に掛けよ道を說き人を導く手をけがさじな。（教鞭といふことを忌みて）

晝の鐘花に消え入る花盛り十六羅漢眉かぐはしき。

薪駒鮫毛の一匹ほの見えて坂路朝靄唄かすかなり。

春の香に罪を知るやの囚人が柿色衣に紅梅の散る。

雨しどろ病めるみ顏の色あせて燈くらく梅の香ぞする。（人の病床にありて）

宵の空雨とも知らぬ花ぐもり宿世の袖に移香淡き。

血に喝く荒鷲荒れて滿州の眞晝を闇と羽風吹きまく。

病む人のなけく運命をいかにせん蒲葉にぬれて晝の雨降る。（姉の病床にはべりて）

野路の興草の名すでに歌なりきそこにチゴユリこゝに姫萩。

坂一ッこえての澤に尋ねよる流れのほとり蘭の花あり。

雨淋し櫻木立は葉になりて志士の石ぶみ苔いやお
ごる。

日は落ちて牡丹花ぞの風ゆるゝ今日の名殘の香をた
ぐよはす。

道添は流れの音と卯の花の續く小半里雨やゝは
れぬ。

調べありや江を西する夜の舟十三絃は三年秘め
し君。

父祖の跡に僅に石の苔を流ふあゝ一千年水も老い
たり。（古跡にて）

戸によれば雲のゆきかひみな淋しかよはの指に笛を
たまへる。

我か世まだ敗亡になく時あらぎあゝ白芙蓉夜を薫
ぜる。

秋の香を蕾に秘めて折りし花に有縁無縁の魂祭り
する。

誰か興ぞ謠曲もるゝ垣の香やあかくましろく芙蓉點
ぜる。

草痩する園の小路に露を吹く風の行く衛に花種ひ
らふ。

み墓近く灯を奉る父の忌日虫かすかにも萩のこぼ
るゝ。

たま〳〵に友のたづぬる霄月夜秋をはいはで笛をす
ゝむる。（以下秋月）

秋の情さりとて窓もおもひかねつ弱き悶えの有明月夜。

虫の聲月の光りや秋寒し田圃を千里西にさる我。

月の旅片袖摺るゝ萩の露恨みもつ子に涙を強ゆる。

行く秋

ほつれ毛あぐる眞白手に、
細うこぼるゝ柳葉の、
淋しさ添ふる川堤、
彼岸に通ふそよ風に、
袂まかする夕まぐれ。

行くへいづこの雲脚や、
たゞよひ暗きちぎれまを、
黄金の糸を績ぐこと、
妙なる光もづれては、
人の悶えに通ふめり。
川の音さにて霧さむく、
霜待つ草に花もなし、
あゝ落日に行く秋の、
怨み包む片袖に、
染むや有情の一雫。

秋の景こは運命の薄影や此身を包んで水に投げたる。

歌なげて別るゝ水に憂あり銀泥の空月も秋なり。

今朝も一人顔に掬はん水寒し母なき子には辛かりし霜。（以上課題水）

温き情に飢えて待たるゝを雨に三里を辭むべき身か。

秋の野に四人を殘す夕暮を兄ある袖に雨あわただし。

あゝ運命これも人の子若かるに憂と馴れて眉のあがれる。

渡守今棹投けん水際や川霧薄く萱の花群。

路一縷紅葉を縫ふて秋の山神韻こむる風の薫るや。

月にかざす歩哨の劍嘯くか巷を卷いて夜の風吹く。

軒を掩ふて山に聯なる紅葉や此里すべて詩に呼吸あり。

荒妙の袖みぢかきをほこらむや山田の富に虚榮を語らむ。

農夫（課題）

我世の幸は地に凝りて、
人平和のほゝゑみに、
匂ふ瑞穂の奇しき香や、

今を収むる夕月夜。
這はんばかりに荷ひては、
汗を握りて引く駒の、
背後に觸るゝ轡の音、
歩みおろきを促がすか。
一筋白き路の先、
風も交らぬ薄霧を、
おぼろ〳〵に搖れゆくは、
肩やいためる妻の影。
荷縄をほとく納家の戸に、
駒は静かにいなゝきぬ、
夕餉は如何に母屋には、

柴折る音の猶きこゆ。
氣配を悟る兒の敏さ、
待ちあぐみのうたゝねを、
また夢かがら窓ごしに、
母を呼ふ聲はやうるむ。
日和續きの幸に、
殼も乾きぬ穂も干たり、
今一荷運びなは、
殘るもさまで多からぢ。
さはいへおろき夜の色、
兒の聲つらき母の胸、
手網ひかへてたゆたへど、

仰ぐ月には暉を着ぬ、
蹄の音は馬屋に入らで、
再び外に嘶ぎぬ、
兒の聲高くひとしきり、
親の行くへを纏ふらし。
一日の業に殘りおく、
肩より下す心の荷、
疲れを語る茶を酌むに、
愛し兒はやもうまゐせり。

（了）

美し國予の滴に凝るひまを芽生えしにけん千代の
青松。（御題岩上の松といふことを）

母の影ろは夢おりし胸のくもりろは夢ならぢ窓の
春雨。
軍艦何ぞはた彈丸何ぞ日本刀世を清めよの使命こも
れる。
天と地と春繫がん企の人に洩るごと細く降
る雨。
脂も濃く路恥つかしき若裝梅の花傘京の
春雨。（以上二首春雨）
夕空に不朽の脂を流すごと琴柱に若き曲想
夫戀。
將軍の勝酒召すにふさへりや夕の色は妹が袖
の如。（以上二首課題夕）

五月雨にこの譜何等の清韻ぞ田の面流かるゝ早乙女の歌。（兼題田植）

三十年孝なき身とて老えて親に別るゝ首途太刀の白鞘。（仝　出陣）

巻き返す潮くづるゝ波の花にみ簇抱いて沈まんうらみ。（運送船遭難）

この恨み返さでやまぢ西比利亞に魂を牽て行け濃霧荒風。

許しませ微臣の運命今盡くと猛夫の涙旗をやくとき。

さくらのさ

後れ毛の三筋よすぢを白きほにあやどる風はろてをもふきて。

そのリボン今朝やはさめる小さき袴梅ぐしのはかま裾ながき君。

麥四寸青きにふさふ姫袴野の路ほろきつみくさのはる。

下げ髪とまだせにおかば小さきろで春とはいはじただ桃のはな。

春長ふ袖ゑにほひの園の暮男の子さすがに櫻がなせる。

たれに見し劍はくとやいひえたる竹の三節をろのにきらせん。

海棠にのぶる手とめし姉君のみ顔仰きてほゝとゑみ
し子。

肩ほろし今日やきそめの白飛白はやもあみしぬ水つ
めたきに。

知り得たり平和の水はこれかあゝ昔をいはゞ末をか
たらぢ。

とこしへにやすきこゝろを委ねんか波をも知らぬこ
の靜風に。

舟にして蓬萊島を右に訪ひ友の二人をこゝにとね
びぬ。

水と陸と何れや影の松か枝を歌に思へど歌はなく
して。

鴨の羽にろとちる水は白かりきしろきにぬれてとぶ
二つ三つ。

舟一つ梶の音ほそく靄に入りて六万石に鴨しろく
とぶ。（六万石は岬の名也）

うなばたを叩きながらにみかへれば見し松低（ひく）し見し
島ちさし。（以上七首十和田湖に得たるもの、されど惡詩以て大景を損ふを恨む）

歌まきに春のひと文字かささせば蕗の葉ひろきあ次
のねぞもる。

ひ櫻のこほるゝまゝにろのまゝにあやましの宵月ほ
そくして。

下駄の緒の紅（べに）にも春の香は淋びぬさて褄馴れぬ山ぶ
きかさね。

あけぼのにかすみはえあさき堤三里それよ人にはたゞみじとこそ。

惑ふ春に今をしばしのたゆたひを花の千片(ちひら)は雨にまじりぬ。（以上五首行く春を）

池に入る二つのかげは帶赤し三味ひく子なりろの眉の色。

頬細く袷羽織の朝の君青葉の風に裾おもげなり。

あかき帶をわらびの代(しろ)にかぞへみて笑まひをつゝむしろの手拭。

青葉かげ黄金の雨ともるゝ日に絹傘ちさく二人はゆきぬ。

夏のおもひ

ひろかにもるゝかげなれば、
たもとしづかにおほはんを、
青葉のかげはくろくとも、
あまりにさえて露のつま。
地にひくかげのほろきみて、
人にしられしおもやせの、
身にしむばかり淋しきに、
う花かつぐにえたえんや。

この手今は痛手をおほふに力なしおほもたゆるか罪に罪して。

こゝろゆく雨の夕を笛とりて月なきろらにわか事秘めん。

瓶にとは酷きこゝろよろのまゝにろのこけの上にあがめぞや君。

夕つかた

湯浴(ゆあみ)の肌にきぬかえて、
きざはしゆるくくる風に、
ゆらぐともおきうすたもと、
おばしま高き樓にかゝりぬ。
ほのかに榮ゆる水いろは、
またちからある空なから、

金絲(し)むおしくみたれては、
みどりあせたり野と山と里。
今日の一日の人のよを、
みしは罪とかはたさちか、
囁きませのたゆたひも、
自然はたゞ入る夜に笑みつゝ。

弔故友吉田君

靈光あまるみづしべの、
百合のしろきに手をあげて、
たかき香ふれしわかき袖、
ろれにもぬるゝ夕露や。

あしたのぼしのまたゝきに、
榮えのつばさは雲に入り、
うつゝなからのひかりにて、
はてなきろらにながれては。
などさびたるよ櫻月、
絃はたえたりとこしへに、
琴柱むなしくみだれては、
ことしまたあし松の聲。
君にあれたる一とせを、
あたゝかなりし清興を、
忍ぶにたえぬまどにして、
思ひ出おほき青葉哉。

くるしき歌

意によりて押ふるになれたる情、我はその冷靜なるに於てひそかに微笑むとの、迷ひたりな一夕の血汐むなしく狂ひて、笑止や意の命令勢を失ひぬ。

さらばなに何を理想の若さのぞみあやむが上にとく道ぞなき。
あやしこゝろなにをくるしむもたへぞや遂に筆とる
ひめ歌ぞうき。
戀あらぎとはいへたえぬ情のみだれとても人にはつ
げましき思。
手柔か胸押ふれば額おへはろこみなあつしわが血た
ぎりぬ。

われにもしこゝろゆくべき位置あらば或はこゝに戀をしらんか。

こゝろならぞむくろにあらぞこれぞ魔か我にもわかぬ煩悶の我。

これやまことつみの上にも罪ならんまかきにばらの香をぬすむとは。

なげかはしさもしきわれよ年ながきむねの誓ひを狂はせしわれ。

我れはこの上になほこの歌を繰り返すを好まず、我は我れの罪を知ればなり、而してこの歌！　永久に秘むべき歌。

小夜みだれ

かはずのこゑも歌といへり、されどわがこゑのいかでうたなるべき、かくあつめしはむかしのわれをしのぶわざのみ。枯れ草に夜雨のそゝぐにもにたるかな。

たま麿

山の端にまだ白雪ののこれるにかすみろめたり春やきにけん。（初春）

風ふけばいとかなしげに鳴きにけり、ちり行く櫻になごりをしみて。（晩春篇）

夕まぐれ松の下かげ道ゆけぞ、涼しげになくひぐらしのこゑ。（ひくらし）

山里のゆきのけしきもなか〳〵にみやこの花におと
らざらまし。（山里雪）

けふよりは春のやよひと思ふれば花かと見ゆるみね
の白雪。（春雪）

うつしゑの花をあざむくかんばせにたしやうつらぬ
まごゝろの底。（寫眞）

時くれば鳥もかよはぬあづまにもかほりゆかしき梅
のさくなり。（奥の花）

花をめて月をなかむるつかのまもしたはしき哉情あ
る友。（思友人）

桐の葉のまどうつ音にゆめさめて枕邊近くきり〴〵
すなく。（初秋）

秋風のそゞろにふけば黄金なすみづほの波のたちさ
はぐおり。（秋田）

としをへしみどりもふかき老松の木の間洩れくる月
のさやけさ。（松間の月）

見るかぎり紅葉の外の色もなくかせきの聲ぞしげく
きこゆる。（秋山居）

いむせきのいろかをしのぶたきおぐさ今宵も霜にお
やむならん。（晩秋の菊）

久方の月の桂も香をしたひ露おもげなる菊にやど
れる。（月前菊）

にしきなす紅葉もろゞろちりろめて岩手の山に雪は
ふりけり。（初冬）

今更になげくもかひのなけれども慰めかぬる我が心かな。

庭の松なれが齢をなき人にゆづらばかくはなげくまじきを。（以上二首母の死を悲しみて）

ともゝにめでしむかしをしのぶ草見るにつけても ぬるゝ袖かな。（母の碑に刻す）

春とすぎ夏とくらして秋とさる 冬と思へば梅の花さく。（折にふれて）

のどけくもさはゝしけに岩手山初日かゞやく峯の白雪。（新年）

大君のみめぐみふかくふりつもる雪にうもるゝ民の八千草。（新年の雪）

たちのぼる民のかまどのけむりこそゆたけきみ代のためしなりけり。（御題田家烟）

新玉の年たつ今日は野も山も君が代祝ふ民のもろぐさ。（新年）

山里も都もなべて君が代をことほぎまつる今日のめでたさ。（新年）

今朝見ればそのふの梅は咲きにけりふりくる雪を香につゝむらん。（寒梅）

たびかりのなく音は去秋にかはらねど春と思へはゆかしくぞきく。（歸雁）

あれはてゝかげはとめねど松風のこゑにむかしの忍はるゝ哉。（岩崎にて）

見えつうせつ木の間がくれにひらめきぬいなりのみはた風になひきて。（以上三首稲荷に詣つる時）

小夜雨に今朝はと見れば梅が枝にあめのなごりにたまのみぞさく。（梅花不開）

またわかきつぼみやあたにちるゝらん風は櫻をよきてふかなん。（風強き夜に）

松風のひとり弔ふ奥都城にちりのうき世を白梅のさく。（墓所の花）

風なくになにはいろぎてちるゝらん春くれぬるか山櫻花。（暮春）

花にわかれたよりすくおき老の身をもとの藪根にかこつ聲する。（老鶯）

遠く見ればのこんの雪とまがふかな青葉がくれの谷の細瀧。（夏瀧）

夜半にきけば小田のほとりのむらかはぢなくもろこゑの清くもある哉。（蛙の聲）

わらび折る里の子かへる山のへにねくらたつねてたひからすなく。（夕ぐれ）

水雞とはしりてながらも待つ人のもしやと妻戸あけにける哉。

わが門に今宵ばかりもたゝかぢば嬉しきゆめのさめざりけんを。

叩けどもいらへだになし我が友もころはくゐなにあざむかれけん。（以上三首くれなゐを）

里人のみおれし目にもまさかりの山邊の卯花雪とまがふらん。（卯の花）

細野路を若草わけて我ゆけば袂ぬれけり露のみたれて。（つゆ）

わかせみのこゝにはいつかなきろめしわれには今日もはつねなりけり。（初蟬）

やよわらべかごにとらへそ初ほたるよろに眺むる人やうらまん。（初螢）

しげくおくみとりの奥の露やちりし筧を傳ふ水の涼しさ。（筧の水）

手弱女のかなづる琴の音はなくも夏は涼しきたまれのうち。

夕立ののぎはを叩く涼しさに夏をよろなる心地ころすれ。（夕立）

口おしの色やますらん我か奥の細路に匂ふ山吹の花。（細路園といふを祝ふて）

八重霞へたてゝ遠く見ゆる哉むかしながらの城山のあと。（志和城を望みて）

ふく風に我か身まかすはやすけれどあはれ葉毎の露やちるらん。（偶感）

世の人は知らて眺めん泡雪とはかおく消ゆるろの身なりとも。（雪の消ゆるを見て）

さいてちりてまたさく花よりもかはらぬ松ぞつれなかりける。（學進まず）

月さへもふき行く雲にくれ竹のうきふしまけさ世こそうたてき。

咲けるまをつとひてめてし櫻花ちりはてぬれはとふ人もなし。

清き色のあとなくけかれて見ゆるかな濁江にうつる卯の花のかげ。

ふかはふけちらさはちらせ小夜嵐ちらてはつべき花にもあらねば。

こゝろなき月こそしらてやとるらめ涙にぬれしわがたもととは。（以上みな折にふれて）

きく人のあはれ知りてやこのころは裾野の虫もまのびねになく。（晩秋虫）

むしのねを月にたつねてさまよへは古城の松にからすなくなり。

山里の友よりふみをおくられぬ栗拾ふべくわれにこよとの。

あいらしき小兒を見たり寫眞にて太りて名をば三チャンといふ。

朝ことに露にかれたる撫子の四つのはおひら二つのこりて。

かへる友をおくりて門にわれたてば峯にはあるゝ十六夜の月。

秋風に蔦のひごろも色あせて枯野にたてる石地藏淋し。

さとの子がほゝゑみながらかへるあり手かごにあまる栗を拾ひて。

窓近く雨のねするにねさむれば十時のかねはすごくひゞきぬ。

夜は深く雨さへふるになほやまてまかきのあたり鈴虫のなく。

枯野べに尾花折りしき月をみぬ露にたもとのぬるゝも知らで。

あさくろき雲より月は半顔あらはせるときかり一つ行く。

あすよりはひとりなくねのあはれさを岩手の原にきく人やたれ。（友と別るゝとて）

初雪のみねにましろきこのあしたやつれし菊に蝶一つあり。

おもひねの枕に通ふ鹿のねにひとしく君のこひしくあるかな。

もみちはの錦くらぶるろのもとを一節きよく行くながれあり。

しほれゆく乙女見送り野にたてはるかの山に鹿のねきこゆ。

我が胸に忍ぶ都はなつかしき兄のおはする友のたはする。（兄ともたのむ友を忍びて）

母の日に萩の一枝をたむけんと折らんとすれはつゆそてにちる。

姉上よこれ活けてよと妹は川原に折りし女郎花
もて。

病める妹をなくさめんとて手折るなり惜くはあれど
紫の桔梗。

きりぎりすなくねしたふて垣根ゆけば月に匂へる撫
子の花。

萩のうばにたてる姫ありろの右手にはさみもてとも
切らんともせで。

夜はふかしかなつるみ手の寒からんにゆかし琴のね
誰がすさびにや。

尾花赤く豆の葉黄ある細道を馬ひきて行く子の歌
高き。

七草のうるはし色にみたれつゝあらぬ枝路に迷ひ入
りけり。

松原のこなたの岡はきいろなる女郎花もてうつめら
れたる。

おもしろし虫のなくねは松風にしらべあはせてうた
ふにもにて。

秋なかば野菊は今をさかりぬ ひともとかりてうた
よまんかな。

こまのせにもみちはら〳〵ちりしとき馬子は一ふし
たかくうたひぬ。

蔦生へし門なる母を呼ばひつゝ走せてゆきけり菌(たけ)と
りし兒は。

うれしきよ友のやまひはうすらきぬ秋たちぬると思ふ頃より。（初秋思といふを上田子の病室にて）

病める友にひともとかりておくらばや庭の撫子咲き初めにけり。

何とおくたゝしたけしく日もすがら、君がうつしゑながめくらしつ。

とくれきて岡におがむる雪景色、ちりの子さやぐ世のこともあるぞ。

このかげに今朝は六花のかゝる哉、きのふはもみぢうけしたもとに。

秋高しおどこえてやは鹿毛四才我が友のらぎや草赤き野に。

明星のみひかりうすく人の子のめさむる頃を雨ふりいでぬ。

秋風にちるやもみぢのはら〳〵と音する谷にますらなくなり。

神の子が神のみことを人の世に傳ふる聲か夜半の松風。

幼な子のふみよむこゑのさやきには天女の美曲きかんともねがはぞ。

よしいかに星のみ國のとほしとて君いましなばわれ追はんとおもふ。

朝もやに誰が窓ならん消え殘る火かげ恠しふ狐火のこと。

ともにいけし菊はかれたり數ふれば君と別れてはや
十日へぬ。（いなり子へ）

あかき葉の殘り少なにちりはてゝやせたるぶどう棚
に小鼠のなく。

霜ふみて石橋の上にわれたてば水のせゝらぐ枯れわ
しの聲。

このあした君とさくべき四つの袖、ぬらすは雨のろ
ればかりかは。

さびしくもひとりさまよふ城の上、月清ふして風靜
かなり。

君が名を歌ふみにみしその夜より我が胸さわぐろの
よしもしらぎ。

べにリボン、あゝべにリボンそれなくば彼の夜君を
ば知らでありしを。

山のはに黑雲迷ふ夕まぐれ雪に柴負ふ幼子あ
はれ。

束のまもたえぬうれひをいかにせん木枯よのみなら
ぬ夢かは。

父上のやまひのふすまさむからんと夜風のまとに我
ひとりおく。

ろのかけにあたたかおりしはゝそ木の枯れし夕の風
冷きよ。

よその子の清きみにくき見るにきくに先つ思はるゝ
己がはらから。

さなりわれも木石ならぜさりあがら戀にかさんはま
たおしきむね。

この年はとくくれよかし來る年に望みの光りかぞや
くものを。

さりながらこの一ととせをいたつらにすくせしこと
のはつかしきかあ。（以上二首歳暮に）

あふたたまに新しき歌神に捧げことしのわれにさつ
あれとのる。（新年に）

この窓に月を仰いて歌思ふ、ろのまの胸にうきこと
もあし。

かのひぐきまのよぶ聲かわが友をとほくうばひしう
らみは今も。（氣笛をきく）

神はもしわが手に征矢をゆるしあば美衣にかくせる
人のつみを射ん。

ちかき日ぞろのかほりあるその花を神のみ手よりわ
れうくべきは。

ふみとちて胸くるしさに窓によれば暗にさびしう雨
のねそする。

雪のなかめうらやましとやさりながら梅が香れろき
里を知らぜや。

木枯よ一重の衣寒くとも樂しからぜや藁屋のむ
つび。

君が身を己が寒さに忍ぶとき文は届きぬ君がみ名
にて。

きみはあふぎむなしくかへる衣手にひときはさむし

市の夕風。

そのことの夢ならぎやと胸に問へばあやし筆持つ指はふるひぬ。

明星のみひかり雲にきゆる見てある夜人の子袖をしぼりぬ。

宇治川の駒のむなかひしめてだに人におくるゝ世とさくものを。

さりながらゆかねはならぬ我が身おりせめてゆめ路に君をたつねん。

いざさらば中津の川よとこしへにみにくき我の影をうつしあ。（なよずんば再び來よずとまで）

消えて行く星にさゝやく風寒きあしたの別れ惜しくもある哉。（以上盛岡を去るとき友へ）

あたゝかきちぶさのあたりみ手に抑へふみにあんぎる姿やさしも。

かみの子の白銀のろやあらぎとも望みの窓をいかでは づさん。

つもれりなあゝけさの雪けさの雪されどなが光をかたる友なし。

ゆき白く松原くろき夕まくれ一刷毛青く霞のひける。

弟の罪なき睡り夢に入るか犬の子ほゆる聲も聞にぎ。

君を思ひ昨日の路にさまよへば夕の雪の袖にみたる。（宮崎子訪はれたまへし次の日）

筆とれど歌にもならぎ夕くれてのぎに小雨の音ぞさびしき。

たのまれぬなくさめことをたのみつゝ淋しう笑ふ見るぞかあしき。（妹やめり）

夕日さすまとに柞とる少女子のたのしきの色のうつくしきかな。

梅さかぎ櫻ひらかぎ柳さへまたいろわかき盛岡のはる。（都の友時候をとはせけるに）

蝶を追ひ若菜つむべく我は來ぎたぐ偉いなる岩手山を仰がん。

白壁の村長の家ろれとわかぎ今まさかりの花の夕ぐれ。

こゝをとひむかしの色を花にみて苦むす岩をすぐかになでぬ。（菩城の春）

まつわびしあすは休みて更たけて窓のさやきのこゝろもとなき。

おきてなれは君に手向けんすべもなし公園の花いまさかりなり。

朧夜にろでかはすべくちぎりしを花にさきたつ君ならんとは。

よばへどもこたへはあらずひやかけき碑にむかしく涙そゝぎぬ。

いざさらばまたとちきりて我たてばもくれんの花白うちりける。（以上四首吉田兄の墓に詣でゝ）

はなちらふ春の夕をおとろ〳〵なるかみひくゝ天神のもり。

ちるまゝに袖もはらはぎたぐつみぬくれゆく春の花の木蔭に。

鐘樓に櫻みだるゝ夕まくれ蝙蝠一つかげおぼろあり。

野にゆく子細路折れて菜の花に小さき手籠の見えぎありたる。

かやぶきのかどに桃あり白き赤きたがやどならん柞のねぞする。

築山をめくりてさける山吹にあやふきばかり露のおきたる。

をみれ三つたんぽゝ四つと乙女子が籠のそきつゝ川沿をゆく。

岩たてり巨人の如しつゝじさけり乙女に似たり穴口の山。

青葉ふくろよ〳〵風にもるゝぬのさても老ひたりあはれうぐひす。

坂路を四十の健兒こゑあげてうたに越えたる勇ましき哉。

かやぶきのつゞくあたりに白く赤く梨ところどころ桃ところ〴〵。

まばらなる松にへだてし片富士のかのいたぐきげに
玉の如。
霞閉ぢし松原遠く日は落ちて橋の上まよふこほもり
ひくし。（以上三首繋の湯へ校長と行きて）
何故に深き患に沈むらん若き血しほのみちてゐる
身の。
葉さくらの梢に渡る鐘さびし雨にくれゆくこの夕ま
ぐれ。
雨しげく雲は幾重に閉ざしけんいよ〳〵とほしふる
さとのろら。
後園に山吹ちろふ夕雨にたえ〴〵になく郭公を
きく。

何時までかもの思はする雨あらん袂つめたき葉櫻の
つゆ。
鯉おどろ池邊にあやめわかくして青葉しぐるゝ五月
の空。
いかにせん牡丹くづるる五月雨になぐさめがたきむ
ねのなやみを。
罪にわめて浮世のこゑのつらき哉月靜かなる葉がく
れにして。
夏草をわくるたもとのうるほひて神の惠みの露ぞ
尊き。
とざしたる紅うすき口びるの動くと見えてさて冷
きよ。（妹ゆけり）

母上のみはかの花をながためにに手折手向くるわが手かなしき。（母上と妹とのはかに詣てゝ）

覺束ゐ再びみかほ仰がんはとばかり思ふかなしの別れ。（先生を送るとて）

木枯のねにのみなれし枕にも今宵ばかりは夢やすからん。（及第の知らせ來ぬ）

やせたれど皮下の血しほはまだぬくしいざ指かんで義の歌ろめん。

小半里

日は赤し雲行く空のさて遠き旅路の十日歌あらぜ〳〵。

ほがらかにさゆるひとふし今日もとて今日も野にゆく友のあみがさ。

ちさき花野の花色はこむらさき人に似たるとろの日の日記に。

手にとりてさてまたおきぬ細き笛月白き夜を雁北にきく。

丸窓にこのひとふしよさてきよき仰くみろらは星まばらなり。

などほろきさはれきよけきこの夕あゝむねのなやみあゝ秋の聲。

いあむしろゆく水ぬるき野に泣かんこの子にたにず市の朝風。

桃いろぞ次

聞く人のなきにうらまんわれよはしとはにきよかるむねの小琴を。

このゆふべ南に急く雲を見て星のあやみをつらしと思ひぬ。

よはき身を秋にゆだねん故知らぎろの雨ろの風皆むねいたき。

この秋をあきて送らんわれかなし今日もまろでのなどかくもおもき。

さあり〳〵とはい〳〵神のみ國しらぎ世なりし君のみ胸なくのみ。（友を弔ふ）

堂のくれきざはしおるゝあしたゆきに秋のしぐれのかほに冷き。

とひますか虹うつくしき夕ぐれをたゞやすかれのゑんじむらさき。

かへりみて五日の月にほゝゑみぬ駒のせながら手綱さむきよ。

何にとひなにゝこたへんなやみとも花のゆられのけさもましろき。

リボンにはふさはし色のもゝいろの夕の花に人なつかしき。

強ひますあ、もだへ〳〵てもだゆる子強さは世なりよなりといはん。

たけきとくお柴若き鬼あざみその美しき夕風のゆらぎ。

くづの葉のしばしのやどりなやみおほきろれも運命（さだめ）のあしたふく風。

そのもすろまひるうつらふゑんじいろやみのしづくやさやけかりしに。（露の女に）

（小半里と桃色染とは桃色集にのせしもの）

ろのみてにとらんの願ひろの肩によらんの願ひ清きみとせを。

一人居てひとり故郷の鐘をきくあせしよ十日ろでのもこいろ。

赤ほしのあしたのゑまひ力あり仰けよ今を草青き野に。

うつりかの高きに醉ふか歌の筆リボンの色は紫なら忠。

猛き子の火筒なこめに風渡るあしたの野邊にたゞ草あかし。

この秋にえしらぬにほひそらにあり晴れしよ三里朝の松原。

火筒さげて花なき野路の露に見ぬ人は清きを何にとくよゞ。

このいたで昨夜の痛手くるしくも魔の子集ふか腰に太刀あり。

太刀とりて人の血吸ふと人の子の狂ふあしたよ神い
かに見し。
今宵ろが月の雫にふれて見ぬ、かくての後の我れや
いかあらん。
涼たしの流せゝらぐろれといふか、かいなましろに
君か衣すゝぐ。
み鈴かすか鳥居はるかに鳩むれて秋たろかれぬ住吉
の社。
傘の手に花もちろへてかさとぢてみ墓に近くびんの
ほつれ毛。
うらぶれてうらぶれし身の草の床ころもの露は星も
やとさず。

ろこにたゞ平和の色をたづねんか左り小川に萩みた
れたり。
岩のほとり乙女の姿乗せてめぐる秋のたくみのたか
き小川よ。
秋に居て何を猛夫の身にとはんあけの紅葉よ野あり
山なり。
うなだれて何をあやみの朝ぼらけリボンの色の紅な
らぬ君。
本堂にみ僧の誦する經かすか後の庭に雪くづ
る音。
里あれし十日の心忘れ得て寢臺の夢になほたどり
つる。（歸校の夜）

さりながらゆるしたまへの胸の聲君には小さささゝ
やきながら。

一人行く野路のはゞきに歌知りぬ雪美しき四里の
松原。

たどりゆく路の三里は雪にして何にほゝゑむ若き人
の子。

み袴の雪に織らるゝ傘の人たゞ清しとはわれのおも
ひか。

み手とりてあしたの欄に指ざせしろの野その山たゞ
ましろなり。

雲は北水は南にわれは西流れながるゝ冬の夜な
りき。（懐舊）

青き黒き雲紅に収りて初日すゞかに世にのぞみ
ます。（元日）

雪のかささゝ手にたゆき朝の路うつくしたかし下げ
かみの匂ひ。

軒の雫數へながらに夢に入りし熱き眠りを思ひでゝ
泣く。（雨の夜母を思ふて）

南窓に椽板五寸そとはねて春よのもろ羽輕うたゝ
きぬ。（雀を）

ろぐろなり春なき年を三年經ぬなほこの上の秋をな
く身か。

一雫また一雫冬をとひてのきばに近う風かぐは
しき。

あよ風のあや丸のかげに袖ふりし夕のゑまひまぼろしになほ。（妹のうせしを）

野にひとりはぐきつめたき雪のろら友よのみこゑさてなつかしき。

里の夜をみやこおどりの少な君何によらんの世と知りますか。

今宵野に神よぶ聲のさゝこゑの經誦そる子はわかき子ありき。

窓による夕の頬にうれひあり鐘のねきゆる木枯のこゑ。

馴れし手の春をとひよる身ならねど撞木のくさり今朝もつめたき。

力なく七つ數へてたゞつめば鐘さあがらにわがかげ錆びぬ。

鐘樓に人のけはひの霄月夜紅梅ことになつかしく見し。

あはれなりたがわかき血をたきらする弱くも沈む臘夜のかね。

いましばしろの手をわれにゆるさずや六つはつくべしかすかありとも。

うめき强うさめよの聲のもるゝ軒ににこげみたれぎ鳩二つあり。

もゝとせよ老ひずといふかさらばなど春の涙を人に敎ふる。（以上八首鐘を歌はんとせしもの）

磯鶏

下閉伊郡宮古と云ふに、推古帝の皇子故ありて移され給ひしが、御歎のあまり海に失せましき。御尸を探し奉るに古老の言により舟に鶏をのせたり、その鳴きたる時見いでまつりしと云ふ。その地を今磯鶏と云ひ、里森と云ふは御陵の地なりと古く傳へたり。

一

風迷ふ雲のたゞよひ、
低うさす日影みだれて、
松の針葉、山毛欅の廣葉、
幾千年ひろごりの領。
蔦分けて籠る貴人、

おごろかに清きみ姿、
八百草をぬきんぜる、
白百合の威あるが如。

閉伊の里いぶせき濱邊、
何事のみ暗示ぞ、
神使天降ますと、
一浦の蛋子はまどひぬ。

み仮屋の圍り幾町、
童のうたはたいたり、
漁舟ともづを解くに、

まづ此所へ祈捧ぐる。

二

悼ましのおん姿、
み髪あぐる奴婢も召さで、
和妙の唐様づくり、
畏しや右衽とも分かぜ。

黒木小屋荒菅の、
結葛ゆるむ柱に、
力なく憂をよせて、
貫緒絶てる玉のみなみだ。

奥とのみ歌に見し、
皇子の尊号禀けし運を、
罪負ふて遠流の恥、
刻むべき地とは知らんや。

百折ゑぞのむぐら路、
草枕幾夜いくよ、
夢のみは都へもどれ、
顧れば身は北に千里。

かほる帳のおばしま、
たちちねのみ影は消えぬ、

花月夜かざし連ねし、
袖の香の戀もほろぶか。

三

鬼あざみ、えぞいばら、
霜に狂ふ配所の荒び、
恨む如日はおちて、
虫さらに哀をむせぶ。

露わくる玉の白脛、
尊しや皇子はいづこへ、
この闇に獨りまぎれて、
うなだれしみ姿細う。

海面は黑うとざせど、
波の音は心臟に應えて、
秋に居で憶腦にやする、
若人の血汐たぎるゝ。

名と榮と世には剝がれし、
空し身を友うる魂、
何處にか光明もとめて、
慰安にふれんの悶え。

冷たきに御手を汚して、

まろぶも小石み袖へいくつ、
松が枝のゆするゝ振動、
あゝ暗に何の水音。

いぶかしやこの晴に、
鰯舟こぐも見えぞ、
浦人は聲ひろめく、
眉おもく磯につどへる。

悲しやな皇子の最後、
波頭くづるゝ花に、
はかおくも散り給へると、

おさへ得ぬ涙のかたる。

霊禀けし奇はし雞、
御尸たづねまつれど、
辟に傳てし古言たのみ、
舟並めて浦々めぐる。

青潮と寄せし磯邊、
雞の胸毛ろよぐと見れば、
とさか揚げてさえし長鳴、
一刹那あみの手應。

車形、瓢づくり、
賤の民式もれぼえず、
陵も名のみにて、
黒森や永久の汐風。

（三十七年七月作）

すゞりばこ

別るゝ涙ろゝぎつゝ、
對の一つを賜ひしが、
筆ひめしまゝ硯籍、
墨の香遂に消あんとす。

露

蓋にむなしくれく塵に、
指もて君が名を書けば、
卷繪の草の花もれて、
ろの日の笑みに通ふ哉。

はかなき露を碎きては、
ま袖しば〳〵重かるに、
あゝ幾年の花雫、
春を冷く惑ふ身ならん。

（三十六年七月）

あでゐるそでに照り返る、
新葉は末のたまのいろ、
もしも蘭麝の香をろうぇば、
うつたゐがらのまたまでに、
うつしか、あわくまどはんか。

消ぬべきひるを、とかなみて、
木の葉、くさのは、蔭のかげ、
ひろむ繁みは深かれど、
月にむつびし後朝は、
われから我にさ光かねて。

人のうたには名をよばれ、
人の運命に身をとかる、
かよわきむくろ忍びえで、
まろびしよゝの花片に、
悶えのゐみだたれかみし。

（三十五年六月作）

手向草

七月とは忘れかぬる月よ、母なき子は淋しふも詛ふる頃、
命日とての手向草、何の露にかぬれけん。

五年越して今日の日を、
むかしと忍ふ宿世の子、

ありしは白き卯の花ぬ、
涙にあせしいろとのみ、
押へがてなる胸の手に、
皷動みだるゝうるひ哉。

たちて五尺の男の子、われ、
み手柔かく撫でましゝ、
下げ髪ひくきおもかげの、
いにし瞳に返るべく、
葉蔭たづぬる露むらに、
甲斐なきそでも絞りしか。

世をかたくなにあくがれて、
我から迷ふ木下闇、
幾度罪につみを見て、
尊き涙さそひけん。
あゝ不幸の兒、我遂に、
とゝのみ眉をとざしゝき。

遅き香なるよ狂ひ咲、
誰に見よとの黒きろで、
夏草分けて尋ねよる、
碑たふにちからなし。
終のさだめにやぶれたる、

叫びに堪えぬ悲しの身。

（卅五年七月作）

落日賦

自らとりし右手の鞭、
蹄の音は高くとも、
たてがみ縫ふて吹く風に、
緋櫻ちるや夕がすみ。

紫裾濃、綾のそで、
華やかなりし狩衣も、
幾夜の露に床なれて、

くぐり緒もろき朝の風。

今日は越にんの山の峯、
何を秘めてか、くもふかし、
峠十里の石路（いしみち）を、
嵐にそにて雨やふる。

明日は何見る命とも、
心細きの笠のひも、
占めて二寸は端（はし）ながき、
衰へたりあほゝの肉。

削立十丈岩の角、
袂にふる〻無名草、
肱を寒くなめて去る、
風はいづこにもる〻音ぞ。

＊　＊　＊

瘦骨五尺秋に居て、
破鞍むなしく繕はず、
ゆくへの天の高くして、
霜はさながら袖を刺す。
今、落日に笠すて〻、

わが敗之を知るときに、
ふるさと遠くみかへりて、
丈夫あはれや涙あり。

うらみてしわがふるさとも秋にきて今落日にそてしほるかな

上田秋風

（卅五年六月作）

懷

被衣にもる〻眉深く、
ろと、はぢらひにゆらぐ如、
彩は皆がら紅に、

霞を透て花の夕。

誰ぞや紅蓮の萎む如、
素綾の袖に額おひて、
千筋漲る背低う、
戸細に髪とまぎるゝは。

★　★　★

眞白琴弦一筋に、
羽叫び聖う白銀矢の、
夢にこぼるゝ響にて、
心臓の血汐は湧き覺めぬ。

花片に溶く、春の嚥脂、
美しと見したゆたひを、
ふれしともなき唇の、
もゆる焔は秘むれども。

暗に流るゝ星に似て、
光りうつらう卷雲の、
渦卷くなやみほどき得て、
あゝ狂はしの物懷ひ。

（三十七年二月作）

秋風

その生の萩のさきしより、
千草にすだく虫の音の、
いとゞあはれに聞ゆなり、
秋の初めや告ぐるらん。

やがて夕日の山の端に、
かたぶく頃に杖とりて、
小田のわたりにさまよへば、
吹きくる秋の初風の、
肌へ涼しき心地よさ、
ものにたとへん樣もなし。

田の面はるかに見渡せば、
何處も同じ吹く風に、
黄金色なし波立つて、
豊けき年を示しなり。（三十二年頃）

鄕の山（未定稿）

平野を限る双胍の、
東と西を司る、
王者の權や、威や、德や、
象（かたど）りよせる崇容の、
男神女神と顯れし。

男神はろれか、早池峯の、
白玉かざる冤冠や。
凛たる相の高くして、
從者（ぜ）と統べたる連丘の、

頸もたぐるものもなし。

銀糸輝く玉衣、
錦白妙の裾ぼかし、
瓔珞ゆらぐ眉の間、
ゑまひに籠る愛と、美の、
實に女の神よ、岩手山。

男神の山に風あれず、
女神の瑞袖のべて、あたゝかく、
園ふ沃野のみ園には、
花の香薫んじ、穀富みて、

平和をこむる水と香を、
水晶つゝぐ太線に、
平和と平等こゝに見る、
北上川と流すなり。

× × ×

瞳にあまる自然美や、
あまりに清き大景の、
調ゝき歌にのらざれば、
暫時はせめて手を拍ちて、
この天然を讃美せん。

潜水艇（未定稿）

一

「潜水艇てなに、」

母ちやんが初やに、新聞のお話をしてる所へ、突然に驅込だ太郎さんが、問ふた。

「靜にねしお前また軍ごつこかい、」

「僕は、母ちやん今日も大將になつたんだよ。露助の大將の負坊をさんざんこらしてやつたらね……

「もう良いよ幾ら大將だつて、お前の樣に乱暴ではいけませんのよ。」

「だつて日本が強んだもの、この間もお父さんは旅順口でお手柄したんでせう。僕も大きくあつたらね父さんよりもにらい大將よなるのよ。」

太郎は潜水艇の事は忘たように、太將々々つて強がつて居る。

二

「潜水艇てはなに、」

と、にはかに思ひ出して太郎さんは問ふた。

「ホ、、、今お話してあげるから、こゝにね据なさいよ。

母さんはろれから潜水艇の事を語り出して、海の中を潜つて水雷を發射する舟であること、敵の軍鑑に見付からぬことから、日本にはまだ一つもないが露西亞にはあると。今度東洋に二つ程持て來ると云ふことが、今日の新聞にあるのを初やに聞かして居つた所であつた事まで、永々とね話した。太郎さんは熱心に聞て居つたが、さも不平そうに顔をふくらして、

「何故日本に無だろう、早く拵へりやあいゝのに、」

「でも日本ではまだ研究は足らないので、ろう急に拵ないのですよ。」

「だつて露助がそれを持て來たら、日本では負けるんでせうよ。」

「なんだねろんな弱いことを、露西亞では舟ばかりあつても種々日本よりは劣てるのだから、大丈夫なのですよ。」

三

「研究は積ないつて大工はないのかしら、」

「ホ、、、お前研究と云ふことが分らないの、艇を造へるにはね、たゞ大工や金ばかりあつたつて出來ませんよ。色々の學問から考へてゞなけりや、外のお國でも十年も廿年もかゝつて出來たのですと、日本の學者さん方はもつと立派に拵へようと、今しきりに工夫をおすつておいでゞすのよ。」

「でも今艇がおいんだと戰に敗るんだもの」

太郎さんは腹立しげに、母さんの顔を見つめながら持て居だカステーラをむりにもみおした。母さんはなほ話を續げて、たゞ力ばかり強く勢ひがよいばかりでは何にもならぬ、一生懸命に勉强して學問を修め、ろの上に强いえらい働きをしなければならないし。敵の艦を沈めたり、敵を敗つたりするのは勿論豪いけれども、器械の樣なものを發明するのも一段國のためになるのだと。話して終りに、

「だからお前も毎日軍ごつこばかりして、强がてはいけません。精出して勉强しないと、れ父さんの樣になれませんよ。」

太郎さんは深く感じたれも持でうつむいて、おとなしく聞て居つたが。

「僕は、潛水艇を發明するんだ。」

と母さんに言ふでもおく獨りで叫んだが、

「母ちゃん僕は勉强してゝらくなりますよ。」

とにつこりした。母さんもさもうれしそうに、

「よくれ言ひだつたよく勉强することです、お父さんに賞て頂く樣にね。」

四

海軍中佐……太郎さんのれ父さんのお宅には、極く良いれ庭がある。今丁度お池

に臨んで美しい櫻が崩る樣に咲て、すみれやげんげもまだ賑かに下を飾つて、蝶々の白いのがちやぼひばの間から來かと思へば、黄なのが雪見燈籠の窓をぬけて來る、まことにい〳〵景色である。

前刻からこの築山の小高い、ろこは海の遙々と見渡れる所に据て、太郎さんは一心に本をよんで居る。

『桃色』六卷の首に

いまのも〳〵いろ、我等はこれを野のなでしこにみる。露といふものあり、彼に秋の涙を教ゆ、風といふものあり、彼に秋の悶をさゝやく。さはれ愛らしの撫子、ぬれては色におおり、ゆらぎては香にほこれり。あゝとはに美しき色よ、君と〳〵もにその花片に、うたうたはんか。　（三十五年八月）

たらちねの君のんざり給へるを悲しむ

あはれ情なきはかなきさそが中に、いとゞはかなきものは人の玉の緒にぞあるらめ、朝に生れて夕べに死ぬるてふかげろふのそれおらで、今日まめやかおる人も明日は頼みがたきぞ悲しき。されば古しへの歌人も夜半に嵐の吹かぬものかはと歌ひ、あしたに紅顔ありて夕べに白骨となるを説きし法師もありとかや、まことにことはりなるぞかし。あはれ思ひ起せば涙の種なれど、今年文月末つ方の廿五日と云ふ夜半にてありけり、たゞちねの君には產けつきたまひけるが、そを種といたくいづたきましまし、かぞの君を初めまつり皆々いみじく心を痛め、藥よくすしよとあつくいたはりしに、其甲斐もなくいやましきはどしふありてくすしも眉をひそめけるが、明くる廿六日の朝まだきあの世の風に誘はれて、もぬけのからや空蟬のかばねを遺して、夏草の葉末

にやどる露よりも、もろくかむざり給ひける。

あはれ此時の我等が心や如何なりし、聲を限りと呼べども答へぢ、叫べどかへし言なかりしぞうらみなれ。いろねの君もいろと等も諸共にいたくきへまどいて、時おらぬ小夜小雨を雨のたもとに絞りけり。『一度はかくあるものと聞きしかど、昨日今日とは思はざりけり。』いかになげき悲めばとてあの世に行きし人の、再びかへるまじ今は唯なき跡を弔ひてよゆ先なげきぞと、人毎にさとされて實にさもあらめと答へしも、戀しさ悲しさ一しほ増りて胸もさけむ斗りなり。ましてや我れ此世に生れて拾七とせのそが中に、受けし海山のみ惠を、一つだも報ひ參らせざる不幸の罪も空恐ろしく、食も咽に通はぢなりぬ。さてみよりの人どち集ひて、あれよこれよと心を添へてかりもかりをば終へ、明くる日ぼだい所より僧きたりて野邊の送りをすませけり。

あはれなきがらにても家に在せし時は、心強くもありけるを、今日よりは彼のいぶせきおくづきの土に抱かれて、草業の陰に入らせたまひけるかと思へば、うたゝ悲し

さ増かゞみ。いむせきの某の帝の御時の殉死とやらのそれおくに、共に消へ失せたきまで思ひまどひて、朝な朝な手向くる香花よも涙の注がぬときはなかりし。『ともにめでし垣邊にさける夏菊を、手向くるだにも涙なりけり。』涙の内にも日移り七日の法事も終へければ、みよりの人どちも一人去り二人と行きて、早やすめり勝なるかろの君とかよわきいろと等のみとおりぬ。悲しき時にも數多の人の居る内は慰む種もありけるを、かく家の人のみとなりければ、さびしさ言はむかたなくあはれひとしほ涙を降らす種とはなりけり。

『今更になげくも甲斐のなけれども、慰めかぬる我心かな。』からを鳴立つあしたにも、寒蟬聲し夕べにも、さては風吹く小夜中にも、むねに浮ぶはなき人のことのみ。千條百條とちれひちみだるゝ麻のろれおらで、うたゝねの枕をぬらしあらゝけく夢を結びし夜はたへず、ましてやいろと等が幼な心のあどけおさ、なき人を慕ふて泣ささけぶ聲きく時はむねに針打つ思ひして、覺へずもらひ泣きにもろ袖うろほしことも幾

度なりけむ。好める書にてもよみてうき心を慰めばやと机には向へど、にくや涙の眼にふさがりて文字もさだかに見えもせず、文かゝむとにも筆にぶく我と我身をもてあまし、窓を開けば園生の松千年もかへぬみどり葉の、風に任してゆらゆらと、動くを見るもうらやましくも又ねたまし。『庭の松汝れがよわひをなき人に、ゆづらばかくもはあげ　くまじきを。』

あゝ過ぎ行く月日に關守おく早や四月余りの昔とはなりけり、長の月日を送るまにまに思ひ忘るゝ節もあるらめと、思ひし心せあだなれや月の夕べや花のあした、風吹く雪も雨降る夜半もありし昔の忍ばれて、夢にもうつゝにもはたまぼろしにもおき人の在ましが如き心地して、いとうら悲しく思ひ捨てなん術もなきぞ、いとゞちらくも又悲しけれ。

（三十一年霜月十二日稿）

朝顔の記

（未定稿）

今朝も咲いた、昨日の朝も。ろうだ毎朝々々咲くのだ。僕が初めて此所に眠むつた第一の朝から、一ィ二ゥ三ッで廿六朝眺めたのだ。露ばんで生々した心臓形の大きな緑な葉は、日光を待ち設ける樣に上に凹んで並んで居る、其網狀脈がありありと見えるる。こんな群りの葉をぬきんでゝ、例の紫と赤との花が二つ三つ一つとくつついたりはおれたり咲くのだ。ろりやまことに美しい。

たまには數を指折るともあるが、大低三十内外だ。この頃ではメッキリ丈がのびて、最寄の雜木に這ひ上るのもある、實に可愛い。

揚羽の大きな麗しい蝶がくる、ろれが始終花密を吸ふて居る、これが若い戀の媒人か？　それも姫あげはなどは床しく思はれる。と言へば又熊蜂（くまばち）の奴なども見える、この無骨奴矢張花の側ではにくゝもない。

朝顔のうた。

茲に廿日美くしと見し朝な朝な言葉はおくてあこがれ心。

紫にべに雜ぢらひの花がすり清き氣三時我興のおごり。

ねたみある花の八重ひら百重ひらいつはりあらぬ一重四滿かに。

調にのりて世に聖き譜の歌と化らば花殼永久の運命。

得てちれ。

若うして小さきほこりの才に馴れながく盲ひし朝顔の彩。

暫時とも自然を讃めん露の色聽けさゆらぎの歌あるが如。

枝にして參らす術も候ろはゞ破れ垣たゞに奇しと言さん。

小弟が數ぞへもらしゝかくれ花一つにかちて赤廿六。

（三十七年秋八月廿六日）

歸りみち

その日山あろび、行くときもかへるときも、一人と一人、さはれ、慰め多き一日なりき。記を作らばやとは、かりろめの約ごとなりしを、筆まめなる友の『山サェク記』は、はやもいでたり。夏に入りて一層澁きこの筆、「かへりは人の」と、しるされてはさしがに、運ばゞにやむべふも覺えられゞ、て。

一

岩行く水は松を鳴らし、黄葉若葉路を擁して風重し。

新山堂を後に、一町二町と坂路曲りて、折れて四度目。瞳にひろき、景ある野。雨後の靄北より南へと灰白なり。

二

世にいふ白糸とや、ろれにはみだれを見ぜや。布ざらしとや、そはあまりになへならぜ。名づけ得たり、幣懸の瀑!!

春に、夏に、秋に、冬に。とこしへ捧げし、さながらの白幣。まこと神々しくも仰がるゝ哉。苔をにじりて岩に立つ二人。こゝには、躑躅(つゝじ)の紅を説かじあ。微風ひやゝかに、肩を撫でゝ去る。

三

誰やらの詩に、彩雲と見しその紫。その一枝、右手に捧げて笑(ゑ)まひぬ。こは傍の人の

分ちたまへるなり。ふさはしきは、羅紗の細き袖よりも、み袴掲げし人にところ。ほとゝぎす、しきりにあく。人は何とやきゝし、共に言葉はなくて……二人は再び紅にもつれて、つゝじの香を乱し行くなりき。前なりし人濃き色のそれを撰りて、彼の紫に交にたまへり。さりとは飽きたまはぬ君よ……あだには折りたまはぬとや、さなり、よき調和にてありけり。樸倣とか、汝も小兒とゆるし給へと。花群まさぐりて、得たるは小さき枝ありし、淋しき花なりき。君よこあたざまのろのみ目、笑ひ給ふな。

四

卯の花、ところどころ青葉を黙じたる里、籬に添ひての細路。葉がくれに折るゝ所、寂たる一字……二人が歸途の目的ある、實相寺こゝあり。杉の木まばらに、後より前を圍みて、幾坪と見計り得べき廣からぬ庭。意を用ひての園造りにはあらねど、苦は、青に、黄に、障りなく閉したる自然の趣、此處に叶へり。戸を叩いて、物頼ふ……

……微あるいふへ、幽なり。

み僧は眉のびて老ひませり。二人の願へる言葉に、うなづきて奥へと立ちぬ。再びいできませる時、香高き茶を賜りて、さて、小さき綴りを示したまへり。このみ寺の由來ども、ものせるそれなり。二人は笑みぬ、滿足を笑みぬ。

五

日を荷ふて歸る肩と肩、雨の靴、乾きて、紫と紅と、花やゝ衰にたり。

例の君は、路に幼兒を挑みて、欲しからぢやといふに答へなくて、たゞ意味なげに頬くづれぬ。一年の都住居、すみれ籠せし、リボンの君を思ひ出でなば、あやなくも興薄かりけむか。さはれ、野に近き兒、花に馴れての業あらむ。一里といへば里の學び舍。素通りもと、尋ね寄りて、師の君達と山がたり、こゝにも時計は一めぐりしぬ、……午後の三時半、人と別れの赤林。この上の三里は趣なき靴の音か……(了)

(三十五年七月『桃色』掲載)

虫籠

(未定稿)

行く秋を虫の音になれて、霜のあかつき袖摺れの風も寒しとも思はぬ身。野菊の一束採りての儘を、机に投げて萎み行く花片と花蕋に、歌そ浮ばぬ枯瘦の想。味氣なき世潮にうらぶれの歎を重ねては、熱き血汐も冷えやしぬる有情の墨をこほして、唯が身の上に哀を問ふべき、淋しくもはかなき思ひを捨て所なきに、あらぬ悶えを沸かしめて、我れからかたくなに馳せて。秋とは何處花も草も何んの詩に入るべきと、白けたるはこれも憐にもれぬ數なるべし。

影を掩ふすゝき一もと興に足れり此の子廿年酒ほし
からぢ。

夜のうちは虫に貸したり花の宿晝來ささぢや玉露
の君。

湖に秋をとらへて歌によし今宵の月を君來る夜まで。

せまき庭されど菊あり虫もよし芋煮る妻の若きまなざし。

此所に得たり君へ分けんの香ある草秋を二百里へだてたる今。

○

豆の子一夜莢を脱れ、
まろび走せたる芝の里に、
身の束縛を解かれても、
若肌寒き風をかこつ、

○

無名の伶人集ひ〳〵、
まひるひそかに樂を談る、
松虫こうろぎ鈴虫の、
自由の天下あゝここにあり。

○

雲はびこりの朝ぼらけ、
星榮華なる眞中夜、
讓るを知れり謙るあり、
わごりに非ぢ晴の青空。

野の中の草の中、友と友との車座、風折〳〵筆を吹くも嬉しく。林檎の赤きをめぐりて、詩の種を探かも面白さ、此風流は古人の知らざる所、今人と我等を除いてはあらぢ、清雅の會合、永久の壽を爾に與にん。

此所に四人秋を領ずる筆の香や我世の笑みを新しくせむ。

（三十六年十月十一日櫻山の松蔭にて）

魂祭（未定稿）

蟬の聲まだ勇ましけれど、きりぎりすのひそやかなるも洩れて自然は秋に入れり、今日より千蘭盆といふに萩の花も綻びたり。

千蘭盆の魂祭とは、お正月に次ぎて興あるものと事なき頃はよろこびもしけるが、新らしき位牌にかしづく身は言ひ知れぬ悲しさを覺ゆるなり。

父上も母上も民ちやんともうち連れて來給ふべきに心して佛間を飾らんと、弟妹に諭せば何れも嬉しげにうなつきしが、流石は淋しき笑まひおりしよ。祖母樣と精出してれ膳を拵へんと十なる妹の云へば、昨日野邊より桔梗を折り來れりと八なる弟もほこり顔なり、十三を年上に四人の弟妹何れも腕白盛りの御飯時も忘るべき年頃を、あはれ盆踊の太鼓に耳もかさぎ、かよわき小手に手向けの調度するいぢらしさ、さぞ佛樣は喜びまさんと祖母樣もほめたまひぬ。

昨年は母君と小妹を失ひ、今年はまた父君と姉君も在さず、一年毎に濕めり行くわが家の千蘭盆よ。健かなりとはいへ八十を越えての祖母樣精出してといへど、十才の妹覺束なくも整え給ひし今宵の莚、尊くもいと悲し。

宵に入りてみ墓に燈奉る習慣を、今年も提灯四つ購ひしが、大なる三つは先祖樣と父樣と母樣と、小さき一つは妹へと中兄樣の撰べるなり。香もろうそくも持ちましたマッチも忘れませぬと、万事用意は弟妹の受持にて祖母樣の分をも拜みて來よとの、祖母が語に送られてみ墓へと行きぬ。月の光、草の露、何とはなく秋の情を動かし、袖の摺るゝ風の弱ささへ身に染みて淋し。

我より先きに人ありて、あちらこちらに三つ灯の見えかくれして、夜の奥津城ひと

しほに寂たりし。袖圍して黙ぎたる提灯を連ねて、五人はひとしく額づきぬ。

涙の跡も見えつべきあゝ新らしき石碑、香の烟ゆるふもづれて鈴虫かすかなる所冷たく永劫の瞬を閉ちて在すらん、三人のありし面影いかで思ひ浮べざらめや、暮しの父君、懐しの母君、いとしの妹よ、繰ひろぐる繪卷物のそれのごとはてしもなく聯りて、何れ涙の種ならぬはなし。取殘されし兄弟は今年と年を重ねて丈ものびたり、學問も進みぬ、たゞ一目との甲斐なき願ひにわざと校服を着けたるに、墓標默して撫ずればたゞ冷たし。雪寒き一昨年の十二月二日、今日こそ晴れの場に望まんと云ふ朝祈を捧ぐる神酒まで整へ賜ひて我が身壽き、試驗を終えての歸りを待ち兼たまひて先づ問はるゝ成績の豫想を、あまりには劣るまじと心に待ちぬるまゝを答へ奉りしその時の母上、丈も等しき我兒を懐かんばかりによりそひて喜びたまひしを、やがて確かなる知らせ得て一しほみ心を慰めんと獨り勇みてありけるに、あゝ何事の禍ぞ、一夜のいたづき急性の惡症と醫師に診斷せられて、一家の騒驚き慰さめん方なく心を盡して

みとりを勵みしも田舍の悲しさは、豆腐屋酒屋こそ近くなりたれ名醫を呼ばんには三里を走せて市に請はざるべからず、人の足にては覺束なく肥えたるを撰びて馬に鞭して急ぎに急かせし甲斐もなく、明くる朝のすのこめ頃北三町の堤までお醫師樣が見えられたりと注進ありし其刹那。あはれやはかなくも我母上は空蟬のもぬけの殼、一族の溫き涙を注ぐも熱き血を循り返すによしなかりし里余の暗路を、草履にて馳付け給ひし姉君を合せて六人、母なき子は相擁してやるせなきなげきに沈みぬ。夢の如く現の如く野邊の送りも終えての翌日二寸角もと見ゆる朱印おしたる端書は着きぬ、遲かりしよ及弟の知らせ、せめては一目母上にと今更に腸も斷れんばかり悲しかりき。嬉しかるべきものをなけくもせんなしと父上に勵まさるゝ昨日今日、涙の内にも月は移り年も變はりて我が入學の期となりぬ。常に增して懐しき祖母上父上弟妹と別れて盛岡の客舍に入れり、新入學の窮屈さ學課の繁雜に、花とも云はず春を過ごし、若葉の夏に卯の花白き頃唯一のたのしみとして待ちつゝある父上の便ありき、急ぎよみ行く半

よりあゝ我手ふるひ我目ちらつき遂に讀み得堪ずなりぬ。あまりの意外あまりの哀事あゝ愛らしの妹よ、なつかしの妹よ、母に別れて小さき胸のいかに淋しくかこつけん、さらでもかよはき生立ありしを、ふと熱ありしある夜より遂に枕もあげ得ではかあき旅に母を追ひしか、あゝさるにても一度は病の襖に尋ねまほしかりしに、學窓の身に餘りの愁を強いかねてわざと知らせざりしとの父上の御理りの程はかしこけれど、弱き情の狂ひてはうらみの言葉ももらしけり。あゝ雲迷ふあしたにじ淡き夕、我れはしばしば味氣なき妄想に驅られて我と我心を喪ふばかりに悶ねぬ、咲き秀てたるあやめに歌あらずやと問ふ友もあれど、我は先づ手向草にと思浮ぶを如何にせん。一日も早くと願ひし夏休となりて人にもましていそ〳〵と家にかへれば、思ひがゝりにや何とはあく物淋しき心地して喜び迎へ給ひし祖母樣、父上樣、さては弟妹の笑顔も何處やら浮かぬ色の潜める如く感じぬ。祖母上は年寄の事とて殊に涙もろく妹のありし樣を物語られつゝむせび給ふ、甲斐あき事に歎くも佛樣の爲めにもあるまじなど互にはげ

ましあひて、この數日は春より以來稀なるまどひに樂しさを味ひしが、惡魔の手は何時まで我家に纏ふて毒を逞ふせんとにや、今度は家の鎭めの父上を病の床に捉へられぬ。五日七日と過ぐるまはよくともあく惡しくともなく在せしが、醫師は常にかりろめあらぬよし警めたまひし、されど〳〵二週間目の診斷にかくも悲しき宣告を下さるべしとは思ひ設けざりき。實に思ひ設けざりしに、あゝ我父上は肺結核に罹らせ給ひしと云ふ……

もとより勝れて健かなる身にも在さじものを、かゝる恐るべき病を穫ては賴み少なきは十指の指す所、一家擧りて新しき悲歎の洞に吸ひ込まれぬ。我身にかへてもと祖母上の悶に給ふも理りなり、幾夜の手枕夢もなく心を盡し力をきはめていたはり奉るに、効は少なくも昨夜よりも今朝は骨高くあり行き給ふぞうたてき、母上の世を去り給へるより何くれとなき御勞れの積りしに間もなき妹の病、いまはの折までみ手一ッにみとり給ひしと云ふは如何にみ心を傷めみ体をそこなひ奉りけん。永き疲れの高じ

たる隙をぬらひし惡魔たやすく追ひ拂はれべくも見にざりき、未だ初期なり手を盡さばさ程の事もなかるべしと醫師には慰められるれど、牛乳もソップも日增に量少く召し給ふ心細さ人知れる涙は抑へがたき胸にあふれぬ、なべての病は永き間に靜養すべきものなりとは曾て聞きし事なれば、せめての賴みに賴みてありけるを我父上は如何に魔性の症を穫たまひけん、床に就きませしより僅に四週餘我が夏休の明日は盡さんと云ふ八月廿九日、曉早き四時過ぎに「後をたのむ」との一語を冷やかに殘してあき人となり給ふ。幾度か意外に意外の出來事に觸れ、あまりの事に呆然として身はたゞ暗の室に投げられたる如く、涙も出ず聲も立たず狂はぬばかりの姿となり果てぬ。

世に悲しき事は多かるべし、されどかくまで悲しき事のあるべきか、悲慘あらずや一家五人こゝに新しき孤兒を殘せる。

× × ×

月はさにたれど星少なき空。

はてしなき思ひに沈みて、我はたゞ茫然としてたゞずみしが、燈消にたりと弟に呼ばれて我にかへれば、ろうそくつき提灯の輪郭淡くゆらぎてありき　祖母上の待ち給ふらんさらば歸るべしとて、ひとり石碑打拜みて立ちぬ、月はあほさへて虫聲の音いやしげなりし。

哀別恨　（未定稿）

散る一輪に哀を籠むる緋櫻の、誰か袖に摺れて有情の弔ひを請はんとはそるぞ。

さはれ暖かありしろの宵に、神の乳房に奇しき香の、細ふも匂ふ春雨を浴びし昔を想はぞや。行きては行き流れては流る、永久に石ありまた草あり、微かにもるゝせゝらぎの聲や、半夜の寂莫にたま〳〵恨を悟る。されど行客數々其邊に杖を息ひ、天兒時に其畔に芳花を贈るの期を待たぞや。

生者必滅會者定離、暮れ行く空に泣く鐘や、雪消に笑ふ若草や、此所に自然の定理

を見る。然り實に然り、然るを悲しからずや、人間地に落ちて天に背き、生態の神命に順ふ能はざるに悶ゆるものあらば、嗚呼銀杏長へに北風を拒み、棣蕚未だ曾て南風に向はず、而も暖床の菊は膳に上りて佳ならぜ、淺沼の魚は俎に載りて珍からず。

花蕾空しく萎み、滴雫徒らに涸るあらば、何の生物の美を稱へて、天然の幸を讃せんや。

思へは現世の束縛、いとも果敢い哉。血を視る深傷にも鄕を忘るゝものあるを。一塊の肉圍に封じ込まれたる命は、何時までか外物の環刺に誘はれて、罪を窺はんとすらん。不幸人類の一分子となりて社界の苦窮に沈澱し、我にもあらざる哀叫に聲帶を傷めんとするよ。されどされど我瞳に光線を屈折する限り、我動脈に血球の冷えざる限り、人として世に遇せらる者の、爭でか又世の秩序を知らざるを得んや。否、隨はざるを得んや。

衣食足知禮節、ろれ或は然らんか。順境に處するもの、悉く不文の天規に則るを得

る、難からざるべければなり。

獨り患ふ、逆界ゑ沈むもの、如何せんぞ光明の輝くすべてをたどり得べき。嗚呼暗暗たる行路の難、悲想と苦悶とは常に前後ゑ隨從して、宇宙の原則に違馳せしむるなり。

高欄に袖を揭げて、月前の樂韻を聞くあらば、或は人と樂を分ちを思はん。闇中袂をくゝりて刀を探るの危殆に至りては、我相卒ひて投ぜるに忍びんや。

嗚呼我れ空氣に觸れてより以來、金鏡徒に轉ぜる此に二十年、而も這個半生の閲歷は、悲と苦との簡單なる二文字にて代表せらる、力戰血鬪これ皆社界に向ふての行動なりき、而して此の苦、此の悲、此力戰、この血鬪尙我後半生に永續すべく、餘儀なき運命を待ちつゝあるに非ずや。慘憺たる哉汝が進途?、豫想し得べき運命を、豫期し得べき悲苦を、骨肉腦神に感應しては、氣も亦狂はんとす。然れども何處に避げてか既定の軌線を逸すべき、後に聳ゆる高岳は越えずもあらん、深海を前にしては渡ら

ざるべからず、いざやいざ、我は寧ろ笑ふて首途せん哉。然り首途すべし、……而して我は言へりき。危きに投ず、死人と共にするに忍びずと。此處に反省す、嗚呼遂に我は單身此發途に臨まざるべからざるなり。一篇の哀別恨、誰が爲に筆を呵するものぞ。哀別！哀別！我は茲に明治三十六年、十年の友ある君と哀別するの已を得ざるに際會せり。

夕雲黑く凝りて山景色あく、我袖多く露ににじむ。雨かあらぬか、今を限りの別にも哀れを殘す言の葉に、せめては後の思出とも見よ、染やすからぬ墨の汁にも、猶思ひの幾何を染め得んか。

屠所の羊に食を強ふるを止めよとか、云はゞ我語の或は死兒の年を數ふにも類ふべからんも、不遇と羈絆とを以て經緯せる一綴の哀史、一匹の男子が血を吐ひて成りたるものならんには、可憐の一瞥に涙を押ふるものやある。顧みて靜に思ふ、其明治十五年二月二日、此日よ、我此世の籍に入りしは、產聲すでに愁音の潛みやしけん、六

才漸く外物を視るに至りて、我が家は狹められ、我が子守は里に歸れるを知りき。然れども父母の双肩を襲ひし憂雲には、深く思ひ及ばざりしなり、況んや家の破產の何物たるを解せんや。逆運の輪環は遠く此時に轉じ初めたるあり。鄉校に學ぶ三年、同窓の諸友は高等小學に進むと云ふに遇ひ、共に行かんとすれば何ぞ圖らん、父母は固く容れられざりしなり、涙といふ涙悲しみと云ふ悲を初めて之を知りき。――

憐れかる同胞

三絃細く響きて金扇琅袖と共に翻り、紅裾錦裳ともづれて皷音囂しき間に、吾は憐なる同胞を認めたりき。ろは幼き舞女の一群なり、吾はこれよりていたく感慨に堪えざるものなりき。

所謂天眞爛熳たる彼等がわかき心には、楓の手に持つ紅房の扇はいかに美しと思ふらん、漆おす振分髮にきらめく簪をいかに嬉しと思ふらん、將又幾多群集の喝采の

裡に振袖返す舞心地いかに樂しく思ふらむ。あゝ罪なき子等よ愛らしの子等よ、彼等が夜毎の夢は星赤き神のみ國にや通ふなるべし。而も彼等が雪あす腕は、はやくもむくじけき惡魔の爪に握ふれんとしつゝあるに非ずや。憐れの子等よ、金扇何んするものぞ徒らに汚の風を招ぐを知らずや、簪光何んするものぞ、惰落の暗は照らすによしなきを悟らずや、衆人の喝采は冷たき叫びなり、溫き彼等が滿腔の血汐はこれより冷え行くべき刹那に起る、弔ひの聲にはあらざるべきか　驚くべし境遇の感化、恐るべし惡醜の劇染、昨霄み空の星にくらべし這個の可憐兒、今夜既に邪欲の鬼と顯す、或時は風紀を破る夜叉となり、或時は國家をなやますパチルスとなり、神聖ある光明はこれによりておはれんとするもの珍らしからぜ、宜あり彼等は純潔なる眼より魔視せられ獸待せられ、正義の刄に屠られんとするもの。

あゝ神は罪の子を生まざりき、されど彼等は邪のさり深き夕べはかなくも魔のろばに近づけるなり。悲しむべし彼等が良心の光はこの時より消え行かんとするなりき、

而してこれより暗路をたどるなりき、塵深く葬られし彼等は喜びに悲しみに、再び清淨ある空氣を吸ふ能はざるを餘義なくせられ終る也。苦しきうちに辛らきうちにあらゆる罪！　あらゆる惡！　を犯すの己むを得ざる境に沈み行くなり。彼等が、半生の歷史は常にこの範圍を漏るゝ者あらざるなり。所謂悔！　なるものを繰返して漸く清き光を慕ふの時は、既に肉といはぜ骨と言はず腐蝕し終りたる彼あり、孱弱なる彼等は此所に至りては再び自暴自棄の慘劇を演し、益々暗膽たる淵に沈み非道の渦中に投じ、而して忌はしき汚名を新紙三面に殘して一生を終ふるなり。悲慘なる哉彼等が末路――――思へ彼等は社界に獸視せられしと雖も、將た幾多の害毒を流しゝと雖も、等しく我等の同胞として生を稟けたるものに非ずや。而も一度魔の手にとらへられて淋しき生涯を送る彼等の心情を酌まば、一掬同情の涙をそゝがざるべからざるもの有りて存ぜる也。これと同時に彼等を誘惑する所謂惡魔なるものを嚴探せざるを得ざるあり、惡魔！　惡魔！　神聖なる兒女を迷はして邪惡の暗に導かんとする惡魔！　由

來汝は何物なるか、世に言ふ魔なる神の果して宇宙の間に潜むものありや否。必ずしも之を神に求むるを止めよ、吾は言はん彼等少女を誤る惡魔は常に彼等の身邊に纏綿しつゝある一の恠動物なりと。動物とは何ぞ曰く彼等が父兄！　あゝ血胍の情ある肉親を魔視せよとは忍び能ふべき言語なるべきか、然れども誣言に非ざ酷言に非ざ事實はこれを証明しつゝあるを如何せん。吾曾て其子に舞を勸めて自ら絃を彈く母を見き、美髭嚴めしき似せ紳士の飾れるフロックコートは娘が聲帶を痛めし代になりしを知りき、女兒を設けて祝盃を擧ぐる敗風の行はれつゝある土俗を耳にしき。咄々！　貪欲飽くを知らざる此輩、清き神の愛兒を捨てゝ現世の地獄に陷れ、熱き血汐を絞りて自己の腹を肥やし以て快を呼ぶ、これをしも白晝横行する惡魔と言はざんば何所にかこれを求めんとする。憎むべきこの惡魔三百の痛棒を以てろの頭上に臨み、七寸の毒針を取つて其胸に向ふも尙其罪を責むるには寛なり。正に道德の罪を數へて酷刑を斷行せよ、社界の制裁を加へて人界を放逐せよ、然れども悲むべし薄弱なる社界は之を寛

容し、衰頽せる道德は之れを責むるの力なし、あゝ慨しい哉害毒滔々として漲り罪惡頻々として發表せられ、惡魔は永く道德を蹂躙し世を擧げて黑暗々に葬り去られんとす。「此時に當り一聲正義を叫んで社界を救ふべき獻身的改革者あらざる乎、道德の◎◎となりて濁流に溺るゝ可憐の同胞を助くべき光明を與ふるもの遂になきか……たゞあり教育者……教育其物に就ては吾なまじきに蛇足を添へざるべし、たゞ將に吾輩の荷ふべき責任なるものゝ重且つ大なるを知ると同時に、心窃かに期する所あるを斷言せんのみ……。

櫻山社祭典の一夕、幼妓の舞を見てはしなくも呼び起されたる滿身の熱血は、湧き返り湧き返りて同情となり憤滿となり、悲慨となり終に此拙文となれり。意至りて筆成らず而も古息を脫する能はず、然れども血を以て筆したる語少くも吾の誠意を藏する所あらん。願くは文の陳腐を咎むるに先だち、陳腐の筆を繰返さしむる社會の弊風を責めよと。

悲憤錄　（未定稿）

暗黑

既に鐵柵を以て閉ぢられたる室再び暗黑に葬られ了はんぬ、暗黑！　魔王彼の如く荒れて鬼兒彼の如く叫べり。

いなびかり斜めにはせて消ゆるところ黑雲深く人の聲を秘めぬ。

豺狼爪を隱して幼羊を招ぐ、惡むべき哉僞善の賊。汝が一枚の腹皮を剝がば腐蝕せる腸流れ出でん、汝が一壁の唇を開かば獰佞の舌燧えんとすらむ。

暗に居ておごるか哀れ犬の群れ聖き太陽仰ぐ眼あるやいかに。

曉に快童道を呼んで起てり、柔鬼慄いて藪に潛みぬ、人の子一百聲麗しく歌へり、

悲しむらくは世は再び夜に轉じて魔の叫び寂莫を破りぬ。

魔の太刀に淸き血ゆるす宿世の子今宵は笑へ暗をのがれぬ。

活兒煮られて蝙蝠妖威の翼を張らんとす、己まむぬる哉。

夜出で〻小狐二羽の雞を盜み日の照るまひる穴にひろみぬ。

人道賴むべからぎ正義よるべからぎ、混濁なる暗世界何所にか求めて光明に接すべき。罪惡は永久に盜徒の腦に秘められ、姦者の胸に藏められたり。

とこすへに罪をいだいて榮ゆべくば我が世の道は神に返さむ。

『君子は大盜のためゝ守る。』

隱れて罪を弄びろの跡なきに矯る狡漢堂上に笑へり、顯れて道を說くもの其色に覺

られて地に捨てらる、嗚呼何ぞ地下の莊子に愧ぢざるを得んや。

あくがれて花の香に醉ふ蝶飛んで敵追ふ蜂はやみに
やかれぬ。

恠漢あり白面よく人語を解す、一夕神の子を僞りて武士道を說く。借問す、汝が癈腦我世八百年の武士道を解するの余地ありや、腐腸汚骨支ふる能はざるも尙幸に三寸の舌あるを賴んで、また人事をあやまらんとするか。魔性惡に强き何ぞ夫れ甚しき、我腰に三尺の山太刀を許せ、汝が頸骨粉塵と散らん。

毒を塗るろの唇にその舌に聖き子の頰を永久にゆるさず。

妹を思ふ

二人あつた妹、年かさのはサノと云ひ小さいのはタミと云つた、タミと云ふ小さな

のは四年前に亡くなつた、姉の方のサノは今病んで居るのである、年は十二。

「四年前に亡くなつた、」それは既にドンナに余の胸にエグリ込まれた創手の言葉であらう。されどされど尙今こゝに病んで居ると云ふ新らしい冷酷な言葉を刻み加へた現在！　余は殆ど堪えざらんとする苦みを覺えて居るのだ。余をして繰返さしめよ、十二の年、サノと云ふ名、而して一人の妹、これは今病んで居るのである。彼の女は今年高等の二年で讀んでも書いても縫ふても腦頭の働と筋肉の活動とは皆人に優ぐれて居たので、恐らく彼女のクラスのクィンであつらうと信じる。

余は常に考へて居た彼女は將來賴母しい才氣を稟けて居る、父と母とよりたゞ一人を記念されたるこの秀才女、必ず一かどの敎育を與へて女性相應の地位と尊嚴とを與へてやりたいと、これ決して不可能の事でないと確認して疑はながつた。或夜のつれづれなる伽話の序でなどには彼女にも言い聞かして勵ましたことさへあるのだ、彼女もまた其氣で嬉しく小さき空想を描き初めたであらう、而し余の考は淺墓であつた余

の考は單に主觀的理想に止まつたので、大事の大事の客觀的實現の半面を見遺して居つた。而り實に余は精力の体力に一致することを忘却して居つた（常に等閑に附して居た譯ではないが）悲しむべし彼女の体質は弱かつた、理想と接觸しようとする動力が早く既に發動機に乏しかつた、美しかるべき彼女の先途光明あらぬばならぬ彼女の未來は、夜景漸く輝きを投ぜれば直ぐ山頭に春く鎌月の如き運命に繫がれてあつたのらしい。

絶望！　余が一叫この絶望！　果して何んの意味を胚胎して居るのであらうか、余は以上に述べた想像的の語と總括してこれに冠らしたこの絶望……余は決して科學的理論によつて説明し得ない苦痛を以て叫ぶのである。彼の女の成功を非認したまでの絶望でない、彼の女の向上心を抑壓すべきために興つた苦痛ではないのだ。

彼女は病んで居るのだ、天にも地にも唯一人の妹、父に別れ、母に別れて星霜幾年淋しき男の荒くれたるなかにおいたち、髪の飾り帶の好みこれ着せて見んと品操びす

る人もなく、八つ口の綻び肩懸げのゆるめるも見目惡しと繕ひくるゝ誰もなかつ。岩石礫累の間に辛らくも根ざしたる白百合、谷深くとも天禀の色も香も何時にか芳うろれの樣に、年が敎へた本能發達を經てどうやら人並の學校仕事も出來くる樣におつたのを……何の因果か魔の手に捕はれ、可愛いや聖き小生涯をふみにじらるゝ事……

父親の威より母親の慈は親しみやすきもの、六つかしき事やねだり事やはなべて母親の袖にすがるは常の事である。わけても娘女の氣兼勝なる性質はこの傾き大きものであるのを、母なければこそ、父あければこそ、杖とも柱とも手頼りて兄なる名もてる余に甘へて泣くにも笑ふにも膝にまどふのである。及ぶかぎりの力と愛とを以ていつくしめども世事なれぬ余の思も付かぬこと多かるべき筈、況して病の床に看護することあどは決して決してかゆい所に手の届くことどであいのだ。母があつて介抱してくれたらと余はいつも思ふ、彼女も必ず同じ思で居るだらう、夢多きものである病の床は、大方彼女は母の面影に涙ある寢覺も少くあるまい。余は尙學校の生徒時代である、

この夏休が終えたなら歸校せねばならぬからだである。彼の女の可愛らしい姿萎れがゝつた朝顔の樣な命を見捨てゝ去ふねばならぬ、余は去つたとすれば彼女を何んとすべきぞ。余の弟二人(年たけたる)小弟二人は彼女と殘さるべきのみである、四人の弟すべてこれ同じ境遇の活孤にくゝられてあるのであるが、弟共はよく彼女の世話することを喜んで居る、彼女を愛すること決して余と異らぬのだ。同胞六人溫な同情は循環して居る、余と弟との彼女に對する看護は行き届かぬ形式上の欠點は多いとしても、熱誠ある心靈の保護は遺憾なく與えて居ると甘心して居るのである。

嗚呼彼女の運命！　つや失せた前髪もくづれ豐なりし肉附のやするにつれて、櫻色てふ頬のおごりもあせはてたもざし、これが彼女かと前身のうつらう時々刻々を驚かされるのである。腕骨指骨と指摘さるべき手の細りやう、「今朝は起きられませぬ」と力なく枕にうつふしたる哀れさ、同系の血を分つた此子一つの肉体を歎ずる時、嗚呼涙……　泣かぞに誰が耐えられやうぞ。

更に皷膜にひゞく聽官の感應を余は苦悶のために供にたるかのやう、「妾は死にましよう」「妾はしにたくない」の悲慘なるをきくのである。「死にましよう」彼女の識域が病勢を判斷するまで發展して居るのである、「死にたくない」彼女の布望を語るれでは あるまいか、死を知りたる身を死を認めざるべからざる身によりて守る、人情の轉悶これより悽酷あるものがあらうか、余は最早かくことは出來ぬ。

嗚呼涙……　彼女は肺を患ふて居るれだ、醫學の幼いためか病菌れ强性なためか世人れ多くは不治として認めて居るのである。嗚呼涙……（三十七年九月六日）。

史的俗謠（舊稿）

上

俗謠といへば先づコンマ以下の者の樣に思はれて居る。自分がさきに立つて呻り乍

らも、卑猥でいかんなど〻云ふて居るものも隨分少くない。勿論、不學者の云ふ事なぞは取るに足らんが、兎に角一の下等なる謠として社界に誤認されて居るに違ひない。一体俗謠といふもの〻中には、隨分感服の出來ない忌々しいものが多いから、自然斯ふ云ふ有樣に傾いたのかも知れないが、俗謠その者の起原を探つて見ると決して馬鹿にしたものでない、堂々たる國民の詩であつたのだ。古へは決して歌なるものに雅俗の別がない、神樣の謠ふたのも賤の男が謠ふたのも同じく歌であつた。然るに後世貴賤の階段に高低の出來てから『俗』と云ふ文字を冠せられて、下民の歌を俗謠といふたのである。つまり歌の性質から分類したではなく人間の等級から離隔されたものである、だから俗謠といふものに詩美の溢れてあるものが澤山見にて、雅歌即ち和歌の如きものに劣卑のものが少なくないと云ふ、猾聲を見せて居るのである。

けれども貴人といふものから繼子扱ひにされた、所謂俗謠は年代の經過と智識の程度と土地の狀況とに因つて變化を重ねつ〻ある間に、知らず知ふず卑猥の分子も雜つ

て來つたので、これは己むを得ざる事なのである否寧ろ愛すべき點なのである。殿上人とか云ふ長袖者連は巧に飾り語を綴り合つてボロを匿して居るから好い樣なもの〻平安朝下流の馱歌を皮肉に解剖したら鼻持のならない事ばかりであらう。それを俗謠が何にも關はず露骨にやつてのけたのは、質朴淸洒たるものである。こう云ふ經歷のある俗謠を無暗に卑下するとはあんまり物の解つた話ではない、單にこればりでなく俗謠は更に一つの特長を持つて居る、それは陽氣なことである活動的なことである。

元來日本の歌謠は悲痛哀惜に流れて居る、これは國民志想の發達上種々なる原因があつたに違ひないが、音樂といふもの〻影響がろの一つに數へられてある。日本の樂器といふものはどれもどれも悲しそうな音ばかりする、お孃さんが簾の内で琴を彈いても、伊達の兄貴が尺八を吹いても、何うやら涙のできそうな調子である。昔に云ふ新羅三郎の笙、無官敦盛の笛、蟬丸法師の琵琶なぞが、樂器ろのもの〻音調が既に悲哀を呼んで居るから餘計な涙をこぼしたに相違ない。然るにこの悲哀的な樂器中に生

れ出た面白い奴がある、即ち三味線といふものであつた、これは最も陽氣で最も快活な樂器である。この快活な三絃と平行して發達し來つたものは、俗謠と云はれたものであるから、喜色滿面躍々として民間に謠はれて來た。見よ『我身一つの秋にあらねど』なんかと泣面さげて月を眺めた貴人のある時に、滿田の黄稻を收めて皷腹擊壤といふ騷ぎをやつたのは、三味線と俗謠を持つて居つた人間であつた　だから俗謠によつて大なる慰籍と興奮とを與へられたのである。隨つて情、景、のすべてが發達をして居る。東北地方で云へば第一に北海道の松前追分(江刺とも云)、仙臺のさんさ時雨、それから北越の越後追分、盤城の相馬節、此等が大分聞にて居るのであるが、全國到る所にかう云ふ有名のものがある。なかにも伊勢音頭とか、佐渡ぶりとかいふものは誰も知らぬものがない程である。

斯く土着的に發達して各々特長を持つて居るのだから、言ふべからざる趣味があるので、あかなか俗などゝけなすべきものでない。近頃は學者間にも土地の人文風習を

調べるには俗謠がたまたま良材料を供するといふことを認めて居るし、旅行家などもだんだん此點に着眼して來たらしい。なまなか僞記錄なども餘程興味ある事實を發見とる事があるであろう、獨り習慣人情等に限らずすべて此方面に得る所があるが、殊に歷史に關したものが最も面白い事情を貯へてるものがある。一つ此謠を得てこれが史に係つて居ると思つたら審しく研めて見るがよい、僅かの語の内に隨分復雜なことを見出しことがある。これは一種の口碑といふて差支ないものであるが、口碑と普通に云ふて居るものは長い語であるのだから、其間にだんだん間違が起つて終には全然嘘な事に語り違へて仕舞ふといふ弊があるが、俗謠は言葉少なで而も諭快なる謠であるから、多分其通りに後代に傳つて來るのだから口碑として確かなるものと見ても宜しい、此等の種の俗謠を僕は史的俗謠といふのである。次號に於て更に例を擧げて精說しようと思ふ。

(三十五年十一月『桃色』八號)

史的俗謠

下

さてこれから例を擧げて所謂史的俗謠の價値に論及せうと思ふ、その例を引くについては便宜上これ地方に關係を持つて居るものを撰んだのである。

（例一）

松坂越えて遊女町、茶屋に腰かけながむれば。ヤットエ、ソレエ。三盃呑んで千鳥足、道は三筋で歩まれぬ。ヤットエ、ソレエ。

これは松坂から謠ひ出した故に『松坂ぶし』といふので、正保年間に今の盛岡で謠つたものである。先づこれに就て調べて見ると頗る面白い事が顯はれて來る。

正保といふと南部氏二十八代重直公が時に當つて居るが、先代信直公が元和五年に初めて盛岡城に移つてから僅に二十四五年を經た頃である。であるから盛岡といふ所

も未だ幼稚な時代であつたが、この時既に松坂に遊廓が建てられてあつた事が知れて居る、松坂といふのは恰度今の北山報恩寺龍谷寺の邊である。今でこそ彼の樣に立派に靈門を搆へて『葷酒禁入山門』など〻澄した寺があるけれども、昔は天飛切の不淨場であつたといふ事の知れるのも可笑しい。また謠の句に『三盃呑んで』といふのに面白い意味がある、正保三年十二月二十日に重直公が酒の直段をお定めになつた、これは拾錢について上酒三盃中酒四盃といふのであつた、これに今一つこれ頃に御儉約の御命令といふものが出で普通に下民は三盃より多く酒を呑んではならぬとの事である。『三盃呑んで』の句は此等から出來たのである。

（例二）

秋田照る照る南部が曇る、くもる南部が花ぐもり。

これは維新前後に謠はれた彼の秋田征代の時に生れたのだが、調子は『東海道五十三次馬子の歌』の伊勢の國の中に『坂はてるてる鈴鹿はくもる、相の中山雨が降る。』

といふのに倣つたのである。『曇る南部が花ぐもり』といふ句は良く出來て居る、奥羽同盟の名のもとに秋田藩を討ち破つて、顔色なからしめた、當年壯武士の得意躍々と目に見える樣である。ろれは善いが己むを得ない事には、程もなくこの謠に大變動を來した、曰く。

秋田てるてる南部がくもる、南部殿さん血の涙。

秋田てるてる南部がくもる、秋田九一武士(食ひ遺し)大きくある。

青菜に霜といふ有樣で、南部藩は端なくも錦旗に逆つたといふ汚名のもとに、謹愼せねばならぬ仕儀となつた。見よ盛岡城頭、向鶴、武田菱の旗を翻した昨日に引かへて、今日は五本骨日の丸扇の旗識に靡かされたのである。大刀を肩より釣りて揚々濶歩する秋田武士を閉門丸腰の身にて看た南部武士が、いかに無念であつたか、遺憾であつたか。『血の涙』を悲慨し『九一武士』と憤罵したのも無理ではあるまい。

(例三)

津志田津輕町鳴いて通る烏(からす)、ぜにも持たのにかうかう(買う々々)と。

紫波郡見前村に津志田といふ所がある、ろこの地名を津輕町と云つたことは今では殆ど人に忘られようとして居る。何故津輕町といふたかと云ふと、南部利直公の代に他領の人民共が歸化したことかある。利直公は他領から來るものには慈悲をかけて遣せとの御意で、地を賜はつて安堵させた。ろの秋田の仙北から來たものを置いた所が今の盛岡市仙北町で、津輕から來たものを住ませた所は今の津志田であつた、津輕の人の居つた故に津輕町と稱へたといふことである。これで地名の解釋が出來たが後の『鳴いて通るからす云々』の句については更に意味あることなので、これを釋くには一寸他の例を引かねばならぬ。

高田今泉鳴いて通る鴉、錢も持たのに買ふ買ふと。

これは現に氣仙郡高田町地方に行はれて居るのであるが、今泉といふのは高田町と接近して居る地名である。謠の文句は津志田を歌ふたものと全く同じてある、この樣

に同じ樣の文句がある以上は必ず其意味に於ても共通の點があけねばならぬ。だから先づ氣仙の方を詮索して見ると今泉といふ所に遊廓があつて、一時非常の盛況であつたが、その當時この謠がうたひ出されたといふことである。果然この事柄が津志田に附合して居るではあるまいか、津志田には實に遊廓があつたのである、時は文化七年藩命ありて盛岡八幡町より妓樓を此所に移した事がある。即ちこの謠はこの時に謠はれ初めたといふことが叛然するのである、後文政の六年に再び八幡町に復築したから、今では跡かたも殘つて居らぬのである。

以上擧げ來つた例によつて『史的』と言ふ意味は大躰解る事であらうと思ふ。斯ふ云ふ樣の類で各地到る所で謠はれて居るものは澤山あることであろうが、それらに就て一々研究したならば確に趣味ある發見をなし得るに違ひない。全体歴史と言ふものは古文書や舊記錄にばかり因て確証しがたいものが幾らもあるが、遇然にもつまらない樣な謠歌の導火線によりて、意外の好研究をなし遂ぐることが往々あるのである。第

一例の如きは舊弊の史學者などは目にも止めない處の些少な事を知らせて居るが、これは決して小さい事ではない、風俗史上大なる史料を貢獻するのである。第二例の如きは事實が天下の大事であるので、史乘にも知られて居ることではあるけれども、『花ぐもり』より『血の涙』に移る咄嗟の間に無量の感慨を含んで居て、讀むもの謠ふものをして强く當年の現狀を想像せしめることが、なかなか下手な記錄の及ぶ所ではない。第三例に至つては俗謠研究上最も面白いものである、すべて何の種の俗謠でも各國を通じて似通ふて居る文句のあるものであつて、これは流行といふ潮流の爲めに漸々各方に擴がる性質を以て居るからであろうが、何しろ隨分古いものにも同じ歌調のものが各國に見えて居る。

佐渡の樣ょ絶海の孤島で謠はれて居るのと、靜岡邊で謠つて居るものと同じものを曾て見たことがあつた。其著しい例は子守唄によくある、『お月さん幾つ十三七つ』と か『坊やのお守は何處へ行つた』の如きは、日本全國到る所に行はれて居るのでそれか

らそれへと傳つて斯く擴がるのであるから其途中で種々に訛つたり誤つたりして、遂に意味の分らなくなつたものも多いが、又各地の事情に適する樣に或る部分だけ變化されたるものがある。即ち『津志田』とか『今泉』とか其他地名だけ改めて以下の句は同じであるが如きはろれてある、だから見も知らずの他鄉へ行つて遇然にも斯かる同系統の謠を聞いた時には、直にろの地の事情が推側されるのである。斯かる特長を利用して史的研究の材料とするのであるから、俗謠といふものは高聲で謠つて見なくとも、覺にて居ることが肝要であるのである。

（三十六年一月『桃色』第拾號）

（完）

繼母の研究

緒言

若草萌えて嬈は黃あり、綠葉重る所幼虫靑し。自然の大惠は盖し彼等の身邊に微にも慰安を籍すか如し、大觀すれば宇宙の進化は環境と融和せしめんが爲めに、幾多の

變形を生物に與へつゝあり、空氣中に生存するもの何物かよく境遇に抵抗し得べけんや。』

弱きものは人の子也、春と秋とに喜憂するもの旣に其性動き易しきを見る、而も自然の原則に支配せられて、時々刻々に運命を輪轉して幾多の境遇に浮沈し、叫喚止むなきものは何の故ぞや。盖し彼等は境遇との調和を得易しかるべくして、尙調和を欠けるに因るあり。調和、融和、退いて半面其意義を解けば明かに感化同化を意味すべし。感化は何所にも避くべからざる作用あり、而して眞の調和を觀難きは奈何。善惡正邪、相伴ふて毒と藥とを含む時代に於て此解譯を下すべからざるものあり。境遇との調和境遇との感化は驚くべき現象を社界に潮しつゝあるもの偶然に非ざる也。如何なるものを境遇となすか、如何にして境遇と眞に同化し得るやは事頗る多方面にして、時間の許さゞる場合に說明し得べき事に非ずと雖も、此所に最も其根底たるべき一の境遇を提出せざるべからず。

人間地に落ちて先づ安定し固着する所を家庭と云ふ、家庭の狀態と四圍の事物とは初めて境遇を形造して刺擊を與ふるものなり。家庭は實に最初の境遇にして又最終の境遇也。家庭の感化は那邊に影響し去るや知るべきのみ。人類個性の進退一に此所に繫がる、即ち知る人生最大の福祉と快樂とは家庭の圓滿なるに非ざれば求むべからずと。既に然りとせば此と相背反する家庭の波瀾は如何に悲慘なるべきかを思ひ、慓然たらざるを得ざらんや。不平和なる家庭！　其所に隱然罪惡を秘めて人道を誤るもの決して少數に非ざるべし。家庭の平和を破り調和を蹂躙するもの、其源を發するや蓋し一二の事情に起因するに非ざるべく、頗る多面的複雜を極めつゝあるべしと雖も、余は今茲よ其有力なる一素因と見做すべき或者を抽出せんとす。余が研究の主眼として捉へたる一材料は即ちこれにして、題目として揚げたる繼母即ち是なり。

繼母……即ち是なり。繼母元來魔の權化に非ず邪惡の塊魂に非らざるべし、是を以て直に家庭の平和を攪乱するものとなすは、早計に似て且最も悔の甚しきものな

るべし。然れども歷史は疑ふべからざる事實を傳へ統計は爭ふべからざる斷定を下し、殆ど抗議すべき餘地なきに於て『邪慳』なる語は、繼母に附隨すべく餘義なくせらるゝものなり。『繼母根性』『繼子扱ひ』の語は何れの時代に熟したるやは知らずと雖も、上下に通じて慣用し來れるもの亦決して無意味なりと云ふべからざるなり。更に去つて是を活社界に實現しつゝあるものに向つて窺ふに、益々確証を與ふるものを觀る也。家庭に於ける乱脚、紛擾、破壞、將た孤窓の涙、高樓の酒、進んで墨繩の恥、算し來れば繼母に起源する哀事恨件多々益々加ふるを如何せん。

嗚呼繼母、其聲の何ぞ而く凄惋あるや。然れども又靜慮深く思を公平に遣れば、暗中猶一叫あり『繼母果して邪惡なるや』と。古往幾千載繼母あるもの僕を加へて數へがたし、其間如何んぞ綠中の紅班なからんや。昨曉の美婦今夕の鬼婆、急轉直下もまた甚しからぎや。蓋し大沙漠の一清泉衆客の咽に潤ふ能はゞして、德は罪に蝕し去られ汚名徒らに流れて遺傳的意識となり、にはかに動かすべからざるに至れるなり。繼母

の或者は實に社界の誣冤を被り、迫害を與へられつゝあるは事實なり。

『繼母果して邪惡なりや』！　由來誤解は屢々意外の椿事を誘ふこと少なからず、繼母に對する外界者は明かに一種の誤解を懷けるものなり。即ち『邪慳』と云ふ遺傳的意識を腦裡に秘め、凡て之を尺度として應對するより、偶々良心の指導を防ぐる也。

悲しむべきは繼母也。繼母が邪惡の影響を受くるものは更にも言はず、既に言へる誤解によりて繼母と背馳し自ら品性を害して人格を落すもの少なからず。請ふ暫く世の囁を聞け、性の陰慳なるもの、邪執なるもの、繼子の凡ては亨有せざるなしと……

……繼母の影響の大にして且恐るべきものは繼子の感化にあり。不愉快なる冷寂ある家庭に育成せらるゝもの、如上の『ひねくれ根性』となる止むを得ざるに似たり。嗚呼世上幾万の繼母と繼子と、果して而く不調和に終らざるべからざる乎。家庭の破壞は永久に防止すべからざる勢を以て、繼母に委ねざるべからざる乎。冷靜なる社界は嘲罵を拂ふに巧みなるも、一片同情を寄するに餘りに吝なり。同胞の大半は斯かる慘境

に相率ひて投じ去るを傍觀し、敢て省みざるものは何ぞや。如何にして繼母と家庭の溫和を圖るべきか、如何にして繼子の欠點を矯正すべきかは、國民教育上重要の問題に非ずや？

余は此の點に就て私見を展かんとす、然れども是に先ちて繼母とは如何なるものゝあるやの根基を研究せざるべからざるを信じ、敢て稿を起さんとするものなり。嗚呼繼母果して邪か、正か……

終に云ふ。余は現在繼母ある繼子也、境遇の變化を受くるもの衷心一縷の感慨なからんや。自ら先つて研究を欲するもまた多少自家の迷誤を破らんがためあり、故に或は自己を標準とする弊なきを保せず。然れども斯の如き研究は斯の如き境遇にあるものに因て便宜を得るは必然あり、若し夫れ論據の僻するあらば、所謂繼子根性の發展として第二者の研究に委せんのみ。

忙中筆を下す能はず、僅に緒言を出すに止む。號を追ふて卑見を發表せんとす。左に其方針を

掲ぐ(場合により增減す)。

目次

一、緒　言(既出)。
二、繼母の意義。
三、繼母の史的研究。
四、法津が認むる繼母。
五、繼母の品性。
六、繼母の德義。
七、繼母の罪惡。
八、繼母と家庭。
A　配偶者との關係。
B　家政との關係。
C　交際との關係。
D　子弟との關係。
九、結　論

(三十六年九月『桃色』十一號)

南昌山

端書

地殼に突起したる一小塊。三千尺の高度は、僅に山としての資格を捉へ得たるのみ、連亘せる火山脈を一瞥し去りて、甚だ注意を引かざるもの、實に南昌山なりとす。

然り、彼女は形相に於て直觀的の美なく、位置に於て威力を示すの便を欠けり、視覺の人より忘却せらるゝもの亦止を得ざるなり。然れども彼女が南昌山ある代名詞に於て、多くの知己を有せり。見よ、彼女に接して清雅ある慰安を得んとする訪問者の、一年を通じて如何に夥しき數を顯すかを。將又彼女が瞰下する沃野幾里の生靈は遺傳的に彼女を尊び、彼女を讃ぜるの如何に熱實あるかを。

然らば南昌山何物ぞ。之を知らんと欲する人或は少なからざるべし、余は余の知り得たる範圍に於て其要を記さんとす。

史的方面

山稱起原

德ヶ森なる美稱は、實に南昌山の前身を頌し、最も永く敬呼せられたるものなり。或は獨ヶ森と書きたるも見ゆるは後人の誤なり、而して誤はこれに止まゞ、轉化して毒ヶ森と呼ぶに至れり、忽にして俗輩の迷想を刺し、毒氣を發すと云ひ、狂風起ると傳ふるに至る。

越前の僧空忽諸國を歴遊して盛山に至り、聖壽寺に寓せしが、藩主南部信恩に謁し、談たま〳〵城南毒ヶ森の誤稱に及び宜しく改号して謬傳を除くべしと云へり。信恩即儒臣根市政德(恭齋と号し林家の門人也)に命じ、山号を撰ばしむ。

恭齋靜恩熟考して、南昌山と命ぜ、記を作りて之を奉る。左に全文を出せり、奉書紙に認めたるものにして字積原本に同じと云ふ。

南昌山

滕王閣序曰南昌故郡洪都新府盛岡城之南有山謂德森俗誤謂毒森

太守曰德之音近毒恐後世專稱毒森爾其改之伏名之曰南昌山夫南太守之氏也昌盛也此山在于盛岡城之正南

太守之祥如山高不騫不崩昌而傳究因名之曰南昌山

斯くして南昌山の大稱は名せられたるなり、多年の冤は雪がれたるなり、實に元錄十六年なり。

南昌山神社

鎮守社としての創建は、遠き昔にあるが如し。一傳說をあくれば曰く、造斯波城使坂上田村麻呂この山神の力により霖雨の厄を免れたり、即ち宮社を建てゝ敬祀したりと。

何等の據るべきものなく、今之を闡明する能はず、隨て變遷沿革亦窺ふべきものあらざる也。然るに明治以前は、青龍大權現と崇して、水源守護の靈場となし、盛岡祇陀寺これが別當として所謂神佛混同の祭祀をなせり。祇陀寺と南昌山の關係は詳からざれども、頗る面白き傳說によつて密接なる連鎖を繫ぎつゝあり、即ち山号を南昌山と冠し寶物と云ふをさへ藏せり、今祇陀寺所藏の記錄と、普通口傳の說話との大要を記さん。

祇陀寺のほとりに沼澤あり(現今と位置異り、北上川に近かゝりしと云)て、年古く龍蛇すめり。祇陀寺開山和尙の德に化してや、池中を去りて南昌山に栖み、祇陀寺の

鎭守とならんと。變体して和尙に見えて旨を告げ、去るに臨んで鱗二枚山形の石一箇(青龍石と云ひ漆黑也)爪一箇を與へたり。尙曰く汝に與へたる石の如き山に行くべしと、和尙遂に南昌山に至り青龍大權現と崇信し、土俗を集めて敬拜したり。これより近憐旱する每に雨を祈ると云ふ。

青龍石記に曰、青龍權現則本地法身饒女薩埵而印土卽垂化於阿耨池支那則黃鶴山本朝即山城國葛野郡梅畑當國則南昌山云々

斯かる神話的のものは至る所に聞く事にして、もとより信ずべくも非ずと雖、當時此說をなして愚民を佛に誘ひし事實はこれを認めらるべし。青龍權現の如き稱も徒に附したるにあらで、此地方水利に困むを以て水に因めるを撰びたるならん。

明治四年神佛の混同を正したる時、新山の社を本社とし靈神を齊祀せり、然るに社号を毒ヶ森神社と改めしは古の誤稱を復したるものにして、遺憾の事なりしが明治廿八年七月社掌宮崎求馬氏官に請ひて、南昌山神社と改稱せり。

地的方面

位置

陸羽中央火山系より大荒澤山の高點を起點とし、東に分岐せる一支脈、山伏峠を起し、紫波和賀の郡境をなし鹿伏山となり、高倉山に至り、更に轉じて北に向ひ連に高峯を起し雫石川に終る。東根山、南昌山、箱ヶ森等このうちにあり、而して南昌山は最秀峯を以て覇を稱し、岩手郡御所村紫波郡煙山村同飯岡村の三村に跨り、一千一百三十二米突の高距を有せり。登路約七町頂上には南昌山神社の柵あり、又農商務省陸地測量部の三角點あり。

地質（岩石）

凝灰岩。

第三紀の噴出になるものにして、全山皆是なり。而して肉眼を以てすれば、二三の

種別をなし得べき特質あるが如し。余は正確なる鑑識眼なし、故にたゞ符號を附して其形質を記さんとす。以て識者の教を俟つ。

甲。山骨を形成し主として西北部に顯る、礫質にして明瞭に石片の混在を見るべし、灰白色なれとも風化面は赤褐色を呈せり。

乙。最も廣く顯れたるものにして、東方登口に至れば既に見るを得べし、緻密なる凝固をなし帶青灰色にして美麗なり。

甲乙は、南昌山を形成する主なるものなり。

丙。所々に點在し緻密にして灰白色を呈し、黃鉄鑛の小結晶を含む、概して脆弱なり、俗に銀鑛を藏すと稱せり。

丁。西北白根澤附近の小區域に見るものにして、極めて微細なる火山灰の凝固したるものなるべく、其分解されたるものは一見陶土の如し、白色にして石灰に似質もろし、これを採りて壁を塗るに石灰と異ならず。舊藩の時、陶工某分解せるものに因

りて陶器を造りたり、赤粘土の燒物に比すれば遙に上品のもの也。

溶岩。

東北部(頂上より直下)北の澤に通ずる間に散在せるを見る。

水晶。

南部金壺澤の崖頭にあり、松樹茂る岩角に觸れ小區域なり。頂上に昇る路より左に入り(四町許入りて左に入る路あり)三ッ目の澤あり。谷流中小結晶の流出せるあるを手便りて進めば達すべし、然れども乱採の結果今日にては殆んど水晶らしき美晶なく、古跡を觀るの感あり。此所には金鑛ありと昔より稱し來れり、金壺の名これに起るといふ。

河流

岩崎川。 東面に發そる唯一の流れにして、南昌山南半部の溪水と北半部の谷流とは新山の社前に相會し、乙凝灰岩の美なる盤面を洗てふ幣懸瀑と直下し、悠々として平

野に出て、煙山村を横斷し德田村に至りて他に併さる、流程二里余。

此一小川廣さも幅五間を越えず、而も常時滿水の流を見ることなし、然れども優に拾余町歩の田地を灌漑して、此川の水量增減は常に農家の喜憂と伴へり。殊に挿映期に於て然りとす。獨灌漑水としてのみならず、飲料水として二三百戸の需用を滿たすべし(此地方穿井して良水を得ぎ)、夏期の如きは實に數町の上流に早朝桶を擔ふて冷水を得んと勉むるあり。

館ヶ澤水。 川と稱する程に非ず、西面に流るゝものにして、岩手郡御所村西安庭字落葉平に出で、他の山地より來る流れに合し、雫石川の支流とある。

風景

幣懸瀑。 東部登口にあり、瀟洒たる白水賞すべし、神に捧げてぬさかけとは優ならぎや。高二丈幅一丈半。

神殿谷、幣懸瀑を左側より登るを得、登らば其所に愛すべき小仙界を見出すべし。流

を遮りて岩あり、芝生の築山の如きを頂より洗ひ去りて銀を流すもの、瀧と云ふべくまた噴泉に似たり、此所をもよぢて進まば尚多くの奇景と美容に握手し得べし。多くの登山者これを知らず(路は坂路を行くと同所に會す)、カモ井谷とは此所に名けられし也。

笊淵。新山堂の右側より來る溪流中にありて社に近し、岩を穿ちて深六尺餘、緣は巧に削られたる凹形にして藍あす水を得て美なり。階をなして二あれども、下なるは石に埋めらる、これを山神の神水と稱し、又奇説を附するものあり。

以上はすべて、乙凝灰岩の軟質地にあり、洪水或氷解期に於て、流下したる碎岩が鑿の跡なり。

大瀧。笊淵より谷水をたどりて進めば數町にして達すべし、高四丈幅一丈餘白沫雪泡勇健を示す長所は即それ也。ぬさかけの瀑の優雅なると好箇のコントラストをなせり。

これ頑硬なる、甲凝灰岩に懸れるを以て、常にその侵蝕を拒まれ、絶壁綾々たる圭角と戰ひつゝある故なり。此所を登りて第三の大なる澤に白土あり。

植物

全山鬱として植物の繁茂せるを觀るべし、余は其多くを知らず、僅に一部を記すのみ。

隱花植物

菌類。マツダケ、シイタケ、ハツタケ、カワタケ、ムキタケ、シメジ、(食用品のみ)

地錢類。ゼニゴケ、

土馬宗類。スギコケ、

羊齒類。ワラビ、ゼンマイ、クジヤクシダ、コーヤワラビ、シ、カシラ、

木賊類。スギナ、

石松類。ヒカゲノカツラ、

顯花植物

禾本科。タケ、クマサヽ、カヤ、ヨシ、

天南星科。ヘビノダイハチ、

燈心草科。タウシンソウ、

百合科。ギボーシユ、オランダキヂカクシ、カタクリ、ナルゴユリ、サルトリイバラ、クルマユリ、セヒヅルソー、ノビル、ツバメオモト、キミカゲソー、チゴユリ、オニユリ、ヒメユリ、ワスレグサ、ユキザサ、エンレイソー、

殼斗科。クリ、カシハ、オホナラ、コナラ、カシ、ブナ、カヤ、

桑　科。クハ、

芸香科。サンセウ、

木蘭科。ホヽノキ、

薔薇科。ヤマブキ、カバ、コゴメウツギ、ノイバラ、タチイチゴ、ヘビイチゴ、キンミヅヒキ、

防己科。アケビ、

毛茛科。ヤマシヤクヤク、シラチアフヒ、キツネノボタン、キンポーゲ、トリカブト、オキナクサ、イチリンソー、ヤエサキイチリンソー、

小蘗科。ヘビノボラズ、イカリソー、

虎耳草科　アヂサイ、ノリウツギ、ウメバチソー、トリアシショーマ、

黄楝樹科。ニガキ、

無患樹科。イタヤカヘデ、

鼠鼠科。ノブダウ、

鼠李科。クマヤナギ、

菫菜科。スミレ、ツボスミレ、オホバキスミレ、

石竹科。ハコベ、ミヽナグサ、ナデシコ、
牻牛兒科。ゲンノシヤウコ、
茱萸科。ミヅキ、ヤマボーシ、
繖形科。ヤブヅラミ、
菊　科。ヤマハハコ、コンギク、カセンソー、ヤブレガサ、ノコギリソー、センボソヤリ、アヅマギク、フキ、ノブキ、フジハカマ、
葫蘆科。カラスウリ、
桔梗科。キキヨウ、
敗醬科。オミナヘシ、オトコヘシ、
忍冬科。ウツギ、ハコヲウツギ、スヒカツラ、ドクウツギ、
唇形科。ウツボグサ、クルマバナ、
車前科。オホバコ、

施花科。ヒルガホ、
蕁麻科。アカソ、ミヅ、
揚柳科。タチヤナギ、ドロノキ、
松柏科。アカマツ、ヒノキ、スギ、

牧口氏人生地理學に曰く、東北地方にてヒノキと稱するはヒバ(羅漢柏)也と。木曾にてアスヒと云ひ、東京地方アスナロ。此陸地方クサマキと云と。天然は木曾を北限とするも、造植林はこれを見るべし、五葉山の如きは天然林と稱す。

玄參科。クカイソー、サギコケ、
五加科。ハナイガダ、
樟　科。クロモジ、
蘭　科。テガタチドリ、シユンラン、

金栗蘭科。ヒトリシヅカ、フタリシヅカ、
齋墩果科。ユゴノキ、
櫻草科。サクラソー、トラノヲ、
三百草科。オニアザミ、ヒメアザミ、
茜草科。ヤヘムグラ、ヨツベムグラ、カナムグラ、
漆樹科。ウルシ、ツタウルシ、
荳科。ハギ、ヌスビトハギ、フヂ、ナンテンハギ、ミヤコグサ、レンリソー、クヅ、クララ、シラフヂ、
衞茅科。マユミ、ヤハズマユミ、

この豐富なる植物によりて亨樂するもの、麓を遠く幾百なるを知らぜ、菌類羊齒類は食膳に上り、殼斗科は貴重の燃科となり、灌木は垣用或は纏繞作物の支柱とゐり、荳科は重用なる馬糧となる等。有用物質の供給甚大なり、獨り木材としては之を出さ

ぜ、昔時は禁制したりと云ふ、これ此地方水利に困むを以て、水源地の喬木を保護したるものゐるべし、現に北の澤の如きは水源涵養林として材採を禁ぜり。舊藩主は炊料としての區域を定めて人民に與えたり、而も松杉檜栗ドロノキの如きは斧を入れしめざりき、稱して御制木と云ふ。

動物

余は動物に付て未だ調ぶるの期ゐく、且昆虫學の素養なきを以て、茲に詳述するを得ざるを遺憾とす、唯特記すべきもの二三を擧げん。

熊。稀に見ると雖も栖居は疑ゐし。

まむし。最も恐るべきは論なし、多く太陽(たはひなた)(東面登口)北の澤の一部に栖む、其他の所には殆ど見ざるもの也。新山堂近傍狐淵邊に出づることとあり、登山者注意すべし。

さんしょう魚。とかげの形は有すれども極めて小さし、深く山に入れば谷の流よ見出すべし。

以上の如し、鳥類に至りては普通のものゝみ。

結末

余の不學はよく山質を分解し得ざりしと雖、既記の事實を総合して再び南昌山を睨まば、彼女の偉大なる慈善事業として、人類生存に最も主要なる燃料と食料との原素を供給し、人文發達に貢獻するもの甚大なるを認め得べし。此水なくんぱ飢渇し、此木なくんば餓凍を、未開の時代と雖幼稚ながら宗教心のさざすあらば、彼女を神として將、佛として崇拜するは必然の勢なり。田村麿の傳説と云ひ、青龍權現と云ひ、靈神と云ひ、常に水と離れざる祭神を有するは、即其起因する所を窺ふべし。青龍大權現の如きは、實にこの水利困難を利して成功したる方便なりとすべし、南昌山の改號は盛岡城築初の時代也、新府に集る諸寺は益其勢を競へり、祇陀寺僧一計あり矣。名僧傳記には必ず或貢を埋めある附會説を活用し、權現名を附して旱魃地に齎し、巧に

民心を收め、一面藩主より若干の社錄を得たり。これ少くも自家の立脚地を固うしたるものなり、龍は勿論、大蛇の存在すら否認せられたる今日(本州)贅言を要せぞと雖、祇陀寺に藏する龍鱗は、白雲母の薄片なり(本物は火して失せたりといへども此類のみ)。然れども人をして彼女を信仰せしめ、人民を慰籍し、漸時遠地に崇敬の念を起さしめたるは、祇陀寺の勞功多とすべし。生存必需原素の供給、藩公の命名、宗教の附帶、この三者は彼女の威嚴と溫愛とを高めて、人に尊敬を拂はるゝ所以をなすものなり

(三十七年十二月作)

煙山名蹟誌稿

(未定稿)

假目錄

煙山村沿革

一、起原

二、管轄
三、位置境界
南昌山
一、端書
二、山稱起原
三、南昌山神社
四、水と木と
五、風景
陸奥古道
鹿妻堰
淺子留
鍋屋敷

煙山館
實相寺
燒觀音
五日市又兵衛墓
（又兵衛の傳は材料乏しくして困難也。）

煙山村沿革

一　起原

由來東奥の地は、蝦夷暴族の巣窟として皇國二千年の歴史に幾多のページを奪へり。我地方も又此蝦夷の故を以て史に知らる、本村の如きも實に此等夷族が部落をなしたるに起りしものなり。

『續日本紀』（これ志和村に非ず再考を要す）

寶字八年十二月辛印初陸奥鎮守府將軍紀朝臣廣繼言志被村賊蟻結肆毒出羽軍兵與之相戰敗退云云

思ふに、今の紫波郡志和村と云ふは、此處の志波村の古名を存するものか、而して草蒙の時代、村と云ひ果と云ふも其整然たる區劃を保たざりしは論なし。史に志波村と載せられたるは、征討軍の到りし地を指したるに過ぎず、其より奥は未だ測り知り難かりしを以て、單に志波村の賊と云ひて其奥地の総てを意味したる者あるべし。彼膽澤郡に鎮守府を置きたるは、其地の邊迄は王化に歸したるも、尚奥地の鎮定せざるより押へんとして將軍を置きたるものにして、其より奥の方は凡て遠膽澤と呼びたるあり。是に因て考ふるも、古史に何々の賊とあるは皆王師の到し所の名を稱したる者あること明なり。

『日本逸史』

延歴八年六月征夷將軍奏曰(略)又子波和賀僻在奥區臣等遠欲薄伐

延歴に至りて尚子波の地を指して奥區と云へり、是より以北の計り知り難かりし事、見るべし。されば史に志波村と載せたるは、此地方を一括したる稱にして、現今の志和村と僅に二三里の間にある、本村の如きは無論其範圍内に含まれたる也。而して後代蝦夷漸く跡を斷ち、日本民族の移住を見るに至り、人文の發達に伴ひ漸く各所に小部落をなし、增加し來りて、志波村なる茫漠たる輪廓内に、新に幾多の獨立の名を有する村落を分割したるものあるべし。本村は又實に其一あり、斯して志波村は遂に一の郡を形成する迄に、發達したるなり。

『日本逸史』

弘化二年正月丙午於陸奥國置和賀稗貫斯波三郡云々

志波村近傍に發達したる諸部落を併せて、一郡を置きたる者なるを以て、斯波郡と稱へたるものなり。即斯波郡は志波村に起りたるものなりと、言ふも憚りあかるべし。

『舊蹟遺聞』

村と云ひしは(志波)、寶字八年に見えたるは未だ郡に定められざる前にの事あり
と見たり、こは大和はもと大和の里より出でゝ國の名となれる類にて村の名の郡の
名になりしにやあらん、云々

と見えたるは然るべき說なり。而此時代に於ける本村の狀態は如何なりしや、又如
何なる名稱のもとに幾個の里をなしありしやは、今日考ふべきよしなし(本村の煙山
村と稱せしは近々明治廿二年にあり其以前は數箇の小村に別れありしなり)。然れとも
現今の大字煙山の如きは、最區劃廣く人口も發達しあれば、古へより開けありしにや。
殊に其西部は陸奥古道に當れるなどより考へ合せても、はやく知られたるならんと推
し量らる。

村名の因りて出し所は今知り難し、されど古の蝦夷共の稱へありし地名を呼び傳へ
て、後に漢字を宛てたるなん、彼の志和村の如きも或は斯和或は子波或は斯波など宛
て記したるを見ても知るべし。

二　管轄

叛服常なくして蠅の如しと言ひけん蝦夷の地、干戈息ふの時なく幾百年の日月殆ど
寧日なし。故に統治の法行はれぢ、施政の方法名のみにして實をあげず、郡里の興廢
數ふべからず、故に古來の置郡漠として知り難は東奥の地を除きて他になし。五十四
郡なる名數は殘りたれども、判瞭なる考證は未だ擧げられぢ、斯の如くして東奥の歷
史は常に五里霧中に葬られつゝあるなり。されば今其源を遡りて、村里の事を詳にせ
んとするは決して容易の事にあらざるなり。

『舊蹟遺聞』の說に陸奥膽澤郡と云ふは、鎭守府の諸在地にして其奥を遠膽澤と呼びた
る事は前に言へり。されば古くは本村の地も、膽澤郡の內にありし事と思はる。

『日本逸史』

弘仁二年正月丙午於陸奥國置和賀稗縫斯波三郡云々

(稗は蘇とあるは誤ならん)

斯波置郡の史に見えたる初めにして、本村其内に屬したるものなり。蓋し國府に歸するの初めならんか。

『日本逸史』、『大和物語』、『續日本紀』に、岩手郡閉伊郡と記したるは弘仁前、百余年前にあり。兩郡は斯波、稗縫、和賀三郡に境を接す、因て考ふるに本年兩郡を分割して、三郡を置きたるならんとの說あり、然りとすれば是より前は、本村は岩手郡の内に屬せしか。

紫波の事に付きては種々の說あり、事長ければ此所には畧す

永承中、安部頼時陸奥六郡を横領す、本村は其の内にあり。康平五年源頼義討て之を亡す、清原武則之を扶く、功によりて征夷將軍に任せられ、六郡を傾す。子武貞、孫眞衡繼ぐ、己よして乱を作し、源義家に討たる、藤原清衡之に與り又六郡を領す、以來藤原秀衡先後四代相襲ぐ。本村常に此内にありて、秀衡の族樋爪太郎俊衡、同五郎秀衡の食邑たり。文治五年八月源頼朝、藤原泰衡を討つ、此役俊衡等出て降る、然れども老年の故を以て宥され本領を安堵せり。後、斯波氏の領に入り、建武以來斯波

家長の後裔と斷定せしは別に說を有す

家長の後裔永く斯波の地を領す、煙山某を本村に置き支城と稱す(煙山館の條に詳し)。天正十六年南部大膳大夫信直斯波氏を亡して其領を奪ふ、同九年九月豐臣秀吉斯波郡を以て信直の封に加ふ、本村初て南部氏の領に入れり。

斯波南部領境に就て一說あり

『篤焉家訓』

斯波と南部御領境は、德田と高田との小川限也と言ひ傳ふ按ずるに、今は傳法寺前きの水分阿彌陀堂の前なり、此所に小川あり今の赤川堰ならんか云々

『南部秘事記』

斯波と南部の領境は德田と高田との小川限云々、

『南部家傳舊話集』

岩手と志和の境、德田と高田との間に小川あり、是境なりと言ひ傳ふ云々、

德田と高田との境、小川と云ふは何川なりや判明もず、德焉家訓の云ふ如く水分阿彌陀堂云々とすれば、本村の如きは南部領なりし如く思はる、されど、此諸記錄は皆誤りにして取るに足らず、何となれば岩清水には岩

清水右京あり、煙山には煙山某あり、高田には高田吉兵衛あり、白澤には細屋某あり、各舘を構ふ皆斯波氏の臣なり、是によりて見るも斯波領は德田、高田の間を限れるに非らざるを知るべし、即本村の南部領に入りしは、天正十九年にある也、

南部氏封内を治するに當り、地方の區劃は未だ詳に知る能はざれども、村を括べて通りとなし、通りに稅官所を置き、代官を任じて統治したるは。維新の當時迄然りしが、此制或は古より續繼したるものならん。慶長頃の記錄に通と言ふ事の見えたるにても知らるべし、本村は此向中野通、見前通の兩通に分屬せり。而して村數は時々異動ありし者の如く諸種の記錄に見えたり、左に其一二を擧げん。

(一)『南部御領内御村帳』(貞亨元年五月御書上)

志和郡四十八個村の條拔書(志和郡は五十一村あり三村は八戸領)

煙山、矢澤、矢羽々、赤林、廣宮澤、

(二)『御領分鄕村並御高御書上寫』(元錄十二年三月)

紫波郡の條拔書

煙山村、矢羽塲村、廣宮澤村、矢澤村、赤林村、

(三)『封内鄕村志』(安永九年改)

向中野縣の内

赤林村、廣宮澤村、煙山村、

見前縣の内

上矢次村、北矢次村、南矢次村、

(四)『南部秘事記』(年代未詳)

向中野通の内

赤林村、廣宮澤村、煙山村、

見前通の内

北矢幅村、下矢次村、上矢次村、又兵衛新田村、南矢幅村、

郷村志に載する所の縣なるものは、古のアガタを稱したるものなりとの說あれども、如何にや、其分割の殆ど通と相同じさまより見れば、或通をかく記したるものにあらざるべきか、縣と載せたるは『郷村志』以外には見ざる所なり、尙考ふべし

又同志の村名に、北矢次、南矢次、とあるは、北矢幅、南矢幅の誤なり

以上擧ぐる所に據りて、本村はふるくは五個村なりしを、後に矢次村は分れて上矢次、下矢次、北矢幅となり、南矢幅は分れて又兵衞新田となり、總べて八個の村となりたるなり。即現今の大字數と合せり。

維新の改革行はれて、明治元年戊辰十二月直隷となる、翌年七月盛岡藩に屬し、三年庚午八月盛岡縣に屬し、五年壬申正月縣名岩手と改めらる。此間の統治の方法は頻繁なる變化あり、永井村（今の飯岡村）に郡長を置きたるあり、盛岡川原町圓光寺内に第六區會所と云ふを設けたるあり、本村は是等の治下にありし也。後地方に扱所を置くに當り、第三番扱所を赤林村に設けて本村を管す、次で之を廢し第二番扱所の管下に加へ

らる（見前村にありて現今の見前煙山西村を治む）。明治十一年村自治制を敷かるゝに至り、廣宮澤村、又兵衞新田村の二所に村役所を置き、本村を分轄せり。同十七年更に東見前村に、東見前村外十一個村戸長役場を設けて本村及見前村の全体を管す、明治二十二年町村制の實施と共ゝ本村は分離し八個村を併せて初めて煙山村と稱す、大字赤林に煙山村役場を建つ、後五年にして大字上矢次に移る。

三　位置及境界

紫波郡の西北部に位し、東北鐵道東端を北走せり、盛岡市を距る三里、日詰町を離るゝ約二里半なり。東は鹿妻堰を隔てゝ德田村に境し、西は南昌山の脉によりて岩手郡御所村に境し、南は不動村に接し、北は飯岡村に連る、東北の一端は小丘をなして見前村に望む。境界に就ての變遷を記すべき事なきが如し、唯元治元年の撿地に際し、煙山村の内（今の大字煙山村なり）白澤馬塲と稱する小部分を割きて白澤村に屬せしめたる一事あるのみ。

『南部秘事記』

向中野通

六十六軒　煙山村平地

本村　二十九軒煙山村

枝村　十軒西屋敷、六軒馬場、十五軒城内、四軒耳取、二軒鳶ヶ年

と載せたり。此内の馬場と稱する地の削り去られたるなり、現今は不動村大字白澤の内に屬せり。

（不分明、地理的實査を要す）

南昌山

一　端書

脈を云へば中央火山脈に屬し、位置を言へば煙山村の西端に聳つ、直立――尺、あ

てやかなる天つ姫の肩細く座したるに似たり。豊かなる青き木々、袂に卷きて溫むる如く幾百の民のかまどを賑はし、清く白き水は乳を延べて、はぐくむ如く幾千の田畝に灌げり、實に此の山は我が郷土の母なり。

山中南昌山神社の鎮座あり、又瀧あり、窟ありて自然の美を集む。我が村の平和はこの山に籠れり、我が村の幸福は此山に出でたり、尊い哉。

古來その名山として知られたる、亦所謂なきに非るなり。

將軍德川家治の時、寶歷十一年巡撿使柳原左兵衞、久松彦左衞門、布施藤五郎等南部領を過ぐ、時に名山名蹟を調べたることあり。此の記中に此南昌山を載せたり、又明治十四年、

鳳駕　東巡の際川田剛が奉記したる、

『隨鑾記程』に曰く。

七月十九日の條、

左望南昌山嶺右顧多々良山渡明治橋駐　蹕岩手縣治云々

此の山の名ある斯の如し。

二　山稱起原

『封内鄕村志』に曰く、

南昌山　城府西南紫波郡屬飯岡縣　相傳初毒森　今曾惡龍捿止之境故山上時々以噴起毒氣氣不斷禱祭之以稱祟權現有所謂未知詳

又曰此山登行路被裏千雲霧山峽轉石驚魑魅湲山流水四十八瀨揭厲涉潺溪厓嵬五十余町仰雲衢登臨履脫塲

又山中有靈湖其周圍十二三里然自古無近觀其境者曾非有禁耳靈威烈敷故也

又自是流出有瀑布凡五百餘丈宛如從雲上灌出之故未曾有之大飛泉也

又一方白龍樓老岩窟有焉其中幽暝淺深不可測也旱魃年至干當山禱雨立有靈驗云（飯岡縣は向中野縣の誤なり）

形容誇大に過ぎて信據すべきものなしと雖も、聊か其一班を窺ふを得んか、而して此山の名稱は古くは德ヶ森と稱したりと見えたり。さるを國音の通ぜるより、濁りて毒ヶ森と誤り呼びしが、ろれより毒龍捿めりなどの附會の說をなしたるものならん。或は獨ヶ森とも見えたり、元錄年中越前の僧空念といふ者諸國を歷遊して、盛岡聖壽寺に寓せし事あり、此僧南部侯に謁して城南毒ヶ森の名宜しからず、改めて南昌山とすべき由を述べければ、信恩公根市恭齊に命じて南昌山の記を作らしめたりと云ふ。又『德焉家訓』に曰く、

元錄十六年、聖壽寺に回會の僧あり、或る時獨ヶ森を見て言ひけるは、此山に邪氣籠れる瀉あるべしと。果して折々狂風の起るあり、久信公（信恩公の初名也）聞召して儒臣根市政德（恭齊と號し林家の門人也）に命じて記を書かしむ、同人謹で之を考へ南昌山と稱し、其文を致して久信公に奉る。云々（僧は越前より來る曹洞宗の道心にて名を空念といふ云々）

盖し空念が、南昌山と改むべしと申したりとの說よりも、儒臣恭齊が考へて命名し

たりとの說、確かなるべし。

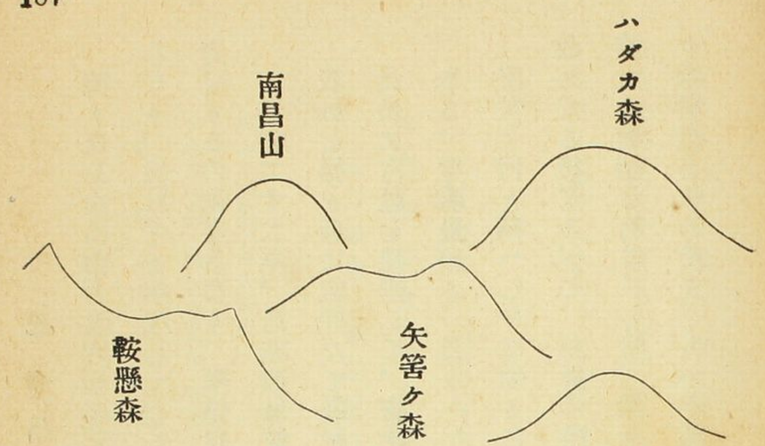
南昌山
滕王閣序曰南昌故郡洪都新府盛岡城之南有山
謂德森俗誤謂毒森
太守曰德之音近毒恐後世專
稱毒森爾其改之伏名之
曰南昌山夫南
太守之氏也昌盛也此山在干
盛岡城之正南
太守之祥如山高不騫不崩昌而傳究因名之曰
南昌山

奉書紙に認めて恭齋が藩公に奉りしもの也

字積は原本と違ふ所なし

これ即、恭齋が記したる南昌山記なり。

左に南昌山の圖を出す、子敏樣御筆とあり、こは『德焉家訓』に載する所なり。



之を東根（あづまね）と云南昌山は附きたる樣には見ゆれど余程離れて獨り立つ故に昔は獨ヶ森といふ

先屋形の節根市權四郎南昌山と名付けたり

此山々と眞南との間は恰度升形の方角に當る其方角の山は大低湯坂邊にも有之べくや又は多々良よりは上るがのやうに考へらる也

右は子敏樣御下屋敷御居間より或時山山を御覽あり御筆を以て昵近の士に指し玉ふ寫也

右御筆は多賀長護兵藏所持之

三　南昌山神社

德ヶ森を南昌山と改めしは元錄年間にあれども、南昌山神社の創立は遠き昔にありしなり、然れども年久しくして記の傳へしものなく、今その據とすべきものなければ、考証するの術なきなり、唯傳說あり。

延歷二十二年、造斯波城使坂上田村麿當地にいたり。此神、田村麿に敎へ宣く、我社を德ヶ森に宮柱たて敬祀せば、甘雨を降らして霖雨を止め給はんと。田村麿即此山に宮社を建創して、齋記し奉るといふ。後旱災雨害あることなし、遠近幣帛を奉る、靈驗最顯る。云々

社號を何と稱へしやは知るに由なし、南昌山靑龍大權現と稱せしは南昌山と山稱を改めたる後なるべし、維新の時まで斯く稱し奉りしなり、明治四年神佛の混同を正し諸社の興廢を行はれし時、頂上の社地より現今の地に遷座し奉りしものなり。此時毒ヶ森神社と改めたり、古への誤稱を復したるは口惜しき事なり、當局の小吏不文の致

す所なるべし。明治二十八年七月社掌宮崎求馬氏彼の根市政德が南昌山記によりて、南昌山神社と改稱せんことを官に請ひ之を許さる。

祭神は靈神にして、本尊、寶物等別に有るなし、今社內に存する棟札は左の如し。

（表）

天下泰平　國家安全　別當祇陀十六世

奉造立南昌山御堂一宇

日月清明　寶祚長久　先達華藏院明順

（裏）

嘉永二酉星十月大吉祥

大工棟梁　煙山善兵衛　年治　　木挽伊　助　世話人　南矢羽々　庄左衛門

脇棟梁　川村長平　安道　　平野久松　矢次助左衛門

川村万右衛門吉治　　畑山勘太　南矢羽々孫太郎

佐々木權八吉光　　万四郎　矢次三右衛門

矢次助太郎

煙山要助幸一　煙山嘉七
前澤金次郎　煙山勘之助
瀬田石久治　御山肝入助十郎
村松治右衛門　仝　長七
川村仁太　御村肝入重助
佐々木駒之助　仝　助五郎
巳之松　仝　庄太郎
孫市　盛岡世話人
大藏　孫十郎
林藏　万兵衛
万助

青龍大權現と稱したるにつき一説あり。盛岡に祇陀寺あり（今江刺小路にあり）、昔其寺の邊に大なる池あり、その中に年古く棲みし龍蛇ありしが、世の開くるに隨ひ池中の住居叶

ひがたく、南昌山の潟に移り棲みたり。去るに臨み祇陀寺の住僧に故を告げ、且贈るに鱗二枚爪一個を以てし、尚一箇の石を出して此石の形せる山に行くべしと云ひて失せたりと。即南昌山に移りたるものなり、後土人青龍權現を尊崇せり、云々。今祇陀寺にその石（青龍石といふ）を存せり、鱗と爪とは正德年中、盛岡火災の時此寺また災に遇ひ之を失ひたりといふ、左に出せるは祇陀寺所藏の青龍石記なり。

青龍石記

干茲有石名青龍石也古當寺開山和尚崇信於青龍權現而使爲當寺鎮守或夜開山和尚夢中因干鎮守之托授而所設青龍石今是也然則傳又載尚矣千歲之下豈虛也哉夫其爲盾哉似龍頭今大如礫其爲色也似崑崙今黑如漆有艶如生有靈如在遐見之則生威獰而坐來新涼起邇執之則重也十斤將信將疑歟非有目非無角鼻氣如飛於臭煙目光似照殺於人或以爲奇石忽瞑暗吐毒霧想風前只恕與雲飛矣若夏汗梅雨冬熅嚴寒豈測乎青龍權現之化石必矣所謂青龍權現則本池法身鏡女薩埵而印土則垂化於阿耨池支那則黃鶴山本朝則山

城國葛野郡梅ヶ畑當國則南昌山俗謂毒ヶ森本社出現之地也此外諸國可不遑枚擧凡厥本朝降臨以長暦按之則和銅年中也寔蒼生安逸天下鎭護之神石而爲法王爲庫內靈寶也矣旨

天正十八年辰中秋

當寺　中興　久山昌

拜誌

花押

南昌山と祇陀寺との關係は、未だ詳がに調ぶる能はざるは遺憾なり、明治維新の際まで靑龍權現といひて祇陀寺常に之が別當たりしを見れば、俗說としても他に如何なる關係かのありしは疑ひなし。

今の社のある所は昔は遙拜所なりしが、雨請ひの祈禱といふは每年行はれたりといふ、祇陀寺の僧また之に臨めるなり。

舊社地（即山の頂）には今も尙木柵を廻らして、石製刻の獅子頭を安置せり、これを權現樣といふ。今の社地を新山といひ神社を俗に新山堂といふ、夏日旱天の時、又作物の虫害を避けんとて、當社に詣り奉幣するもの今尙絕ゑず。

四　木と水と

諸木繁茂して用村に富む、此地方の民は古へより此山によりて木材を仰ぎし事論なし、而して主として炊料木を穫りたるものなり。

享保中、南部公當山を別ちて本村及湯澤、永井（飯岡村）、藤澤（德田村）、見前（見前村）の諸民に賜ふ。西面の一部岩手郡に接する部分は御所村の民に賜へり、當時此等の民に証書を下附せらる、之を古証文といふ（古証文の寫を揭げんとせしも今村に存せず遺憾ながら寫す能はず）。後慶應二年境界を吟味し、繪圖面を調製して下附せらる、左に其地圖に載せたる袖書を出す。

雫石通安庭村矢櫃御山の內、飯岡通飯岡新田下飯岡村、上飯岡村、下鹿妻村、羽塲村、向中野見前通永井村、赤林村、湯澤村、廣宮澤村、煙山村、高田村、藤澤村、

上矢次村、下矢次村、北矢幅村、南矢幅村、又兵衛新田村。德田傳法寺通北郡山村、太田村、中嶋村、陣ヶ岡村、高水寺村、西德田村、間野々村、上松本村、下松本村、小屋敷村、吉水村、南傳法寺村、岩清水村、和味村、北傳法寺村、室岡村、白澤村、御百姓共へ先年より炊料山に被下來り候場所、此度雫石通郷村御吟味御序を以て、御山境御取据被下置後々安心にいたる樣被成下度旨、願出候、村方も有之候に付、安庭村並に前書村々御百姓共、安庭村御調出役植澤練藏、中川練八にて御尋ね候上、猶組頭荒木田武助、高橋万左衛門にて其々相尋候得共御境何れも區々に申出慥成諸始末も無之候に付、御見分の上永年安心にいたり候樣、御山境御取据被成下度旨申出に付、御撿地奉行田邊源藏、阿部九兵衛、組頭高橋万左衛門、福嶋囚司罷越前書村々御百姓共爲至、先立右場所を見分吟味の上永年安心に至り候樣、委敷御山境御取据の繪圖面此度相下げ候條、向後御山境取失ひ不申樣可仕候。前々御沙汰の通御制木一相障不申炊料剪取共御山取荒不申候て、後々諸木繁茂候樣急度相守可申旨、

前書村々御百姓共へ此度御沙汰被下候條、向後繪圖面の通地郷御百姓共炊料山に被下置候、御山境、取失不申樣急度相守可申候也。

慶應二丙寅年四月

郷村吟味御用所 印

五 風景

(一) 頂上

曉頂に立つて明星の形を追はゞ、白雲腰を纏ふて身は神に入らんか。

東雲薄紅をさして、やがて紫に再び紅に收まりて、眞朱の笹緣を縫ふの時、金絲斜に直に流れて黄鏡除ろに世よ望まば、見渡す下界は白靄の帳を脱ぎて、そこの森に炊煙寛やかに靡くを見ん。さはれろの森は一鎌に足らず、その煙は飯椀の湯氣にも似たり、况んや堤と云ふものは一つの露とも見え、一流の川は銀糸の細さを捨てたるが如きに至りては、自然の美に醉はぎんばあらざるあり。双瞳百里の大景を此頂に集めた

る南昌の神は、詩人よ汝に絶大の想を與へん、丈夫よ汝に豪洪の氣を許さんと、常に囁いて止まず。

（二）瀑布

數ある中に、大瀑（たき）、布懸瀑（ぬさかけ）の殊に見るべし。前者は四丈に餘り後者これに半す、狂奔岩を嚙みて白龍の遡るが如き奇は、大瀑に見るべし、肅々迫らぎ硝簾春雨を織るが如き雅は、幣懸瀑に求むべし。彼は雄大を以て優り是は清洒を以て勝る、春の若葉、夏につゝじあり、藤あり、秋の紅葉、冬の雪、常にこの邊を掩ふて一層の景を飾る。

『封内鄕村志』　南昌山瀑布

城府南紫波郡飯岡縣（向中野縣之誤也）是千丈之瀑泉宛然自辟天如灌出之者又引數千匹布帛以不異灑濯之者實未曾有壯觀也凡群國雖普流布天下名瀑而不可有出其右者云云

又曰曾此山靈有深秘而總禁謂山境之遺蹤狀態故未遂登山者不能聞其絶勝如何

こは大瀑を云へるものか、修飾の文字眞景に遠きものなきにあらずと雖も、其名の聞へたるを知るに足らん。

（三）湖

『封内鄕村志』　南昌湖

城府西南紫波郡飯岡縣（向中野縣之誤也）是南昌山靈沼也神龍所栖止故旱魃年到此祈雨必應驗新也登山之者以靈沼奇恠之狀態禁語他人偶近其湖身髮竦然股慄而目生鬼悔情云

（地文の説明を要す）

これ祇陀青龍の事より云ひたるものなり、往時は左程に大なるものにありしや否やは今日殆ど想像し得ざる程徵なる跡を殘せり。されば景に見るべきなく、落葉徒らに積みて蔭草空しく閉せり。

（四）窟

『封内郷村志』南昌山窟

紫波郡在南昌山嶺上　俚人相傳昔惡龍捜老之窟宅也故此山中毎起毒雲惡氣不止且屢有霪雨憂因最初名毒森時以太守憐民害改山名以爲南昌山且祭惡龍爲青龍權現爾後垂跡而已人到此無敢鬼怖之志　祈雨必有應顯云則鎌倉江島龍窟之比乎

今、岩小屋と云ふ所あり、これならんか、位置は頂上にあらず而も奥深きものにあらぎ、惡龍云々の說はもとより俗說ならん、此近傍奇岩恠松相綴り宛たる紫派の妙畫あり。

此山は粗鬆なる火山溶岩と軟脆なる凝灰岩とは大部分を占む、岩石の風化が奇形をなせるものあるは當然なり。附會の說笑止なり。

（五）笊淵

南昌神社の左側の河流中にあり、岩石凹んで凹形の穴をなし階をなして二つあり、清水藍を染めて泉の如し、笊淵といふは凹き淵の意なるべし。

第三紀の凝灰岩が氷解期或は洪水のために、流下する激浪と碎岩の爲めに浸されて此凹を生じたるものなり、酉磐井巖美溪の如きもこれと同一成因なるべし。

俗傳あり、

往古源頼義、安部氏を討ちし時、貞任毒ヶ森より毒を流して此川水を官軍に呑ましめざらんとす。義家即ち笊を水に浸し毒を避けて兵士に呑ましむ、其跡今に殘れるも即ち是也。云々

耳を傾くるに足らざる事ながら、其笊淵なるものゝ奇形は略々知るを得べし。

附記

南昌山を下りて鳶ヶ平と云ふ所に至れば巨石あり、馬跡形の粗末なる凹あり、土人これを八幡太郎義家が馬蹄を印したるものありと云ふ、此地は陸奥古道に近きは稻荷街道の條を見て知るべし。而して此等八幡太郎義家に關する傳說あるは、また遇然にあらざるが如し。

八幡公や弘法大師の附會到る所きかざるなし、忘傳特記すべきものに非らず。

陸奥古道 並 木、一里塚、

大字赤林の西北端を過ぎて大字廣宮澤の殆ど中央部を横斷し、南昌山を右に大字煙山の西部を貫き岩崎川を渡るもの即ちこの街道あり。南すれば不動、水分を經て志和村に至るべく、北すれば飯岡、見前、本宮を過ぎて盛岡市に達すべし、舊藩南部公志和村なる稻荷大明神に參拜したる道筋なりしを以て、この名を得たり。今は往來稀にして草蓬に委せり、たゞ志和酒を盛岡に鬻ぐものたまたま馬蹄を印するあるのみ、然れども整然たる並木の松は廣やかなる路幅を保ちて、昔の色を替へず今猶歷然たる當年の面影を殘せり。

考ふるに、此街道は古への陸奥の路の跡を存せるものなり、康平中源頼義浮酋安倍を討ちし時は、此邊より嫗戸柵の方へ路の開けありしと云へり。思ふに彼の日詰の西

なる陣ヶ岡は頼義義家の駐軍の地ありと傳へたれば、彼處より今の志和村に出でゝれより北に向ひて當村の邊にいたり、廣宮澤の西部より山の方に添ひ蔦直に嫗戸の方に進みしものなるべし。

文治の役、源頼朝、藤原泰衡を征するや多く祖頼義、義家の例に倣へり。事『東鑑』に散見す、厨川柵に泰衡の首を得んことを願へる、泰衡の首をさらすに貞任の首をさらせる者の子孫を求めたる、皆ゝの一例なり。而して彼の陣ヶ岡に陣せるもまたそれなり、かゝれば其道筋の如きも必ずや曩祖の跡を追ひたるなるべし、即この街道は源頼朝が通過したるものにして此時代猶奥の通路たりしなり。

故に此街道の大字煙山の邊より廣宮澤の北端にいたるまでは、純乎たる古道の跡を止めたるものなり（勿論位置の變動の如きは多少ありしなるべし）。而して赤林の北端より盛岡に通ぜる道の如きは、後ち人文の發達に伴ひて開かれたるものにして、一の細路たるに過ぎざりしなり。然るに南部氏糠部に移りて不來方（今の盛岡）に部將を置く等のことありしより、勢ひ交通の

路に一變化を與ふるに至り、嫗戸に通ずる路の如きは漸やく廢絶するにいたりしものならん。

『篤焉家訓』往古の往還、

往古往還跡は上田堤の上より法泉寺下、それより報恩寺前下小路、今の春木塲の川を越え妙泉寺山下より八幡横町に出で、松尾社の前上小路神子田へかゝり舟渡し也。仙北町今の升形の邊へ出で、それより向中野道へ出で東根(あづまね)山の下通りを、山續に花卷まで出づるなり。

又云、往還は花卷より西山根通志和へ出で、それより山根通り向中野へ出で、渡しを越ゑ鹿渡へ出で神小田より上小路へかゝる、東願寺前より今の馬道に出で尾崎社前より、天神の脇道より妙泉寺渡しを渡り、春木塲の所を越え陀彌陀堂より、關口へ通ると云。

と見えたれば、此二說何れとしても『山根通』『志和へ出で夫より山根通』とありて、

向中野道に續くと見ゆるを以て此街道は常に含まれあるべきを知るべきなり。而して新道の開設せられしは、何時にあるか我れ未だ聞くを得ず(新道とは今の國道也)或書に重直公時代即明暦年間にありといへり、されど誤なり此以前に開通せるものなるべし。

『篤焉家訓』

明暦三年酉年正月本郷の本明寺より出火、十八日十九日江戸大火事に付、諸國御大名御類焼の御方御救仰せ出さる、山城守樣にも二月廿一日御暇仰せ出され三月一日江戸表御立ち同十五日御下着、其節郡山より津志田町まで御歩行にて御出で被遊候處、御領内街道曲り或は山坂茂り悪候間、新道を直になされ兩脇へ並木松植ゑ立て、日光街道の樣に仕候樣仰せ付けられ、花卷筋は御城代へ仰せ付けられ盛岡より郡山まで並に雫石は赤前治右衛門、日野左近兵衛、盛岡より奥筋は工藤右馬之助、町の彌一右衛門仰せ付けられ候事、即重直公(廿八代山城守)は曲りを正し並木を植ゑたるのみにして此時に新道を開通せしにはあらざるなり。

以上の新道、即現今の國道開通してより此街道は一時荒癈に歸せんとしたるもの〻如し。然るに藩公稻荷社に（稻荷社の草創不詳斯波家長建つるといふ）參詣せらる〻時は猶この路をとられしを以て、南部利濟公（三十八代）に至り大修復を行ひたり。

『篤焉家訓』

天保五年十月志和御社一の道筋山道の方難所の場所も有之候間、日光街道同樣左右に土手築立並木植ゑ候樣仰せ出さる。

但御側よりの御普請にて御用掛り等無之、至十一月道普請成就。

天保六年四月七日、舊冬御沙汰有之候志和社への道筋左右へ土手を築き、並木松植立一里塚出來榮に付御次衆五六人にて内見分有之、後貴賤群集夥敷云々。

同　五月七日、志和へ御社參御子樣方御同道七つ半頃御歸城。

こゝに至りて舊態に復し更に一層の体裁を備へたり、後常に藩主の修工ありて、明治維新にいたるまで堂々たる街路たりしあり。

維新後藩主の修復たえてより、人跡また隨て絶えたり。

一里塚

一里塚の起原につきて、

『篤焉家訓』

慶長九甲辰年二月四日、江戸より諸國道中筋へ一里塚被仰付段、公儀右爲、御奉行大久保石見守御廻り、同十五年五月出來。

『奥南餘錄』にも同じく五月下旬出來とあり、これ全國に於ける一里塚の初めともいふべきか、我地方にありては前記の如く明暦三年に始めて築けるなり、而してこの一里塚には必ず榎を植うる制なりといふ。

『武用辨略』

榎は根深くして風に耐に梢高くして遠く望むべし、故に塚に植う云々。

又一里塚に木を植ゑて印をなさんとて、松の木は根もろく風に耐えず、故に餘の

木を植ゑよと沙汰ありしを、ヨノキをエノキと聞違ひて榎を植ゑたり云々。

稻荷街道の一里塚には榎を植ゑあり、これらの制によりたるならん。

並木

並木は日光街道に眞似て、明暦中初めて南部封内の要道に植ゑたるものなること前にいへり、稻荷街道の並木は天保五年に植ゑたるものなれば、明治卅五年を去る六十八年前なり。

鹿妻堰（上堰）

飯岡村より來りて大字赤林の西北端、釜淵の池より本村に入る用水堰をいふ。釜淵より志和道（稻荷道）を横ぎりて小分流を出し、進んで東の方銅屋の邊を過ぎ的塲といふあたりに至りて二つの分流を右と左に出せり。右するものは上堰と稱し、方面南に轉じて赤林の東部を走り、下矢次、北矢幅、又兵衞新田等の大字を經るものに

して、左するものは小鹿妻と言ひ東して見前村に去る。本流はこれより東、寧ろ東南に迂回し行く〳〵本村と見前、德田諸村との境をなし、大字北矢幅の東端より德田村に入る。而して本村の灌漑に最も關係あるせのは先きの上堰と稱する分流なり、今その灌水田反別を擧ぐれば、

反別
- 直接灌漑、二百十八町五反二畝四歩。
- 間接灌漑、六町三反七畝十七歩。

區域
- 赤林、下矢次、北矢幅。
- 又兵衞新田、南矢幅。

の如し。此用水堰の源といへば、即彼の飯岡村の農夫、好漢鎌津田が一臂好く斷巖を穿ちし雫石川の水を引ける穴口なりとす（穴口とは岩に穴したるよりの名なり、この堰を穴口堰ともいふなり、上流を米ケ島川ともいふ。）今左にその略傳を出さん。

二千三百十町一反二十四歩を灌す（全流）、寛文九年丹波國人鎌津田甚六紙町吉田甚之亟と謀り藩主より金

五十兩玄米百五十石を貸りて土工を終にたり。同年四月畑高十石免祖給與す。（岩手縣河川調査による）

『岩手縣史談』　鎌津田甚六之傳。

本郡（紫波郡也）飯岡村の農なり、常に岩手郡の南より紫波郡に亘り其土地膏腴なるにも拘はらず、多くは火田にして拓きて水田となしたるもの少なきを慨し、灌漑の方法を講じ之を水田に變じ、以て大に民利を興さんことを謀る。而して水利を難んず、一日岩手郡上太田村に往き雫石川を觀る、川に枕して山あり斷岩崖をなす、甚六以爲らく隧して之を延くべしと。因て地勢をはかり其策を得て之を藩に申す、土功を興さんことを請ふ、藩主其請を聽す、即慶安二年工を起し同四年成る、之を大鹿妻溝と云ふ。藩甚六に稟米十二苞を給して世々其溝を監守せしめたり。其後該溝の修繕は村費に屬し來りたる所、寛文十年二月十六日盛岡市紙町の商甚七なるもの、藩主に請ひ金百圓を得、更に關門を三所に設け、大に水勢を增し水利を普及せしを以て、藩主其功を賞し該水路の近傍に於て畑高十石を與

へ、永くその溝を監守せしむ、而して其修繕は自費を以て之を辨ぜり、爾來水利の及ぶ所極めて廣く、火田變して水田となりたるもの三万石に下らずといふ。

傳に非ず工事の經過を記したるもの〻如し、其詳傳を得ざるは遺憾なり。今この穴口の岩角に名ばかりの詞あり、これ甚六を祭れるなりといふ、慶安當時にありての大事業家を、土百姓の中に出したる、稀有の事といふべし。偉なる哉。（土百姓に非ず、彼は南部人種に非ざりき、丹波國人なり。）

淺子（あさ）留（どめ）

大字赤林の西部大字上赤林といふ所にあり、鹿妻溝の分流に水を上げんがために、本流に木材を以て種々の構造をなし、大石土俵等を入れて水を停めたるあり。（留とは凡て此の如きものにして、所々にあり）。

傳へて云ふ、此所は岩手紫波の境なる飯岡館に住したる、飯岡平九郎高道の後裔庄

太郎が、郡山の城主なる志和安勢守家定に攻められし時、庄太郎の愛嬢砂子姫が手弱き身に、志和勢の剛の兵士を敵手取り奮戰して華々しき討死を遂げし地なりと。地名は即ち姫の名に出でしものにして、イサゴと云ひしを後にアサゴと訛り、淺子の漢字をあてたるとのならん、左に砂子姫勇戰の一節を抄出す。

『志和軍記』

志和勢押寄せ無二無三に攻めにける、然る所に砂子姫この由見るよりも急ぎそれ〳〵裝束を改め、駒引き寄せてゆふりと乘り、大長刀を手に提げ大手の木戸を颯と開き、推參なる奴原かな、先達(この數日前にも勇戰の事見えたり)我が手並に惶れ逃げ退きて、またもや寄せ來る臆病もの、一とちらしに打ち破らんといふまゝに、大長刀風車の如くに振り廻し、大勢が中へ割つて入り、東西南北に驅け通し、十文字八つ花形といふまゝに、當る所を幸と梨子割切りに袈裟切りに、露拂にと切りければ、屈竟の兵士廿七騎一つ枕に切り伏せたり。志和勢大勢といへ

ども、砂子姫の勢に恐れをなし、村々パッと逃げ行きける、然る所に遠野孫三郎の良從に綾織久之進といふもの、ヤァ砂子姫とやら斯く申し久之進太刀討物面倒なり、組手の勝負と呼ばッたり。砂子聞いてオー〳〵心得たり望む所の幸と、押並びムッと組み付きエイヤ〳〵とねぢ合ひ取合ひ暫く勝負はなかりける、綾織叶はじと思ひけんかけはづし逃げ行く所を、砂子追ッかけ首を切り長刀の切先に貫き、綾織久之進が首をば砂子姫討ち取ッたりと、高らかに名乘り城中に引かんとする所へ、杉崎大助と名乘り砂子姫に切り結ぶ、砂子姫大助が鎧の上帶をかいつかみ、一振りふッてエイヤと投げつくれば、大助半死半生になれる所を、水もたまらぎ首打ち落す。然る所に福田民部と名のりて砂子姫に組み付きしが、民部をも組み伏せ首かき切る。然る所にドッと大勢寄せ來りければ、砂子も不叶とや思ひけん、ワット引退きしが、追懸〳〵攻め來るに如何はせんと思ふ所に、小山田勘四郎と名乘り追ッかけ追ッ詰め組まんと云ふ、砂子心得たりと彼所に駒乘り乘

てゝムッと組む、勘四郎砂子姫に組み伏せられ、既に危き所に達曾部右内姓も名乗らぎ、砂子の首を打ち落し、刀の先に貫きヤァ飯岡の兵士これを見よ、鬼神に働く砂子をば斯く申す達曾部右内討取りたり云々。

（元龜三年の事なりと云ふ）

志和軍記の記する所、殆ど信じべからざるものあり、年代の矛盾人物の轉倒噴飯に堪えざるもの多し、斯波氏（郡山住）の系譜今詳あらずと雖も、家定など云ひしもの未だ聽かざる所なり。此書の文体より見れば、所謂奥淨瑠璃なるものにして、章の首尾、『さても其後』と起し『申計りはなかりけり』と詰びたるものなり（異本あり章「段」を分たじ書下したるものなり、然れども内容に至りては差ふ所なし）。されば恰も彼の戲曲の如く、僞作の文字もとより多きに居るなり、然れども戲曲に於ける忠臣藏、國姓爺、先代萩の如き、奥淨瑠璃に於ける田村三代記、一ノ谷合戰の如き、多くの虚説を構造したりと雖も、而も其骨子とする所は皆歴史上の事實を挿へたり、されは此軍記の如

きも強て虚僞のものとし、全然捨つべきものに非ざるなり。況んや飯岡村に飯岡氏居を占め、郡山に斯波氏（志和といふもの）城を構へありしこと史に明にして、彼の元龜天正の交弱肉強食の暗黑時代に於て、這般の戰爭ありけんことの直に想像し得らるゝに於てをや。即この飯岡斯波の合戰を骨髄とし、多少の肉路を添へて一の軍事小説的なる冊子を成せるものは、この『志和軍記』ありと見做さば大なる誤りに非ざるべし、故に砂子姫そのものが果して彼の如く勇猛の女丈夫たりしや否やは暫くおき、飯岡正太郎の娘に砂子と呼ぶありて、元龜の戰に討死したりと云ふ事のみは斷言し得べきなり。

されは口碑の如く淺子留の地は、砂子が可憐の花顔にあらぬ紅葉を散らしたる古跡なりと、我は信ぜるなり。

鍋屋敷

大字下矢次にあり宅地の名あり、もと長沼某の居住したる所ありしが、今は他に轉賣せられたり。

『志和軍記』

一、見前通のうちに鍋屋敷と申所あり、是は志和御所飯岡と合戰の時、釜、鍋を据えて御飯を炊きたる所故、鍋屋敷と申也云々。

とあるは此所なるべし、下矢次地方の見前通に入りありしことは、村沿革の條に言へり。鍋を据えて兵食を煮たりし其路に、屋敷を取りしより、斯く言ひ名づけしものならん。或は傳ふ、往古八幡太郎義家東征の時、粮を炊ぎたる所なりと何れにや。今岩手郡好摩の少し北にも、同じく鍋屋敷の各を存せり、其他所々に斯かる地名の見ゆといへり。此等も同じ類ひのものならんか、『南部秘事記』に曰く、今の大釜といふ地は、古源頼義の兵食を煮たる釜を据にし所なり、土人其釜の大なるに驚きしが、後地名となしたるなりと、これらを考へ合すれば、鍋屋敷の如きも無根の妄説にも非ざるべし。

煙山舘

（論據淺薄、科學の研究を要す。）

大字煙山にあり、城内舘ともいへり、今は城内山とて一の丘あり。其頂に階段の如き跡を印して僅に舘墟を殘せり、この舘の書に見にたるは、

『奥南盛風記』（斯波没落の條）

紫波の支城煙山に居る、煙山山城守も紫波と同時ょ没落上方に上り、京都に幽居し長命して歿したりといふ云々。

『封内郷村志』

煙山舘　煙山山城守居　斯波之士也云々

蓋し煙山氏の居を構へたる所なり、煙岡氏は斯波氏に事ふ。故に此舘を支城と稱せ

しものならん、天正十六年主家亡ぶ、當館また同時に沒落せり。然るに今煙山氏系譜といふものを見るに(煙山氏後裔世々此地にあり南部氏に仕ふ、明治の後盛岡に移る、同市油町に煙山猶奴ありこれその末葉なり)。事頗これと錯悟せり、左にその略系を出して參照せん。

『煙山氏略系』

藤原氏

大職冠鎌足……藤原武智麿……十四代 行光

- 長光 工藤小二郎 文治之役源頼朝岩手郡及棚倉(寺舘)を賜ふ
  - 德光
  - 祐光 葛卷田頭 藤原祖
- 重光
- 光般
- 種光
- 兄求
- 兄丈
- 光典
- 千光
- 光氏
- 光林

- 光藤 廿六代大守大膳太夫信直公に奉仕八百石を賜ひ栗谷川に住居 初名小三郎 壽百十一歳卒(慶長元丙申之頃云々)栗谷川豊前と稱す
  - 光緒 栗谷川仁左衛門 寛永元年卒 葬盛岡松峯山東顯寺
  - 女子 志和右京室
  - 女子 - 簗田大學卒光顯室
- 光邦 煙山主殿御使番足輕三十人頭 南部利直公より志和郡煙山の邸三百五十石を賜ふ則寛永巳巳年霜月二十七日付利直公折紙黒印 志和郡上煙山村下煙山村三百三十二石本高此度撿打出十八石加増合三百五十石被下置御証文傳 此時君命子孫宛所煙山氏と稱す 寛永十三年丙子七月二十九日卒 上煙山村峯山實相寺に葬る法名煙峯院光山實相大居士
  - 光村 (源秀院殿の墓側に松を植うべき旨命ぜられ黒澤山より一間餘のもの二本を堀りて植う)
    - 寒光 煙山甚之亟
    - 光治
      - 光輝
        - 長光
          - 光堅
            - 秀盈
              - 秀明
                - 秀與
                - 光護
                - 光族
                - 猶奴

煙山主殿光邦、栗谷川氏に出で、南部利直の錄を食み初めて此地に居り煙山氏を稱したる如く見ゆ、時は寛永巳巳年即寛永六年にあり。『盛風記』に稱する所の煙山館沒落の年即天正十六年を距る四十一年の後あり、此處に至りて煙山山城守なるもは何人あるやを疑はざるべからず、煙山氏系山城守なる稱を載せざるを以てなり。然らば煙山氏なるものに二門ありしか、『將盛岡記』『鄕村志』の說を虛とするかの、二疑門を論ぜざるべからぞ、果して煙山氏に二門ありしか『盛岡記』の云ふ如く館陷りて後京に遁れたりといふ山城守と後に南部氏の封を受けし光邦と全然別人の如き感あれば、二門ありしとの說を作るを得るに似たり。然れども山城守が京に逃れたりとの事は信じべくもあらず、何となれば同じく『盛岡記』に斯波氏も沒落の後京都に住す云々の事を記せり、故に之を連關せる煙山氏あるを以て又京に去れりとの說をなしたるに過ぎず、而も斯波氏上京の說は斷じて虛妄なる事証據すべき記錄多し、即ち煙山氏京住の虛なるを知るべきあり、されば其末裔此地に殘りしこと明なり、且『南部根源記』附錄（根

元記上異なり）『南部秘事記』『篤焉家訓』等に載せたる諸家系圖に、皆煙山氏は栗谷川氏に出でたりとし、未だ二門ありとの說を聽かず、思ふに山城守といふも光邦といふも、同家ならんか我は暫くこの說を取らんとす。

『盛風記』『鄕村誌』の說は如何といふに、これもとより捨つべからざるものあり、試みに城内山の頂にその館跡を尋ねんか、地は高丘にして一睨數里を集め岩崎川足下を走る、地勢已に一方に雄鎭たり而して此土地を城内と呼びしは、城の内といふ意より來りしものにして、優に十數戸を有する一部落にして、町、石橋等の字右をさへ殘せり。次て其規模の狹からざりしを知るべし、豈たゞ三百五十石の小身者が企て得る所ならんや。且つ天正以後の南部氏が其小臣をして斯かる居館を構へしむることを肯ぜざりしや論なきなり、以てこの館の寛永時代に於て煙山氏の築きたるものならざるを知るべし。更に今日所謂古館として存するものは、一も天正以降に築かれたるものなきを觀れば、煙山館なるものは天正以前にありしものなること瞭然たるべきあり。既

に館の存在を確むる以上は必ずや住人あかるべからず、即煙山山城守あるものゝ祖が居にして、斯波氏の配下に屬したるものあらん。

煙山氏に二門ありしに非ず、『盛風記』等の説捨つべからずとせば即山城守光邦なるものは、同系にして天正以前に此館に居住したるものと斷ぜざるを得ず。

煙山家傳に云、中世火災に遇ひ多く傳寳証録を失ふ、今の藏する系圖は後に記したるものなり云々。又我が祖は世々城内に居す斯波氏以前にありたり云々と。されば强ち系譜のみを確と信ずるは早計なり、且ろの系譜中に女子斯波右京室築田大學室など見ゆるより見ても、斯波氏と關係ありしことを知るに足れり（斯波右京とは何人なるか詳ならず築田大學は斯波氏の重臣四天王の一人也）。

『奥南盛風記』新波氏沒落の條に曰く、

信直公高水寺の城に御入ありて、四民を撫育す、本田小屋敷を初め彦部、大卷、川村、星山、赤澤、乙部、手代森、柳澤、煙山、越田、黒森、此外追て降人に出で、

紫波六十六郷悉く御手に入る云々。

蓋し斯波城沒落と共に、煙山氏は南部氏に降りしものなり、後また舊領煙山に於て三百五十石を賜り、士籍に列せられしものならん。彼の光邦が自家の菩提所實相寺を建立し、氏神、神明社（不動村白澤にあり）觀音堂（後に出づ）を創建したるあどを觀ても必ず新封の士にあらず祖先よりの蓄財を握りありしものなるを察すべし。思ふに諸家の系圖と稱するもの、往々眞相を誤りて虚傳あるもの少からず、煙山氏系圖の如きも災後に記したるものなりと云へば、斯波に屬して南部に降るなどは後世に恥を流すものあるを以て、或は其間の事を省略したるものならんか。こはあまり推し量りの説ながら、斯かる例は獨り煙山氏に限らず數々見る所なれば、敢て當らざるに非ざるべし。

此館の毀たれしは、天正の時煙山氏の沒落と同時にありしならんか。

『南部秘事記』御當家御分國の古城大閣秀吉公の時、御書立の條に、

奥州南部大膳大夫分國諸城破却共書立之事

（前略）

一志和郡　片寄山城　持分之所　中野修理

同　肥爪（平城破却）　代官川村中務　信　直抱

同　見前　仝　代官日戸内膳　信　直抱

同　長岡平城　持分之所　南部東膳助

同　乙部（平城破却）　仝　福士左衛門

（後略）

破却城、見前あど見えたれど、煙山は見にず其規摸より云ふも其要害より見るも、此館決して見前館に遜色なし、而も其名の此書上に漏れたるは、其破却の早き時にありしを以てなるべし、今又『盛風記』を拔記せん。

『奥南盛風記』

奥州南部大膳太夫分國之内諸城破却書上之事

（前略）

一志和郡　片寄　山城　中野修理持分

一同　比爪　平城破却　信直抱（代官）川村中務

一同　見前　平城　同　日戸内膳

一同　長岡　平地　南部東膳助持分

一同　乙部　平地破却　福士左衛門持分

（後略）

城數四十八ヶ所此内不破城十二ヶ所右之外於諸城有之者此判形之者可被御成敗者也

天正二十年六月十一日

南部主馬助直愛（花押）

中野修理直康

南部東膳助重直

南部彦七郎直永

連水勝左衞殿　　南部左衞門尉信愛
軋源太郎殿　　南部帶刀茂實
　　南部彦次郎直榮
　　南部左馬助正慶

右之外諸城有之者此判形之者可被御成敗者也云々と見えたれば、此前後に於て破却したるものあり。

今左に煙山氏の、南部記錄に見えたるものを擧げん。

『重直公御代丙戌七月御改御支配帳』(正保三年)

二百石　　本名厨川　煙山主殿光慈

『普胤鑑考』由緒御書物顯號也

判雄御代寛保元年酉五月自り寛延二年己七月迄大小の諸士由緒故寛御尋有之並御黒印御覽有之　則信直公重直公彦九郎政直公御黒印也

寛永六年十二月廿七日　三百五十石　　煙山千左衞門

正保三年に二百石と見ゆるは如何なる故にや、且系圖に光慈なるものなし不審あり、煙山氏を稱したるものにして二百石以上の錄を得たるものは、寒光の甥に光胤と云ふありて八戸御分地に移り、三百五十石を食みたるものありしのみなれば、この光慈といふも必ず光邦の後あるべし。正保三年といへど寛永六年より僅に十七年の後なり、而して其錄の減じあるはいぶかし、普胤鑑考には三百五十石と見にて系譜と合せり、たゞ黒印の日附系圖には霜月廿七日と載せこれには十二月廿七日とあれど、こは何れにてもよかるべし、されば煙山氏が南部氏より三百五十石を賜りしといふは信實なり

煙峯山實相寺

煙山館の麓に位し大字煙山十六番戸の地にあり。

『封内郷村志』

實相寺　遠峯山　盛岡東顯寺末　報恩寺支配之

と載せたるはこの寺あり、境内四百九十二坪檀家三十五戸の小寺なれば、昔は名ばかりの草庵ありしならんか。されば今縁起と稱するものも詳しく傳らぎ、其草創の年月さへ明ならざる有樣なり、たゞ此地を傾したる煙山光邦が菩提所として建立したりと傳ふ。開山は嵩獄善壽和尚なり、煙山系圖を見るに光邦は寛永十三丙子七月廿九日卒とあり、又實相寺『過去帳』に嵩獄和尚承應二年六月廿九日寂と見ゆれば、此寺の創建は寛永間にあるもの〻如し。

光邦の法名を煙峯院光山實相居士と云ふ、この寺號の出づる所なり、光邦の建立したるものにして光邦の法名を號するといふは審かしく聞ゆれど、或は生前に法號を撰びしものか、郷村志に遠峯山とあるは煙と遠と音の通ぎるより誤りたるものならん。

光邦の父を栗谷川仁左衛門光諸といふ、寛永元年甲子二月卒し盛岡松峯山東顯寺に葬る、則東顯寺は宗家栗谷川氏の菩提所あり。これこの寺の東顯末なる所以ならん、左に此寺の要を摘み記さん。

一本尊　釋迦如來　木像

一開山　嵩獄善壽　木像

一法系　水平道元。孤雲懷奘。徹通義介。寶山紹瑾。峩山紹碩。無底良昭。月象良印。古山良空。天篠舜賀。南翁東橋。檀外天越。果翁如閱。當寺開山嵩獄善壽。

一本堂　縦四間半　横四間　芳屋

一庫裡　仝　仝　仝

一東司　一間四面　柾屋

一寺縁財産

境内立木目通一尺五寸以上三尺未満　杉卅二本
字煙山字高田三十九番
田一反五歩七歩　煙山氏寄進
仝上大字城内七、廿四番
墓地貳畝廿四歩　檀家共有地

一開山より現住まで十八世

觀音堂

煙山舘の麓にありて實相寺と二町ばかりを距れり、草創月日緣起等詳ならず、煙山氏の觀請する所なりと傳ふのみ。本尊は觀世音菩薩にして、鉄鑄の坐体なり、丈五寸ばかりもあらん、明治四年實相寺境内に移されしが後里人再びこの地に移したり、俗に燒觀音といふ。俗説あれども信ずべくもあらねば其何故なるを詳にせず。

幼稚なる觀察、皮相の材料、未だ正史と稱する能はざる論なし。余は後來餘暇の再調を期す。

（三十七年作）

志和の城變遷史稿

此稿は識者の高教を仰がんがために起草せり、此稿の參考書中には全編に通ぜずして其一部を讀みたるものあり、又他の著書に引かれたるものを借引したるもあり。此稿を脱するにつきて參考書及高説を、我師宮崎求馬先生より與へられたるもの多きに居る、茲に謹謝す。

誤説謬聞はもとより少なからざるべし。

明治三十五年十月十二日、

志和の城

熊襲漸く西に鎮定して蝦夷益々東に勃興し、奈良朝以來皇軍の東下累年にして而も討滅する能はず、粮栗庫に乏しく草むす屍野にや充つけん。

第五十代桓武天皇の朝、東夷また騒擾し征討の事數々あり。延暦十五年坂上田村麻呂を陸奥出羽安察使に任じ、陸奥守を兼ねしむ、尋で征夷大將軍とおす、二十年蝦夷また反せしかば節刀を賜ひて征せしむ、田村麻呂即ち陸奥に入り大にこれを敗り、蝦夷の巣窟を進勦して閉伊に至り殺戮殆盡く、廿一年膽澤城を築きて鎮所とおし東國の浮浪人四千を配移せり、是れ即志和の城にして實に延暦二十二年に築かれたり。

『日本逸史』

延暦二十二年二月癸巳令下越後國米三十斛鹽三十斛送中造二志和城一所上云々

『同　書』

同年三月造志和城使從三位行近衛中將坂上田村麻呂辞見賜二彩帛五十匹綿三百屯一云々

など見にたり、考ふるに二十二年は竣工の年にして廿一年より着工したるものならん。東北の一二月は未だ寒し、而して田村麻呂の辞見は三月あり、當時の築城はもとより簡單のものなりしならんも、積雪皚々たる間に僅々一二ヶ月の短時日を以て、數千の浮囚を配すべき城を築き終るといふは疑ふべき事なり。

斯くして蝦夷平定の重鎮たりし志和城は、惜むべし幾もなくして他に移遷せらるゝの止むを得ざるに至れり。

『日本後記廿一』（弘仁二年閏十二月十日）

辛丑　征夷將軍從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言今官軍一舉寢賊無遺事須悉廢鎮兵永安百姓而城柵等所納畧伏軍粮其數不少迄二于遷納不レ可レ廢レ衛伏望置二一千人一充二守衛一其志和城近二河濱一屢々被二水害一須下去二其處一遷中立便地上伏望置二一千人一暫充二守衛一遷其城訖則留二千人一永爲二鎮戍一自餘悉從二解却一又兵士之設爲レ脩二非常一既無二遺寇一何置二

兵士但邊國之守不可卒停伏望置二千人其餘却又自寶龜五年至于當年惣三十八歳邊竅屢々動警□無絶丁壯老弱或疲於征戍或倦於轉運百姓窮弊未得休息伏望給復四年殊休疲幣其鎮兵以次差點轉輪復免者並許之

河濱といふは北上川の事にして、城はこれに接して築かれたるをもて水害を蒙りしならん。而して「並許之」とあれば志和（後紀。波とかけり）城を他に遷すことを此時に許されたるあり、これより以後史に志和城見にざるは、即他に遷したるが爲なるなり、延暦築城の年よりこゝに至る僅に九年なり。

志和城の移遷したるは事實なれども何の地に移りしやは史に明載なし、然れども畧想像し得らるゝは德丹城あり、近來史家多くこの城を以て然りとなすものゝ如し。

『日本後紀廿四』（弘仁五年十一月十七日）

己丑　陸奥國言膽澤德丹二城遠去國府孤居塞表城下及

津輕狄浮野心難測至於非常不可不備伏望豫備糒盜收置兩城者許之

これ德丹城の史に見えたるはしめなり

『類聚三代格』

太政官符

（一分番令守城塞事　略之）

一停止鎮兵事

合壹仟人　膽澤城　五百人
　　德丹城　五百人

右得管諸郡司解偁百姓苦役無過鎮兵當戍之年妻子共赴絶隣在遠無所乞貸身迫公役不遑耕作盡賣衣物僅資妻子歸鄉之日裸身露頂道程僻遠復無路粮望其舊居應无所處

因レ斯規レ留二奥地一長絶二歸情一山川迂遠無二由一檢括一奥地禾死熟郡先竭職此之由若停二鎮兵一加二兵士一民無二弊害一兵得二强練一者臣等議量良有二道理一何者番上之役兵士六十日調庸半輸以レ旬相替無レ妨二家業一健士九十日各食二公粮一夫婦免レ租課役全免兼領二考例一一日爲レ番無二長戍之憂一此民之安安也今見定課丁三万三千二百九十人勳七等以下五千六十四人就レ中簡二黠丁壯家業稍可者命二馬兵俱備一□□□兵士勤二彼鎮兵一論二其强弱一猶二婦女與二丈夫一此兵之强也前番後更往來相代之間兵常一倍隊伍既定戎具復脩縱有二機急一應レ聲可致此兵之威也今停二鎮兵一徵兵士一相折用度一年中所レ剩四千一百余束此用之足也安レ民用强レ兵威レ敵臣等管見不二敢不レ奏一」

兵士四百人

膽澤城七百人　健士三百人

玉造塞三百人　兵士百人

健士二百人

多賀城五百人　並兵士

右城塞等四道集衢制レ敵唯領儻允二臣等所一議伏望如件分配以前奉レ勅陸奥國司奏狀如レ前具任レ所レ請逾勤二兵權一不レ可二簡略一

弘仁六年八月二十三日

弘仁五年德丹城史に顯れ「遠去國府」といへり、必ず膽澤の奥志和方面を指せるを思ふべきなり、志和城の僊築を許されたるは弘仁二年にあれば、三年を經て德丹城見にたり。而して弘仁六年の太政官符に、志和城見にずして德丹城あり、これらを以て德

丹城は志和城を移したるものならんと推し量らるゝあり。

德丹城の跡は今詳ならずと雖も、大槻文彦は曰く、氣仙郡唐丹（どーに）若しくは紫波郡德田ならんと。萩野由之曰く、紫波郡德田村ならん云々。

志和城を移すことはたゞ水害を避くるために、決して夷鎭定上の不便に出でたるとのにあらず、されば決して氣仙郡などの遠地に移すべき理なし、思ふに德田村といふ說たしかならん。

紫波郡德田村大字德田のうつに舘と稱する所あり（畑にして其形跡存せされども）て、其近傍に木の輪といふ地名もあり、又蝦夷森（えぞもり）とて夷を葬りたりと傳ふる塚も二ツ程あり、且つゝの邊時々勾玉管玉古刀劍等の古器を掘ることあり、これらを考へ合すれば若し此あたりなりしにやと思はる。舘といふは即城跡にして木輪（きのわ）といふは城の郭（わ）の古名を存せしものか、然れども何の據るべき記錄口碑なければ深く究むる便なし、猶々研むべきことなり。

城　墟

紫波郡古舘村字二日町新田の東南端にあり、國道より東に一の高丘をなしあるもの

是なり。高さ凡そ二十餘間面積約二十町、南に走る北上川は其東畔を洗へり、一條の細路を境して西南部に小陵を分てり、これに登れば日詰町眼下にあり、此所を外城（とま）たは吉兵衞舘といふ（其由後に云へり）。雜木繁りて鬱然たり、本城跡はこれに數倍の地よして、不規則なれど略長方形をなし、段階幾階なるを知らず、頂に上れば數里の四方は一目に集る、東部には杉林あり萱生地あり南西北の多くは畑となれり、されども一見古城跡たるの面影を失はず。

此地即志和の城の趾を殘すものなり、延曆を去る殆ど一千百年の今日、詳らに城跡を証明するに由なしと雖も、古來の傳說奪ふべからざるものあれば、此地なること疑ふべくもあらず。而して此丘陵は古の城（き）の或る部分を殘せるものなるべし、數千の浮囚を配したる鎭所なれば、其區域の廣かりし事思ふべし、弘仁移築の時も水害を避くると見えたれば、必ず其範圍現今より擴かりしを知るべし。又北上川の河道にも變化ありし事なるべしと思はる、現在の川筋なれば僅に城の東端を浸すのみなれば、大な

る害をも與ふまじければあり。口碑河道の變遷を傳ふるものによれば、古へは遙かに西に上りて流れたりといふ、今は田地となりたれども、往々沙石の堀出さるゝは川代のあとなり云々、これらも參考すべき說なり、然れば則北上川は城の西北より東南に廻りて流れたるものなるべきか、斯くして初めて水害云々の事も想像し得べきなり。

又近傍に木の宮神社といふあり、其草創傳はらざれども田村麻呂の觀したるありあど云ふは由ありて聞ゆ。國々の國府には總社といふものありて鎭守となせりと云へば、城にも亦神を祭りて『キ』の宮と稱へたるものにやあらん。

嗚呼一千年の偉跡空しく黜して古を語らず、幾多の變遷に伴へる歷史は濛々として霞を隔てゝ山を望むが如し、而して危くも繫ぎ留めたる一縷の口碑によりて、今日微かに古へを窺ふを得るのみ。この唯一の口碑をよく傳へ得たるは一の原因ありて存す、何ぞや、曰く大刹高水寺の城傍にありしものこれなり、高水寺は實に東奧の名刹なり、されども惜むらくは史乘これを傳ふるもの少なく、其由來を詳にせず。

『吾妻鏡』（文治五年九月）

九日　丙寅今日二品猶逗留蜂社而其近邊有レ寺曰二高水寺一是爲二稱德天皇勅願一諸園被レ安二置一丈觀自在菩薩一隨一也彼寺住侶禪修坊以下十六人二參訴于此旅舍一云々

參訴の赴は、暴兵高水寺金堂に入りて壁板をはぎ取る故に停止せられたしとなり、賴朝梶原景時をして其兵を捕へしめ、嚴罰を加へたりと後に見えたり。

稱德天皇勅願云々の事國史に見えず、然るに『吾妻鏡』獨りこれを記せり。其據る所を知らずと雖も文治當時に於ては寺の記錄其他の存するありて、斯く載せたるものなるべし、されば此寺の建立は遠く志和築城の以前にありしものなり。

『吾妻鏡』（同上）

十一日　戊辰(中略)高水寺鎭守者奉レ觀二請走湯權現一其傍又有二小社一號二大道組一是淸衡觀請也此社後有二大槻木一二品莅二彼

樹下ニ稱奉走湯權現令射立上箸鏑給云々

走湯神社とて今城墟の麓にあるは即是れなり、社前に大槻木半は朽ちたれど現存せり(或は後に植えたるならんなどの説あれど)左に此寺に就ての古傳にして、南部諸舊記に見えたるものを纏めて出せり。

高水寺は走湯山といふ。山上に清水あり故に名づく、眞言宗なり。古へは四十余坊あり、大同三年田村麻呂一宇の堂並鐘樓、鰐口以下諸佛器を寄進す、康平中源頼群堂塔、護摩殿等の金堂を建立し、且つ十六坊を修造す云々。

古時今の栗木田にありしが、後日詰館の麓片山に移る、天正の役兵燹にかゝり慶長更に今の高水寺(高水寺は寺ありしより出でし地名也)に移り、寛永の頃また岩手郡三ッ割村に移り、明治四年復飾して廢寺とある(南部舊記、南部秘事記、鳶爲家訓、縣史料)多くの變遷に伴ふに災異を以てし、名刹遂に何の傳ふものなきに至れるは惜むべき至なり。

今こそ廢寺となりたれ、過去の一千年に崇嚴なる山門を構へて赫然たりしもの、眞にこれ生ける歴史ありしに非ずや。志和城なるものは實にこの大刹建立後五十年にして築かれたり、後僅に九年にして他に移され、城墟消然として春風秋雨徒らに狐狸の聲を藏しさ。

志和城既に廢れたり、而も高水寺は四十余坊の光を併て益々隆盛ありしなり、この隆盛なる寺ありしによりて、其傍ある志和趾は永久に記憶されしものなり。大同二年田村麻呂の寄進云々の事は、以てこの寺とこの城との關係を知るに足るものにして、彼の時代に於ける四百年間荒蕪に委して尚其名を失はざりしものは、實に高水寺が語り傳へたるものなることを記せずんばあるべからず。宜なり、後再び城を構ふるものあるに及んで、『高水寺城』なる名稱を與へたるは。高水寺は即志和城跡を証明する活記録なり、若し今日に現存せしめば必ず大なる証據を貯へありしこと疑ひなし、さるを兵燹空しく烏有に歸せしめたるは千秋の憾みなり。

蝦夷鎮定の要所としての志和城は、十年を出でゞして遷移せられたれども、金髯將軍の烱眼克く據りて以て一方の巨鎮たるべき地と睨みたるの要區、遂に空しく草野に葬らしめ終るべくもあらず、荒癈殆四百年にして藤原氏再び館を構ふるに至れり。爾來或は斯波氏の館となり、或は南部氏の城となり、七百年の星霜を經來れり、この間の變化によりて得たるこの城の名稱はまた同一ならず。今暫くこれらに就て略記せん。

(一) 志和の城、田村麻呂築城當時の命名なり、志和の地に築きしを以て而か名づけしならん。この頃未だ志波郡なる郡は見えざれど「諸說あれども」、この邊皆志和といひし地なるべし、『日本逸史』延曆八年に子波の地名見に『續紀』寶字八年に志和村賊と見えたるは、この地方一般を指したるものならん、今の志和村などは其一部たりしならん。

(二) 樋爪館、又比爪とも書けり此地の名なり、今は日詰と書けり、藤原秀衡の族俊衡秀衡の居を構へたる時の名稱と見えたり。後衡は比爪太郎と云ひ、秀衡は同

五郎と見へたるは亦この地名に取れるなり。

(三) 斯波館、斯波氏居住の時に見へたるものと覺し、この地名の志和に出でしにあふて、斯波氏の姓を名づけたるものなるべし。安倍貞任の居館を安倍館と云ひし類なり。

(四) 高水寺城、これも斯波氏時代に多く見へたり、高水寺とて古刹の傍にありしよりこの名を得たるなるべし。この寺の事は前に出せり。

(五) 郡山城、郡山も亦こゝの地名なり、此所より半里ばかり北に、北郡山と云ふ所あり、此地名は各國に數々見ゆる樣なれば、何事か由あるものにやと思はる。識者の教を俟つや切なり。郡山城といふは、南部氏の居城となりて後多く呼ばれたり。

(六) 城山、丘陵をなしたる城趾なる故、城ありし山といふ意に出でたるものなり、現今人の等しく呼ぶ名にして、志和城一千年の最後に得たる代名詞なり。

變遷第壹

康平時代

城の遷移より以來、荒廢に委し來りたる遺跡は如何なる狀態にありしやは、遠く考ふるに由なし、康平の時に於けるも、依然草野をなしたるものゝ如く、史に何等の傳ふるものなし。

安倍頼時六郡を横領するや子弟を分ちて諸柵を守らしむ。柵は大概相距る數里あり、有名なる厨川柵は岩手郡にあり、されば紫波郡また一の柵なき能はざるが如し。

『陸奥話記』

武則拜謝即襲二正任居所斯和郡黑澤尻柵一拔レ之所二射殺一賊徒三十二人被レ疵逃者不レ知二其員一亦鶴脛比與烏二柵同破レ之同十四日向二厨川柵一十五日西刻到着圍二厨川嫗戸柵一

斯和郡は和賀郡の誤なるは論なけれど、鶴脛、比與島（大日本史比與登利とあり）の二柵は所在詳ならず、其稗貫郡なりんといふものあれども、机上の臆斷のみ。思ふに紫波郡の地必ず一城を存したるならん、若し柵の築かれありしとすれば、地勢よりする要害よりするも、志和城趾を推さざるべからず。

今其証すべき一二の事項を摘記すれば、

一、城の西八九町の所に、陣ヶ岡といふ森あり、是れ源頼義以下の陣所なり。

二、城の下に當りて、今勝源院と城ふ寺の庭園に存ずる大柏樹は、義家の手植と稱す。

三、南十余町の所に善知島坂（うとうざか）と稱する所あり、これ安倍の臣知善島文治安方が居宅の稱なり。

四、高水寺の護摩殿金堂は頼義の建立寄附なり。

以上によりて、略々此地に於ける安倍對源家の消息を知るを得べしと雖も、確據と

して以て志和城跡に柵を搆へたりとは爲しかたし、『日本野史』『今昔物語』以下何れも紫波に付ての記なし、然るに此の說をなすは奇に失するが如しと雖も、決して一笑拆に捨つべきものに非ず、後來充分の研究を試むべき事と信ず、

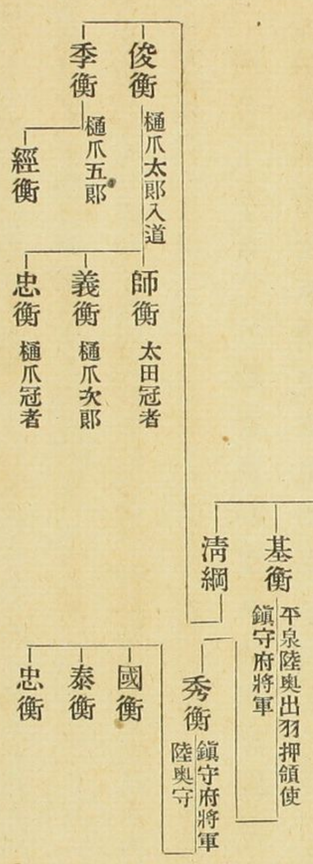
變遷第貳

比爪氏時代（比爪館又樋爪館）

荒涼多年にして再び築館を見るに至りしは、平泉の藤原が屬比爪氏の居を占めたる時にあり。

後三年の役、藤原清衡源義家に屬して功あり、乱平ぎて後、伊澤、和賀、江刺、稗枝、志和、岩手六郡の地を領し陸奥押領使となる、國人稱して御館といふ。初め江刺郡豐田に居り嘉保中平泉に移る、子に清綱あり、これ俊衡の父あり、俊衡は即志和に住したるものにして、地名を稱して比爪氏といふ（大日本史平泉志）

累系（平泉志）



數千の浮浪を配して天下の大鎭たりし偉趾は、久しく世に知られざりしが、此に至りて比爪館なる名稱のもとに再び一方に重きをなせり。然るに比爪氏の此地に住した る年代は未だ明白ならず、口碑多く傳へて安元中なりといふ。（篤焉家訓縣史料）

文治三年平泉にては清衡の孫秀衡卒し子泰衡繼ぐ、これよりさき源義經兄源頼朝に忌まれ、奥州に逃れて秀衡に據りてありしが、此に至り頼朝屢々院宣を請ひ泰衡をして家に義經を圖らしむ。泰衡恐懼し文治五年遂に義經を衣川に斬りて首を鎌倉に送る、既にして頼朝速に義經を殺さゞりしを辞とし、此年秋兵を三道に分ちて泰衡を討つ、泰衡連敗して贄にの柵に走る(大日本平泉志)。

文治五年九月四日、頼朝志波郡に着す、時に俊衡等比爪館にあり(吾妻鏡)

『吾妻鏡』

四日　辛酉　著御志波郡而泰衡親昵俊衡法師驚此事焼失當郡内比爪館逐電赴奥方云々

『同書九月十八日、都に奉るといふ消息』

比爪俊衡法師、同五郎秀衡等焼比爪館逃籠奥方を郎追繼げて、厨河と申館まで到着の間、俊衡法師並季衡等爲降人出來り候。注折紙謹進上之其中俊衡法師者年齒高

候之上令受持法華經充給本住所令安堵也其外輩皆召具して鎌倉へ可上道候云々。斯の如くして比爪館は焼棄せられたり、安元より此年に至る十四年に過ぎず。

たま〳〵築館を見たる志和城趾は、此に至りて再び人に忘られんとせり、然れども比爪俊衡は高齡なる上入道したるものなれば、充二給本住所一令二安堵一候也云々と云へば、此地に止まりて此地を領したるは明白なり。されば一度火したりと雖も、必ず此館を修めて餘命を送りたるものあり、詮衡は厨河柵に於て降りたりと雖も、岩手郡は此役の功により工藤行光に給したるものなれば、厨河柵に工藤氏居住したる事諸記に見えたり、即俊衡は比爪館をおきて他に居を求むる能はざる也。

比爪館なるものは文治の役既に焼滅したるもの〻如しと雖も決して然らず、役後永く館名を繼續したるものなること明なり、今城趾を距る南十四五町の所に、口碑傳へて五郎季衡の墓と稱するものあり、碑石雨露にさらされて文字讀むべくもあらず、傍に小沼あり五郎沼といふ、これ五郎季衡の墓あるに因めり(舊蹟遺聞)。

初め俊衡厨河柵に於て子弟を率ひて降るや、頼朝俊衡を許し余の子弟は皆鎌倉に上道せしめたり、然るに凱陣の歸途五郎季衡を以て宇都宮明神の社掌となせり、これ先きに立願したるによるなり。今吾妻鏡を引て前後を照合せん。

『吾妻鏡』

二十五日(七月)癸未、二品著御下野國古多橋驛先御奉幣宇津宮有御立願今度無爲令征伐者生虜一人可奉干神職云々則令奉御上箭給云々

十九日(十月)乙己、二品於下野國令奉幣宇都宮社壇給盖是非巡道御參詣偏爲御報賽也則奉寄一庄園剩以樋爪太郎俊衡法師之一族爲當社職掌云々

吾妻鏡は單に樋爪太郎俊衡と云へり、即五郎季衡を指すものなり。

『群書類從 神祇部 宇都宮大明神代々奇瑞記』

後鳥羽院文治五年征夷大將軍家賴朝爲藤原泰衡誅罰又於當社有祈精仍感應繁多三箇日中凶徒誅戮畢爲報賽以生虜樋爪五郎季衡被掛生贄並御劍以下神寶等奉納御殿

加之那須庄内五ヶ郷肥前之同知行被充置生贄狩料所其外以森田向田兩郷被定置日御供御御料所云々

と見にて明なり。季衡は宇津宮に止まりたるものなるに、紫波の地また其墓を存するは審しさが如し。

『舊蹟遺聞』

考ふるに季衡は鎌倉へ上りたるよし見ゆれど、兄の俊衡はゆるされてもとの住所にあらしむるよし見ゆれば、季衡も後にこゝゑ下りてみまかりしなるべし、されば今も墓のこりてはあるなり。

鎌倉へ上りたりと云ふは、たゞ九月十八日の上書(吾妻鏡)によりたるものなるべし、宇津宮の事は漏らしたるものなり。されど此說の如く兄のもとを手便りて晚年此地に終りたるならんか、此外の子弟は如何になりしか詳ならずと雖も、或は此地に下りて父の後を享けたるものなかりしか。

五郎季衡の墓はすでにあり、然れども俊衡法師の墓を記するものなきは如何に、今五郎の墓と稱する碑石より廿間ばかり西に距れて古き碑三ツばかりあり。何れも梵字の大なるものを刻したる跡あり、中には經文の句とも思はるゝ細字數行を印するものあり、此等も亦考ふべき料なるべし。

以上擧げ來れる事共を考ふれば五郎季衡も晩齡を此館に委ねたり、されは比爪館なるものは、文治後久しく其形を保ちありしを知るべし、然れども其何れの年代まで至りしやは今証するに難し。

變遷第三

斯波氏時代（斯波館、高水寺城）

比爪氏居館としての比爪館は、如何なる狀態に終りしやは今知るべからぜ、而して其館趾を修めたる繼續者を斯波氏となす。

斯波氏の斯波館を比爪館跡に築きたるは、何の時にありしや詳ならされども、紫波郡と斯波氏及斯波館の關係に就ては頗る復雜なるものあり、今順次此等に就て記すに先だち、斯波氏家系を出す。

皇七世源義家朝臣三男
義國——義康——義兼——義氏——泰氏

- 家氏　足利尾張守從五位下　母平朝時女　住下總香取郡大崎　又住陸奥斯波郡高水寺（水岡雜志）
  - 宗家——家貞
  - 高經　稱斯波、小字千鶴麻呂、稱尾張孫三郎、歷右馬頭、叙從四位下、修理大夫兼尾張守
    - 家長　斯波三郎、住高水寺（水雄岡志）稱孫次郎（作太平記次三）叙從五位下爲陸奥守延元二年邀擊中納言、源顯家于鎌倉杉本不克而死
  - 家兼——直持——詮持　（水雄岡志　武家評林　大日本史參取）

足利尾張守家氏が次男左近將監宗家、下總の大崎莊と奥州の斯波の莊とを相續し、斯波氏とも大崎氏とも稱せり（伊達行朝動王事歷）、此時に於て既に斯波館の存在を認め得（水雄岡志）

べし。

然るに南部舊記の斯波郡に於ける斯波氏を說くもの、頗る皮相の見を以て奇怪の說をなせり。粉々たる俗傳は先づ徐くも、其說多く二ッに歸せり。

(一)、抑々志和の家は陸奥守家長、初めて此所に下り給ひて、當御所(沒落の主)民部大輔まで七代なり云々 (南部根之記、東奥軍記、奥南盛風記、南部世譜一本)

(二)、茲に志和十六鄕の領主斯波孫三郎といふものあり、清和天皇四十六代の後胤、足利左京大夫直持奥州探題とあり、其子左京大夫詮持此子孫志和に居すといへり (南部家傳舊正錄、同舊話集、二日町新田村志)。

以上の二說に付ては頗る研究を要すべきものなり、岩手縣令島氏先年管内の舊蹟を調査して甚だ明細なるものあり、稱して『縣史料』といふ。今志和城の條中に藏めたる斯波氏系の一節を拔記すれば、

『縣史料』

延之中斯波伊豫守家兼(管領斯波伊豫守高經、奥州探題となり大崎に居る、其孫陸奥守詮入道朝之弟)持に至り本郡を與へ當城を修して之を置く、

年月干支詳ならぜ、舊記多く陸奥守家長となす、日本地理提要も亦以て然りとあす。重編應仁記に因るに家長は家兼の兄高經の嫡男にして、建武四年鎌倉に於て討死し二男左京大夫民經は病んで死し、三男左衞門佐氏賴は遁世し、四男治郎太輔義將家を繼いで管領となる。本朝武家評林に載する所も然り、故に家長を以て當城主の祖とするは蓋し附會の說ならん、故に今南部家傳舊正錄の說に隨ふ云々(細註原文)。

と見えて第二說を執れり、其故とする所は單に家長は鎌倉に於て討死し、其弟等も皆陸奥に入らざりしとの一事に據りたるが如し。然れども此說或は正確を失はざるやを疑ふ、今暫く第一說を取りて考証を試み、以て識者の高敎を仰がんとす。

建武二年足利尊氏叛意を懷くや先づ東國を收めんとす、部將を窃に遣すものあり、

家長は其一人なりしなり。

『南方紀傳』

建武二年十月、足利尊氏其族斯波三郎家長を、陸奥守と稱せしめて奥州に下せり云々。

高氏の家長を下すや必ず兵を得るにあり、又其人を選ぶに當りても、奥州に領邑あり威望あるものを以てせしなり、家長は即家氏より四代高經の嫡男にして正系を引けり、父祖以來の領邑に據りて以て大に成すあるを知りし也。此年十二月尊氏遂に叛す、家長卽相馬氏と高野行方二郡に戰つて遂に之を降せり、此先後家長は遠く斯波館にありしなり。

『奥相志』

建武二年足利尊氏卿以二陸奥守家長一爲二奥州管領一居二斯波館一云々。

『奥相志』は家長の爲めに賊軍に入りし、相馬氏の後裔、相馬家の藏板にかゝるものなり。家長が斯波館に居りたりといふもの、必ず據る所の文書ありしあるべし。

延元二年尊氏京師を犯す、陸奥守源顯家征東將軍義良親王を奉じて陸奥を發す、家長之を聞き兵を率ひて追ひ上り、杉本觀音寺城に邀擊す勝たずして遂に斬らる。建武の東下より此に至る僅に三年に足らず、其斯波館に居る坐も且溫あらざるが如し。然りと雖も祖宗以來の領莊なる斯波の地なれば、家長の東下必ずしも此一時となすべからず、或は以前にありて此所に在りしやも知るべからず、且つ源顯家を追ふて上るに當つてや、決して斯波館を空虛とあして去りしにあらざるべきは論なし。然らば其留守將たるもの必ず家長の族ならざるべからず。

試みに第二説に付て研むれば、家長の父高經の弟伊豫守家兼の孫詮持の末なりといふにあり、家兼は奥州探題となり、加美、志田、遠田、玉造、栗原五郡（大崎五郎といふ）を領し大崎氏と稱せしが、延文元年六月十三日四十九歳を以て大崎に沒せり。

詮持は此人の孫に當るを以て其斯波に來るとすれば、必ず延文以後ならざるべからざるが如し(延文は二年にして改元)、『縣史料』は延文中となすも、固より口碑によりたるものなれば正しからざるべし、假りに延元中詮持東下せりとなさば延文以前の紫波郡乃至斯波舘は如何なりしか、詮持を以て斯波舘主の祖となさば、これより先きは斯波舘の築在せざりしとなすか、將た紫波郡は他の領に屬せりしか、否決して然らぞ、紫波郡は足利氏の配にして、賊軍の巣窟を以て世に知られたり。何ぞ斯波舘の無きを說くを得んや、今延文以前に於ける紫波郡の狀態を示すに、『白河文書』を引かん。

『白河文書』(興國二年)

其後依無殊子細久不被仰候南部以下奥方官軍已令對斯波岩手兩郡責上候之間河村一族等其外諸方參御方候稗貫出羽權守一族等宗者共數輩討取了於御方者無殊子細候就具葛西以下和賀濱石輩等成一手欲對治府中候仍當所御勢等悉今明間可被出候其方事相構急速可被取立候時合力可爲要樞候(中略)　恐々謹言

四月二十日　　清顯奉判

結城修理權太夫殿

此外『白河文書』中多く斯波郡賊の事見ゆ、南朝宮方の征討數々あり(白河文書南方記傳)。稗貫出羽權守は岩手郡厨川柵にありしものにして、賊魁たりしものあるが、斯波郡に於ての首領は名を出さず、然れども斯波郡は建武の時、すでに斯波氏の居舘あり、爾來斯波氏は據りて以て勢を逞ふしたるものなり、稗貫一族は已に討ち取られたりと雖も、斯波賊は決して跡を斷たざりしは、斯波氏固く斯波舘を守りたるによらずんばあらず。

『中舘家系』

政長六郎後號遠江守實師行弟(中略)興國六年(中畧)十二月廿日報政長告書曰津輕安藤一族歸降國府之事是下之功

也到明春則和賀滴石之軍士爲一手當レ攻二斯波一然則可レ馳三向
於二和賀稗貫一此等之事達二葛西一一族一而可也河村六郎降參之
事猶能勸誘而可也云々、

斯波賊の勢斯の如し、當時奥の宮方には南部下山河村滴石の輩ありて皆豪族を以て稱せり、然れども岩手斯波の賊は常に此等を遮りて、中央との連略を斷ちたりしなり。

延文以前の斯波郡は以上の如き歴史を作れり、此間の斯波館同館主に就ては斷じて家長の族なりと言はんと欲するものなり、詮持の如きは未だ此地を見るだも能はざりし也。詮持は直持の子なり、直持初め奥州探題となり久しく大崎に在りしが、應永七年宇津宮氏廣乱を作しふかば討つて之を平ぐ、足利滿兼功を賞して氏廣の領邑二本松の地を與へたり、直持職を辭するや子詮持つぎて探題職となり大崎に居る、史に傳ふる所多く斯の如し、未だ斯波に住したるを聞かず。

思ふに、南部封内に散見する斯波氏に就ての記錄と梅するものは、皆天正以後に成

りたるものにして、斯波氏沒落後、單に粗雜なる口碑に依て記されたるものに過ぎず、其間誤謬多きに居るは論なし。斯波家系に付て猶二三の說をなせるものあるを見ても知るべきなり、延文中奥に入りし斯波の族は最上家を惜いて他になし、最上は詮持の父直持の弟にして兼頼といふ、延文元年八月六日最上郡に下向せり(藩翰譜)、斯波の誤も或は此等に基因せざるか。

左に出せるは『日本讀史地圖』の南北朝時代の一片なり(河田羆、吉田東伍、高橋健自共著)、亦斯波家長の斯波館の祖たるを証するに足る。(地圖は略す)

家長以後の系圖は詳らかに知るを得ざれど、僅に探り得たる所は左の如し。

家長 斯波陸奥守 從五位下 ―― 詮經 兵部少輔 ―― 詮將 (無名氏著外史寫本)

是に因て、即『讀史地圖』に載せたる斯波詮經は、家長の子なるを確むるを得べし。

以上擧げ來る所に因て、斯波家長の斯波館主祖なる事を斷言せんとす。

家系につきては暫く此に止め、以下斯波氏の最後に就いて記さんとす。

斯波氏沒落は天正十六年なり、而して家長より此に至る世代事歴に就ては、何等の據るべきものあらざるが如し。南部諸舊記多く七代を稱せり、或は中頃斯波氏繼嗣なく、越前倉谷の同族より入りて相續したるものあり、以來七代なりとも見えたり、

『讀史地圖』群割據圖によれば、

應仁、文明間	斯波詮重		高水寺
永正、大永間	仝 詮好		
天文、弘治間	仝 詮基		
永錄七年より	仝 詮森		
天正十年まで			

右の如しと雖も、明に何世何代とは知るに由なし、天正十六年滅亡當時の館主を、南部記錄は斯波孫三郎詮基(民部大輔)といへり、志和稻荷神社(志和村にあり)棟札には、天正十六年五月廿八日大旦那斯波孫三郎源詮直とあり。

斯波氏固より源流にして名門に出づ、斯波館に居るや民衆敬して御所と稱す、民部大輔孫三郎に至りて、漸く風流に染み奢侈を好む、嘗て近臣を率ひ郊外に遊び北上河畔に逍遙せしが水中朱色をなせる巨石あり、將これに激すれば紫色をなして散ずるを見て詠じて曰く、

今日よりは紫波と名づけんこの川の石に
うつ波紫に似て。

これより斯波郡を紫波郡と改めたりと傳ふ、斯くの如くして日に遊逸を事としたり。時は恰も天正なり、弱肉强食の暗世界たりしなり。南部信直三戸に在りて窃に斯波をうかゞひしが、期熟せりとなし重臣九戸左近將監政實の弟、九戸彌五郎をして動靜を探らしむ、彌五郎單身斯波領に入り、言を巧にして孫三郎に近き、遂に其妹婿となり外城に居る(今吉兵衛館とて城跡の南側にあり)、後高田に移り高田吉兵衛と稱せり

（德田村高田にあり高傳寺境内は其舘趾なり）、孫三郎獅子身中の虫あるを知らず、益々矯激にして恩威並び行はれぎ、賞罰事に適せず怨聲門に滿つ。或時御所孫三郎比爪橋（所在不詳）造立を吉兵衛に命ぜしかば、吉兵衛自ら出でゝ工事を督したり、一日御所の臣源藏なるもの此所を過ぎて馬を下らぎ、吉兵衛の臣才太郎あるもの其無禮を怒り、追て之を責めしかど暴言を吐きて謝せざりしかば、遂に太刀打となり源藏もろくも斬られたり、御所之を怒り才太郎の首を渡すべしと吉兵衛に迫りしが、無禮者を成敗したるは當然の事ありと云ひて屈せぎ、御所是より大に吉兵衛を忌みしかば吉兵衛決する所あり、窃かに斯波重臣を誘ふに利を以てし南部に事ふべきを勸め自ら先づ去つて南部に歸りたり。南部信直大に悅び中野舘に居らしむ（盛岡八幡宮の南松尾社地其跡也）、これより中野修理といふ。切りに斯波討滅の策を講じつゝありしが、斯波の臣等も御所の亡狀を怒り居るもの、修理の甘言に乘りて來り歸するもの日に多く、斯波の四杖と稱せられたる中の、築田、大萱生の輩まで來り投ぜり。

天正十六年信直三戸を發して斯波御所を攻む、御所狼狽爲す所を知らず連敗して敵軍陣々岡に至る時、恰も領内長岡江柄栃内の所々に一撥起りしかば、さなきだに威望を失墜したる斯波御所なれば、兵を徵すれども應ずるものあく、終に支ふる能はずして城を棄てゝ奔り、稻荷成就院（今の志和稻荷）に潛みたり。

斯波の臣は多く南部に歸し高錄を食みたるものあれど、志あるものは皆奮戰して死せり、斯波氏遂に亡びたり。斯波舘此に至りて南部氏に奪はれたり。舘や心なきか、汝が歷史に於て、最も久しく汝を愛したるものは斯波氏なりき。今や汝は既に再び斯波氏を見るの時あきに至れり、然れども汝の舊主人は常に汝を慕ふて止まざるべし。

優柔墮怠にして身を亡せりと雖も、御所と稱へられたる華冑の裔、斯波民部大輔孫三郎なるもの一敗地に塗れて豈膽を失はんや、彼は暫く難を成就院に避け、次で山王海に入り、稗貫に逃れて、稗貫某に據り以て期を俟ちしが、天正十八年南部領に九戸政實の乱あり、上下騷動の時に會せしかば、大に悅び斯波の地に來りて、舊屬を集め

んとせしが、事成らずして顯れ、身を以て閉伊に逃れたり、其終る所を知らぜ。（南部領記錄本）。

九戸の乱平ぎて後天正十九年九月、豐臣秀吉斯波郡を南部信直に賜ふ、斯波館此に至りて全く南部氏の手に移れり。

變遷第四

南部氏時代（郡山城）

昨日の斯波館（高水寺城）は今日の郡山城となり、城代の名のもとに南部の臣等嚴然として城中にあり。

『篤焉家訓』

郡山の御城は湊市郎右衛門、工藤權太夫、野々村何某、米内孫右衛門、河野庄次郎、大槻八郎兵衛、清水源左衛門、

右郡山御城預りの由、又一方井刑部、次に野々村云々。

南部氏領土の擴張南に成功してより、居城三戸は勢僻在たるを免れず、信直依て盛岡城を築かんことを欲せしが、子利直に至りて之を遂行し諸臣を率ひて盛岡城に移る、幾もなくして水害あり城を傷く、利直之を避けて郡山城に移りたり、時に寛永三年なり。次代重直公の寛永十二年に至り、盛岡に歸れり、南部氏の居城となりし僅に十ケ年なり。

徳川家康天下に令するに及んで、諸候の國内なる諸城を毀たしむ。

『盛藩年表』

寛永七年丁未六月五日

御下着（重信公江戸より）遊被郡山御城御破却御願に付、星川宗十郎所にて御辨當御遣被遊云々。

此時己に南部公は郡山城に入らざりしなり、城の命旦夕に逼れり。

破却の調査は早く終えられたるが如く見ゆれど、南部封内數十の館、城、短日月に毀破し難かりしなるべければ、郡山城は漸く後れて毀たるゝに至りしならん。

『奥南盛風記』

奥州南部大膳太夫分國之内諸城破却書上之事

（前略）

一、志和郡　片寄　山城　中野修理持分

一、同　比爪　平城、破却、信直抱代官川村中務

一、同　見前　平地　同　日戸内膳

一、同　長岡　平地　南部東膳助持分

一、同　乙部　平地、破却、福士左衛門持分

（後略）

城數四十八ヶ所此内不破城十二ヶ所右之外於諸城有之者此判形之者可被御成敗者也

天正二十年六月十一日

南部主馬助直愛 花押

中野修理直康

南部東膳助直重

南部彦七郎直永

南部左衛門尉信愛

南部帶刀茂實

南部彦次郎直榮

南部左馬助正慶

連水勝左衛門殿

軌源太郎殿

天正下文既に破却書上ありしが、寛文七年に至りて漸く毀ち終えたり。

『盛藩年表』

寛文七丁未年八月廿二日

郡山御城破却奉行松岡八左衛門、松尾吉左衛門

櫻閣疊壁隈なく斧を入れ槌を鳴らして悄然たる土骨を裸出し、城といひ館といひし當年の面影、復見るべくもあらずなり終はんぬ。

嗚呼一年の星霜を劍と冑に馴れたる志和城の大偉跡も、飛鳥盡き良弓收まるの時に會せるか、太平此鼓は市に囂しくも陣太鼓のこの丘上に聞ゆざる永久あるべし。

あやに畏き君が代は、千代に榮にて目出度きを、城跡よ汝！　春に秋に惠みの露霑ひて、幾く久しく其形を遺せ。

（完）

書翰

上

降りみふらぎみの小雨、昨日も今日も一昨日も、郭公の聲とい淋しふぞきこゆる。朝岩手の峯雪を重ね、夕べ後園に霜置くこの頃の氣候順ならざる甚し、床にいたづくもの相踵いで顯はるゝに至れり。君が御邊はいかにや、御變りはあらせられずや。日日心もとなくその方の空のみぞ眺めらるゝ。久しき間何のたよりもせぬくせに口上手の事よと咎め給ふな、頃日の御疎音は實に御申譯なし、毎度ながち御ゆるしあられよ。小子は幸にして風もひかずまめしくあり。山吹は未だちり終らず、牡丹は今さきそめたり、藤は如何あらん知らぎ、つゝじは見頃なるべく、あやめは未だ早し。蛙なき水雞あき郭公なく、青葉の四景眺めよしとやいはむ。

我校の修學旅行隊は何れも歸りたり。金森とやらの君未だ我れは知らぎ、近日尋ねて見んと思ひ居れり。一週ばかり前の天氣よかりし日、我々一年級は校長と今一人の

先生の統導にて、繫といふ溫泉場へ遠足せり、四里の春路草鞋かろかり、坂を昇り川に添ひ畑をめぐり菜の花を分け柳をくゞりて、唱歌のまに〳〵行き通したる流石にうれしかりき。鶯なき桃盛りなる所溫泉に浴して肌を拭ひし當時の心地、春遲き山里のいと詩味あるを感しぬ。夕陽落ちて蝙蝠迷ふ頃歸りたり。此日いとも快かりしは、とある渡場にて幼き舟守の細き竿もて四十余の男の子をほゝゑみつゝ渡したるにてありき。强き子に汝は實に日本男兒ありとは誰も〳〵賞むる言葉なりき、我れ心中窃かに感ぜるものありき、拙き歌數首えたれど、君に見せんとおもはゆくこゝにはかゝぜ。

これも十日ばかりさきの事なり、杜陵館にて神學博士デボレスト氏の演說をきゝたりき。『選ぶべき宗敎』といふ題のもとに縷々數百言、我國の歷史我國の人物、縱橫に解剖していたく現今青年輩の隋落をあけつらひたり。最後に『斯くの如くして日本を將來に維持し行くを得るといふか』とまで言ひたり。我れはいたくも感を起しぬ、惜むべし神州男兒！碧眼の徒をして此言を放たしめしものはそも誰の罪ゝ屬する乎、社

會改良、公德養成、其聲をきく久し、而も何の時にか其成功を見るを得べきか、心細きは今のありさまなる哉。外より促さるゝを俟つべきに非ず、自ら進んで正義を稱へ人倫を踏まざるべからざる事を、深く我は腦裡に刻めり。

今日は我が淨土眞宗の開祖顯信太師親鸞が降誕日に相當せり（七百二十九回とて、北山なる願敎寺にて盛大なる祝賀の會ありき。午後三時少し前より我れは行きて見つ、樂隊あり紅白數流の旗あり、表の飾り先づ相應に出來たりといふべし。特別來賓考の席には何の流れにや生花數多置かれたるは目立つて見ゆ、惜むらくは時間ゆるさずして演說は敎悔師某のみ聞き歸れり。淨土眞宗といへば我が家の宗に同じ、顯信太師は即ち我等が敎主として尊ぶ所、さればにや今日の集ひは殊の外愉快に感じたりき。中途にして歸らざるべからざるの己を得ざりしは實に惜かりき。

今日此の集ひに於て、最も新らしく且神聖に感じたるは、佛敎少年會及婦人會なる組織ありて、其會員ともいふべき四十名あまりの少女（八九歲以上十四五歲以下と見

にし)等が、赤き袴の折目正しく二列ばかりに佛前に整列して、節面白ろく唱歌うたひてこの目出度き日を祝したるにてありき。其聲の清々朗々として迫らぜ流れず、其節曲の壯快にして且艶麗なるかのキリストのサンビカに比して數等の上にあるを覺にき文明に伴へる佛教の進歩とも云ふべきか。此の少女の中に四人ばかり祝辞を朗讀するありき、奉書に小野流のかな美事にかきたるかすかに見にき。二人の名はきこえざりしも二人は佐々木チヨ、岡田チタときこえぬ、臆せずおめず靜かによみ上げたる末頼母しく思はれき。この人々の母達にや聽衆に交れる婦人の一群、何れも笑を漂はしたる見えき、かゝる兒もてる親の而もかゝるさまをまのあたり見んには、如何に喜ばしき限りならんと思はる。余計な事ながら岡田といふ孃は十五ばかりにやあらん、御召縮緬とやらいふ羽織紋所は何なりしや見えざりき、白きリボン先づ氣高く柳腰のびて袴の長きことに愛らし、『太師は五月雨のそらに、月の出でたらんごと』云々と、文章さえ凡ならざりき。わかき少女らの珠數爪ぐる、さてもお婆さん染みたりといふもの

あれど、我れはかゝる風習のいやつぎ〳〵に盛んなれかしと祈るなり。紫の包みに造化論を隠し、ノートブックのはしにな〳〵を書きて見るといふ、姉様達は我れ與する能はず。

さはれ、賞場するかと思へば貶罵す、白粉を美として素顔を稱へぜ、親實なる戀かと思へば破履の如く捨てゝ顧みず、あらゆる冷淡なる男子といふものに遇せらるゝ女子の不幸、我れは常に同情の涙なき能はざるなり。頃は我が女子部の汚名を新聞屋の店にさらすたるものあり、忌はしき淫猥なる事からを並べて。我等は堅く信ず、事實の無根なることを。咄、何等の敗德漢ぞ何の得る所ありてかくも中傷の暴舉に出づるや。可憐なる哉九十の好女子、濁惡の世を救ふべく先づ自ら嚴肅なる制裁のもとに起居す、少なからざる自由を屈して苦學を積み、而も師範といへば一種の囚人的(酷かも知れず)に冷視せられ、あまつさへ寃名を被るに至りては、當人として忍び難き事情には非らざるべき乎。我れは我が姉妹なる人々のかゝる境遇に沈めるを聞き、否見

ては滿腔の同情そゝぎ盡して尙足らざる覺ゆ。

……

來ん廿六五日は櫻山社の例祭なりとか、多少の人出を見るなるべし。友なき我はお祭りなればとて別に面白くも思はず、同級四十餘名ありとはいへ心肝を打解くべきは求めて得るなきを如何せん。さても高く止まりたりと宣ふな、――されど我の如き變な人間の少なき故、我れにのみかく感ずるにや。月淡く蝙蝠低くおいて消燈のラッパながく響く時、毛布に包まれつゝ魂窓外に趨りて君等を思ふ。孤影の我また哀れむべきに非ずや。……（三十四年十一月廿一日）

二

十一日の文庫誌友會。同好の友四五名を連れて會せり、午後三時ばかりに開會の辭きこにき。見渡す坐には三十五六名も居並べるなるべし、新聞記者あり――學校教員あり――本屋の主人も交りぬ――。□□、□□□君等の御話は前きにありて次に君の『文學

に對する社會の要求』と題せる滔々たる演說ありて、次に□□君の『想、美』といふ題の說ありし。此等の說は御面會の折に讓らん。恰も□□兄の演說の終りし時は我々の時間に迫りたりしをもて遺憾ながらそのまゝ辭したり、故にあとの事は知らず、大方雜誌の話などはありしなふんも。

久手山の春と、淺草の君のいたはしき事胸にもつれて、新花守の身の幸か不幸かとなやみ給へる、さあるべき事と一夜同情の袖重かりし。さなりバンの爲めにインキを塗る小兒輩、いかで詩を解するものあらんや。□□子曰く『現今の文學者おるものは、巧みに西鶴流の筆を學んで人を瞞着せんとするものさへあり、社會にたよるべき宗教なく、賴むべき道義なし、さればとて起つて國家を經緯すべき大政治家おし、滔々たる大勢は日に暗に走らんとす。知らず此時に當りて大聲呼んで國民の向ふ所を知らしめ、社界の秩序を正すべき大詩人セキスピヤなきか、即ち社會の要求に應ずべき文學者おきか！』と言ひて、鉄幹輩を罵れり。我は其言に服するものなり、されど悲しむ

らくは當代の詩をいふもの殊に青少年にありて、君の所謂、相美（客觀的に言へば熱識）を心とせるものありや。『万葉』の相聞をかぢりて根岸派の戀を歌ふをほこり、『みだれ髪』をなま讀みして徒らに罪の子、人の子を吐き散らし、自ら得たりとするもの日に多きを如何せん。僞善々々、名を盜むべく野心を逞ふして詩の研究を手段とせるもの、豈憐むべきに非ずや。口は言ふべく備れりといふか、宜なる哉一齋に世の敗れを言ふ、而も畫の如き景を望んで立てる人自ら畫中の人たらざるを保せんや。根底危くしてたゞに深遠を望み高尚を躬はめんとするは日本人の弊なりと聞く、コンモンセンスに暗くして詩を探らんとする危い哉。君の所謂素養の必要こゝにあるあり、君は眞に新花守として田園哲學を究めんとするか、我は實に贊同の意を表せざるを得ず、願くは勉めよ。

我は頃日學課に追とれ殆ど寸暇を得ず、歌に筆借る能とず。然れども我は永久に詩とは斷たざるべし、曾ての一日君と語りしろの娯樂的に試みんとするのみ、憂ひ、な

げき、なやみの捨所、喜び、歡嬉の興として爲さんとす。我は文學者を望む者に非ず詩人を氣取るものにはもとより非ず、唯其詩的趣味を解するを得れば足るのみ。『狹き日本作者の多數を願はずと』我この說に於て鉄幹に服す。よし西歐の學に通ぜざるも萬葉の深義を解せざるも、自が錦心繡腸に湧けるものならば寧ろ白面の狹見が僞せ歌に比して詩としての價値何れぞや。文學史上に名を留むるを得ざるも田園に匿れて自ら安んずる志想の淨潔なる點に至つては、一足を讓らざるもの必ずや現するあるを信ずる也。我中世此詩人紀貫之は、蛙のなく聲も歌なりといへり。シガーをくすぶらす青白き手になれる所謂詩なるものゝ如何に赴味深きやは豫想の外にあるべし、速かに研究に入られよ。我は俗俚の歌謠を調べんとするの時にあたり、君この企てあり願くは幸に高諭を惜み給ふな、あゝ田園？世の人よく田舍を稱するもの畫家あり、詩人あり、金持あり、事業家あり、然れども彼等は一も田舍の眞味を解するものなし。畫くもの

は景を云ひ學ぶものは閑を稱す、何ぞ其皮想なる。殊に可笑しきはたまたま旅して鉛筆を取るもの、自然の流れに水くむ乙女を見て驚嘆措く能はず、形容の辞に窮せるものあることなり。彼等の田舍趣味にうとき多くは斯くの如し、自然の美の集まれる所これを究めて世に紹介する、直に一大功績に非ずや。頃日余の知れる俗謠に曰く、

大島小島の間行く船は、江刺通ひかな
つかしや。（松前追分）

田舍なれども鹿角の里は、西も東も金
の山。（盛岡金山踊）

其流暢にして囚たる調、當世蛙々者流の駄作の比にあらんや。何を以て俗謠といふか、俗なる文字何を意味するものぞ、狂態を猫き矯姿を寫するに淫猥の文字を弄するも、用語のけりかなによりて直に雅といふか、否許すか。我國の古代を伺へば歌とは單に事にふれ情に激して普通の語によりて成れるもの也。然りかくてこそ眞の詩なり、

後世人事の進化と社會の變遷によりて、言語の變動ありて漸く歌語（文語）と普通口語と相別つに至りたりと雖も、ことさらに雅俗と分類する、抑も其意ある所を解するに苦む、卑猥の用語あるによるといふか、和歌あにその弊なきと保せんや、平安下葉の作中如何なるものありと思ふや。人の貴賤によるといふか決して然らず、賤民なほ雅歌を解すればなり。畢竟漢字輸入後の道學者が寢覺めのたは言と論斷せざるべからざるなり。試に思へ、俗謠と稱するものの遙に和歌（雅）を凌駕するものあるに於。

これ我れの小さき胸の考へに過ぎず、願くは高敎を給へ。尙後に細々愚見を呈するの時あるべし。……（卅五年二月十四日）

三

○祖母が逝つたのはあまり突然で（僕は知らんで居つたので）、知らせに遇ふと直ぐ十六日に夜十時歸宅しました。學校では二日丈け許すと云ふのであつたけれども、あまり短時間で困ると云つて種々願つて五日間を許して貰つて、大急ぎで葬儀や法事を

終え、今日廿一日歸校しました。途すがら君を訪ねたがつたけれども時間に都合あつて果さなかつた。舍に歸つて見ると君からの手紙が十九日へ便で届いて居た、直ぐ披いて見た(湯に入るまへに)、嬉しく讀んだ。先づ何からさきに御話したらよかろう。

○イヤ上田君へは會ひませんでした。よく君の所へ行きましたつた。宮崎先生へも行きましたか、何の材料がありましたか知らん、……充分研究して貰いたいのは上田君の安倍事蹟です。彼の史稿の成る日君の長詩を完ふするあらば双璧以て南部の珍とすべきものでせう。叙事詩と云ふものは日本文學史上あまり見ないと云ひますが、近頃機運が此方面に轉じかけたのは以て二千年來の缺を補ふことを得ば幸の事です。君の着想は時と材との宜しきものであろう、充分にやつて欲しいのです。腰圍七尺六郡を風靡せしめたと云ふ貞任は、少くも不世出の偉人物である。彼れの祖先は暫く問はずとして、彼れの度量と抱負とは東北山河に育ちし人種の代表である、八幡公善く射ると雖も金冑紅顔の美將のみ、懸軍長驅九年にして僅かに平ぐ。此征たる一

の源將軍が戰に非ず日本宗廟の全力を至して尚足らざらんとせしもの、又以て貞任等が偉強を証するのである。而も貞任の質直剛放なるは彼れの最期に於て最も愛すべきものがあると思ふ。まづ歴史を讀んで亡滅の跡を尋ぬるに、多くの時に於ける名將は祖先の城を守る能はざる時は、出で降らずんば火を放つて自刄するもの殆ど例をなす。然るに彼れ貞任はろうではない、單身大刀を振つて敵に向へて群鋒に貫かれるまで一歩も退かなかつた。誠に東北的な頑強愛矯ある最後であつたと思ふ。何ふかこの貞任の心事を詩化して貰いたいものです。

○お雛樣これはまた面白いものですが、僕の所では飾りもしないしおまんじゆうとながつたので淋しかつたです。た雛樣と云ふものが實に円滿の象で顯はされて居ると思ふ、近頃の新聞に東京邊では内裡雛樣の代りに、至尊の　御眞影を飾る所があつて今年は大分増加したと見たが。これも善い事ではあるが大裡雛樣もやはり保存したいものだと思ひます。たしか妹背山とか云ふ近松の戯曲に、女中共が大裡樣の睦まし

ろうに並ん居るのを羨しかつたことが、書いてあつたと思ふが（こんな事は余計な事たが）。清少納言が雛祭の調度が美しいと云つて居る（枕草紙二卷の初劣にあり）、僕も好きであります。小さいものは美だと清少は斷言したが、英國の詩人バークと云ふ人も小さきものは美であるといつたそうだ。東西美的着眼の一致したのは面白い事です。然し清少の氣象としては所謂莊美と云ふ最健なる美と認め得たであろうと思はれるけれども、あんまり顯れてないから分りません。帷帳、綾糾の裡に馴れて或は青湖白鞏は觸るゝ機がなかつたであらうか、山の頂、川の端、勇大の美は如何に僕等を喜ばしむるかは、少くも小美を壓するものと思ひますが。

『桃色』の事では常々思つて居るけれども、どうも種々な事に障られて思ふ樣に筆が取れないで困つて居ます。桃村君も何分今始めで實地授業に出てるので、忙しがつて書いてくれません、月末までには何か出しませう。歌は近頃少しもありません、先頃の晩寢室でふと目が覺めた時、丁度星が一つ硝子窓に見出づた。ちつと見詰めて居る

と瞬する樣に星がきらめく、恰も僕が手を胸に當てゝ居たので、心臟の皷動か一つ一つ指に響く。此時自分は思ふた、あゝこの星の瞬きと胸の響が何物かに因つて繫ぎつけられて居るではないか、胸の一度動く時星も丁度一度瞬くのではあるまいか、若しこの時僕の詩か成つたら夫れ必ず星姫の胸より流れたのであらうなと思つたのです。それから此夜の事を歌にしたいと思つて居ますが、未だ出來ません。

○それから何時か雨のシトゝと降る時でした、矢張二階から眺めてこの雨の一筋が天から地までの空間を貫くのに、何か詩味を含んで來るであらうと頻と考へたがこれも駄目でした。この樣な譯で心ゆく樣なものは一つもありません。どうも何も想が新しく捉らへられないので困ります、僕の調と云ふものは（若し云ふべくば）時々異つて、いろんなものが出で來るので固定した格調を持つたものはないのです。修養も練磨もしないからであるでせうか。彼の僕等の詩集にあんなものを出したのは、自分乍ら滿足して居らないけれども、編輯の事や印刷の事やで奔走して忙しがつたので六な

ものはなかつたと申譯する外ありません。今月から僕等の同人數輩で明星社へ入らうと企てゝ居るが何うなるかまだ分りません。この間中學の人から(誰だか分らぬ)何か歌の會をやるから賛成してくれいと申込んで來たそうですが、返事しおいので居りました。何んお事をやるか一度行つて見ようと思つてます、矢張外界からの刺擊もおければ進歩しない樣ですから。

○櫻でも咲いたゝ一日會するのも良いでせう。左樣、櫻が一日二日あたりは咲いたとしても極く初だらうと思はれます、たが招魂社の祭典には是非お出でなさい、昔は夜の祭も見た事はあるではありませんか、僕は何時でも懷出しては可笑しい樣なあどけない感が起る。回想と歴史とは好箇の詩材だと『文庫』で誰かゞ云つたが、そうかも知れません、序に宮崎君を叩くのもよからうと思ふ。宮崎君には近況少しも分りません、二人で見舞つてやりませう、――君も大分浮かれやうと云ふことだから花見位は是非やらねばならんのです。齋藤君をして言はしむれば軍國の花觀とか云ふ所です、

花の香(櫻に香はないが)に浴びて十方暮を慰めねばなりません。君も面白い代名詞を頂戴しましたお、どうも僕も其仲間から洩れない方だ、知らおい人が如何にも氣がつかない者と思ふでせう、僕が何うかして君の言はるゝ樣の所謂意氣で快活になりたいと思つては居るが、何うも引込主義が強くつて困る。陰鬱で憂愁で自分で自分を暗に葬つて居るから、この性質が体格を余程惡くすると思て居ります、何うかしてハキ〳〵した春の蝶の樣な氣になりたいです。これから互に十方暮を矯正して行きませう。

○体、これは始終君等にも心配をかけて濟まないが、自分も出來得る限り注意して居る積ですが、顔色が良くないです。氣分もいけません。三學期の試驗後からです。先頃の体格檢査の時には僕在校中一番成績が良がつたのです、体量も増し肺量も多くて非常に喜んで居つたのですが、良いと思つて少し本でも見ると直ぐ此樣になるのだからいけません。然し大した事ではありませんから御心配せずに下さい、僕はあまり心配し過ぎる、注意し過ぎると同輩に言はれて居る、少し寒ければ直ぐ衣を足し、少

し頭痛がすれば醫師に行くと云ふ樣にやつてるのだから、或は餘計に心勞してるのは事實でせう。こんな風に神經過敏で落付かない樣な事があるので、僕は時々考へて居る、何か一の信念を持ちたいものだと。そうかと云つて基督敎に行つて讃美歌もいやだし、日蓮の太鼓もいやだと云ふ次第。齋藤君が大分佛敎臭くなつたが、眞に宗敎に潛むことが出來たら良い事だろうと思ひます。兎に角体格の問題は僕の重大事件ですから一層注意し、君等の好意に背かないことにします、何うか時々指導して下さい。何か目の前に一の問題が起れば、直ぐ體がと云ふ反問が心中に起るのです。僕は最も卒業後を憂ふて居る、學校生活を終ると同時に多少の安心をする隙を犯されはしまいかと、今から充分警戒して居ります。

○花でも咲いたら何か面白い事もあるかも知れぬ、其時またお話しませう、矢張人間が戀とか愛とか云つて騷く發動時代が樂しみですね、年寄らしく理性で自分を制する樣になつては、勢ひ乾燥にありますか。『地理學小品』は直ぐ上げます、『枕草紙』と

拜借の本は先日差上げた筈です、左樣なら。

（三十七年四月二十一日晩より翌日二十二日正午までに書す）

中

一

思ふて見るとね、可愛想なものぢやありませんか、あなたの御出でなさる御役所とわたしの居る學校とは、直ぎ鼻つき合せて居ましよう。無調法な事だけど、大きなのをポンとやつたら聞にもしようぢやありませんか、ろれに一週間も二週間も、惡くすると一ヶ月も、言葉（たはなし）一ッ出來ないばかりか、お顏を見ることもでないのだもの。世の中といふものはこうすたものかと、わたしいつもつく〳〵思ひますの。そりやね、齊藤さんや上田さんの樣に、山川へだてゞ居る人からあきらめ樣もありましようけど、それにつけてもね、貴君もあんまりぢやありませんか、たまにはお手紙の一本位はく

ださつたて毒にもならないでしようのに、梨のつぶての音沙汰もしてくおさらないのだから、東京や長崎からでさへ、一月に一遍ぐらいは何とか云ッて來ますよ。わたしはね、ほんとにお友達の事を忘れる事はないのですよ、あなたはひどくお人が惡くお成りですね、人の心も知らないで。と言ッた所で、これもわたしの無理ですね、わたしからも一返も御機嫌を伺ッた事もない僻に、勝手な事ばかし云ッて、ろれぢやね、借貸おしの帳消しにしましよう、あなた怒ッちやいやですよ。

大分紅葉もよくなりましたね、そこで例のもみぢがりをやりたいと早くから思つと居たのです。けれど矢張り折のよい事は少ないもので、つい延ばして居たですがね、いよ〳〵小笠原君と相談をして今度の日曜ときめました。いゝへ飯岡の方は見合せて して、天狗森へといふことにしました。そこはね、先導は松岡宏一君です、一行はたゞ四人ですよ。午前九時にね、明治橋の上で待ち合せる筈です、御迷惑でしようけれどあなたはわたしを誘ッて下さいね、はァ、なにわらじまでゞもないでしよう、たしか小笠原君などは下駄でこらるゝでしよう、左樣、にぎりめしは余計にお持ちになッたッて差支はありません。

もしもね御差支でお出でなられぬ事でもおありなら、一寸知らして下さいね、どうにか日取をかへましようから。

どんなに面白い事だらうと、今からほく〳〵して居るのですよ、どうか雨なんぞがふらなければいゝが。

（卅五年十月）

三

悲觀は樂觀に一致すと藤村某が岩頭の墨痕に見る。可憐の好少年、人生の着歸する原理を探るを敢てして、此悟覺を得たりとせば、余は彼の爲めに華嚴瀑下に投せざるべからざるの理由なきを怪む、近は人をして彼を精神病考と斷ずるに至らしめしを憾む。

想へ宮崎一君、吾等は顧みて茲に何年間、等しく人生問題の解決に悶えしかを。幸

にして北上畔裡、空しき屍を瀑さぐるは皆哲學とやらに迷はざりしによるや否や。暫く靜座の暇を得て行路を書策せしむるを得んか。

平滑淡然、猶順風に舵を息ふの感あるは余の社界觀なり、一言にして之を統ぶれば、唯自己を勉めよと云ふべきのみ　行路の難とは過去十數年、腦裡に秘めたる印象あり き。然れども人生てふ廣漠たる輪廓には、限定さきたる險嶇峻崖の存ずるあし、等しく人間が假定したる空想の偶言に過ぎざるに非ぞや。赤道とは地理學上の制線なりと雖も、誰かこれを亞米利加の地盤上に認めしものあらんや、親不知の儉は父子顧みるにいとまなしと傳ふ、これを名づけて儉なりと言ふものは渡るを恐るゝ墮者なり。通力自在の神仙ありとせば、平地視して些の刺擊を與にざるに非ぞや。『不平は弱者の言也』とは要するに此間に胚胎するを視る也。

能ふべき範圍に能ふべき限りを盡して遺しなくんば、何人も甘心して可なり、勉めぞして能はざるを憂ふるは愚痴なり、能はざるを望むは虚榮也。能ふ可き所作は行ふ

に何の苦痛を伴ふべき、社界の弊を嗚らすよりも自ら社界を作らざるべからぞ、此に於てか自己の價を評せざるべからぞ、自己の價を知るものは賢なる哉。人事を盡して天命を待つ、先聖好語を遺せりと云ふべし。

余は明治十五年に生き、今年正に二十二、半生の經歴は皆愁暗たり。家は財を空ふせしは余が七歳の頃、薄命の序幕茲に開かれしを知る。後父を失ひ母を喪ひ叔父を失ふ、近くは姉も逝きて(本月四日死)此所に全く一本杉とあり了はんぬ。生きたる人の二三人死したればとて、統計上より見れば何程の事にも非ざれども、此間に處したる余が神經病の腦に染みたる感苦は、懊腦は、少々に非ざりしが如し。始ど悶絶せんとまで沈鬱に堪え難かりし時も折々なりき。余はたしかに一扁の哀史を筆せんとして、白紙の數片を汚したる事さへありしあり。然れども忘想を卻けて自ら反省し、深く先人の跡を追ふて處生の所以を靜想すれば、余が這般の痛憂は何等の價値なきものあることを覺ゆ。身は不遇あり、而も未だ一飯の飢を見ず、境遇は悲慘なり、而も幸にし

て弟妹多し。歴史を飾る先哲は此の如き境にありしもの、比々皆然り。退いて窃に恥づ、一種の厭世觀を懷きし當年の余が心情を。浮世の無情を說くよりも余の腑甲斐なきに驚かぎんばあらぎ。嗚呼宇宙の經緯は何物ぞ、生物の進化は誤りて人間を生じ、而も日に蠢叫湲喚を敢せしむ、然りと雖も宇宙を解釋せんと企つるもの、この人間に生ぎるは奇象と言ふべし、眞理の存する所は究めざるべからずと雖も、身を滅して『不可解』を呼ぶは幼し。原理を求めて自家の藥籠に秘めば、其所に起るべき現象は果して悲觀か樂觀か、我關せぎ焉。

★　★　★

半面と半面とは正反對なり、熱して冷却するは物理の現象のみに非ず、故意に撓められたる植物も盈我となりて成功するを觀る、一面の失望は他面の興奮を見ざるならんや。

余は慥に或る意味に於て失望せり、同時に冷靜なる思考を浮べ得たるなり、今後我

眼前遮るべき何物も非ざるべきを信ぎ、唯一余の職務のために一生を終えんのみ。血管を走る紅血を絞りて戀を歌ふ子を余は有望なりと云はん、情熱醒めての曉はそこに一塊の冷悶を殘すに過ざず、君よ希くは其血珠を冷却せしめずして永久に溫高を保て、而して其冷ならざるに溫なる希望を載するホームを造ぎ、敢て君に勸むる所也。

春宵想を花に馳せて、懷怨ひろかに歌を秘むるの時、誰か若き情緒を押へ得んや。過去の余はまた人並に此境を經し事もありき、今や身を破りて拾年の愛人と絶たざるべからざるに至る、嗚呼又幻影の芳薫を慕ふを得んや。

余は正に唯一の希望として期待したる、家庭の樂趣を感ぎるを得ざるに至れり、幾冊幾篇の家庭讀書に時間を割きしは過去となれり。

阿波の僧德本詠じて曰く、

我庵は草履の上に笠の下杖を柱とすみ
ぞめの袖。

と、余は妨主にならんとは思はねど、如上の趣ある生活も風變りて面白かるべし。

頃日遇然三年前の日記を播きしに一首を見出せり、

思はじの心は我か暮しの情は我か夕雨の窓。

余が迷ひし痕跡を憶ふて、獨り憮然たりき。若き時代は幼き情に驅らるゝもの哉。

終りに君に言ふ、特に耳を籍されんことを希む、余が以上の精神的變化を來せしは終始体質に繫がれり。健康は幸福の母なるは今更ならぬ事乍ら、吳々も注意を重んぜられんことを。思へ不健全なるものは美人を穫る能はざるを、呵々。

雨降りて筆は自ら紙を走る、書き終りて何の爲めに此書を君に呈するやの故を解せぎ、されども墨汁にじんで消えざるを以て、戲きに机右に致すのみ。

（卅六年六月十六日）

四

謹而新年の御祝詞申上候、

幸福と健康とを祈上候、

明治三十七年新陽。

『次には何時遇へるだらう、一月の後か二月の後か』と、校門まで君に送られて來たのは昨年の何日の晩で有つたろう、思へば其時の言葉の怨めしきことよ。果して何月と經ての今日が今日まで、相會することの出來ない仕儀となり終つた。新年はお目出度うと、是非君を訪れ樣と期待して、形式の葉書は止して居たのに、下らない用事が湧いて痩体を縛り付け、出盛が六つかしい譯となッて、何うしようと思つて居るうちに、君から葉書で親切に祝つて吳れたので、益々濟まない感に打たれ、早速赤林へ驅付けて相談し、三日には是非二人で出ようと決した。三日となッた、昨日の雪が靴を殁するのである、兎に角赤林までは行つたが、雪が降り出して空摸樣が一層險惡にな

ッた、行くには行くとしても歸りが困るだろうと、周圍の人から云はれて見れば、成程、今朝でさへ一面の白野に路を求め難い有樣であッたから、暗くあつたらさこそと思はるゝので、ろれから明日にしようと此日は出盛を見合せた、これが聊惡かッた、サァ次の日となッたら雪は前日よも增した、これでは行來がなるまいとは山へ行く人の話。其次の日は何うだ、矢張同じ事、斯くしてトー〳〵盛岡へ來る時機を失した、隨つて君へも大に失禮したのである。今日は厭でも學校へ來なければならぬ日となつた、天氣も大分よい、途すがら赤林へ寄つてさま〴〵君への傳言など賴まれて來たのだ。

學校の時計は四時、未だ君は退廳しないか知らんと思つて、雜誌の新刊物など讀んで見、五時に近く校門を出で、先づ今晩ころは互の疎くなッて居た日來の交情を溫め樣と勇んで君の門を訪れた。

宮崎さん、寂然！　宮崎さんお出ですか、默焉。軒並の家々には燈の見ゆるに君が

家の內にはそれと見るべき光もなし、失望！　世に留守宅を叩いて歸る程キマリ惡くキマリ惡きはなきものぞかし。未だ歸られざるにやと、せめての望みを繫ぎて歸り乍らも、紋付羽織の若き人を見れば、君ならずやと瞳をこらしたが、失敗であつた、其所此所さまよふて後再び六時に二十分はかりの時訪れて行ッたが、矢張御不在！　失望！は再び繰返された、而も此度は度の强きもので……聽き給へ君、借りて見た民法の本二冊と新刊の『明星』一冊とを包んだ風呂敷を小脇に抱へて、何から話して見ようかと久しぶりの積る談を胸に描き乍ら、赤林の友から言ひ越された言葉を腦に籠めて、而して雪の上を小走りに訪れた。君の友の白命が今此風寒く雪黑き市の初夜を悄然として以上の失望を以前の空想と取換へて歸り去る時の感を！

昨年の九月であッたらう、我等は例の秋の集會をしようと云ふので、僕が君を誘ふべく訪れた(勿論手紙持參)、お母さんが不在のみか、いつもならばあの半間の障子が細い格子の左に立つてるのが、戸で閉ぢられてあつたので、御家內一同御留主の事と

承知して引返した、以來一度、二度、三度と何時も戸閉めのお家を訪れた。御轉宅かと思つたが宮崎一の名刺がたしかに昔のまゝである、ハラ……と些と怪しく氣遣はしく思ひ初めた、此度の休暇となりました、昨年の廿三日にも畫が駄目と思ふて夜に臨時外出を許して貰つて尋ねて行ッたが、矢張同樣お不在。手紙は持つて行ッたが障子を立てゝ居らるゝ時には、ソット開けて手紙を投げ込んで來た事も以前にはあつたが、戸締のしてある所へ忍び込ませるのも、何となく氣咎がして空しくもどつて來たのである。これらの事實と、君が新年の端書中の意味とを照し合せて、さて何事か君の身邊に起りはしないかと心配せざるを得ない。人と云ふものは何事も悲觀に感じ易すいもので、子供が歸り遲ければ母親が直ぐ怪我のなからんことを祈るのが通例である。僕とても君に對して悲感を抱くのは決して無理でない、惡く思はんで呉れ給へ、僕等は無論友人の祝福するのか望んで居る、けれども何ぞ不幸の事なかれとは同時に起る想情である、万一に万一、君に對して禍する何物かなかりしや。

こんなに考へ乍ら、うつ向いて外套の襟に顯を埋めて、ポケットに兩の手を差し込んで力なく歩んで來たが、例の横町に折れるのを忘れて本町の方へ眞直に行つて仕舞た。ろんなら序でによの字橋へ行つて雜誌を取つて來ようと足の行くのに任せた。新裝の唄女が車にゆられて、高髷がゆらぐやう、點々の燈火にこぼれて見えた。成程此所は場所であつたと思つたが、ソンジョソコラに三味の音も淋しくもれてくるのである。

（消燈のラッパ鳴ッたから止す、七日夜）

今八時に近い、朝飯を終えた。（少々朝れした、今朝だけは許されてよ）

それから公園にかゝつた、雪が占領した光景が木と地と水とすべて清氣を催すもであつた、夜は寥として此所にのみ靜かである、丸竹が此所から轉じたので餘程心持がよいなどゝ思ふた。本屋へ行つて雜誌二種を取つて直ぐ學校に歸つて、また直ぐ此手紙を書き初めたのだ。

新年誠にお目出度う、これたけは年始に會した者が是非言はねばならぬ語である、たとへ何んな事情があらうと目出度いものが目出度い筈だ、一種の習慣から來た例であるので。

僕はこの休暇中十幾日と云ふもの、殆ど寧日なしであつた。痩世帶を持つてる程厄介なものはない、薪が無いと云ふかと思へば小作米を出せと云ふ、來る人も來る人も快い話をして行くものはないではないか、赤林のばかりは愉快に訪れて呉れるのであつた。僕は年か年中安息なしに蠢めいて居るのである、けれどもこれが矢張僕の運命を價するものだと云つて居る、黒岩の『天人論』にも云ふて居るが、人が苦痛に打勝ちと云ふ事程快絶なものはない、また苦痛の後の快樂を追想して慰籍を得よと、實に然りだ。此頃の『明星』に悲劇が與ふる慰籍と云ふものを見た、逆境、悲觀、必ずしも慰籍なきに非ずと論じてあつた。僕は苦痛と云ふものは一種の自己修養法であると信じて居る、忍耐、宏量、すべてこの間に培生し得るではあるまいか、くよ〳〵して居る

人には眞の苦痛は分るまい、苦痛の眞味を知らぬものが苦痛に觸れようとしては、或る破滅を演ずるのであらう。僕は苦痛後の快樂は望み得ずとしても、是非現在の苦痛に打勝つと言ふことだけはやつて見ようと思つて居る、然し乍ら苦痛に閉ち籠められて居るものも、又必片面に於て或る慰籍を要求するものである。如何なる慰籍か？人各々好む所あるべしとは云へ、視覺觸覺味覺より得るものが決して至上のものでない、何うしても心的快感でなければならぬ、即ち同情から得るものが最も滿足し得べきものであらうと思ふ。自身の他人と同一境遇にあるもの、他人の情狀と自己とを同一に感受した時に於ける相互の情緒が融合して、意中に起る神秘なる作用は同情である、自分と相等しい境遇にあるものに遇へば、これに對して喜愁の情を分つと同時に、自己の喜憂に對してある滿足を感ずるのが、何人にも通有のものであると思ふ。同情によつて得る慰籍が苦痛中の光明である、君と僕とは境遇に於て年齡に於て相離る遠からず、君を訪ふて君と語つてゐの同情が績ぎ出す溫なる情緒が如何に僕には偉大の慰

籍であつたであらう。僕を知る友の君が恐らくまたこの間に於て僕を解して呉れるだらうと信ずる。昨年の秋に君を訪ふたのも昨年の休暇前に訪ふたのも、昨夜訪ふたのも皆この意であつたのだ。

晝では到底君と會ふのは出來まい、夜には僕の出ることがない、今學期中恐くは昨夜をおいては夜の外出は出來まい、昨夜君と會し兼ねた、今學期三ヶ月中再び君と相見るの機を失した。

と云ふても、決して君に怨み恨みを持ちかけるのではない、勿論誰の罪でもない、遇然相遇ふことの出來ぬのであるから。暦を繰つて見たなら、昨日は佛滅とか云ふのだつたかも知れぬ、僕はたとへ君を訪れて會はずに歸つても、君の門を叩いたと思へば既に心中幾分の滿足を感ずるのが常である。

君よ人が生きてるうちすべてが逆運では決してない、必ず何時かゞ光明を認むることであらう。僕は毎年悲觀の新年を迎へるが、而も樂觀でこれに對する今年三日赤林

てかうやつた。

象(かたち)すべて彩(いろどり)すべて新らしふ天地(あめつち)更に幸(さち)をこゝたる。

赤林の君も相變らず妻も貰はずに居る。君への傳言と云ふのは御年始の祝詞と拜借の本を滯つたのゝ申譯である、東京のからは何かたよりが來ましたか、彼れは又何を思立つたのか、田舍の借住居して雞を畜ふて卵と肉を賣る計畫ありとのことだ、其理由に曰く、以て學資の半を償ふべく以て他日社界に立つの常識を養ふべしと。美言好計、金のあるものが何なりやつて見るがよし、惡いことでもなさるまい。

（始業式が始まるから）

積雪幾尺、世は心地よき盛裝ある哉。尚君と語るべき事多かれども、此筆なか〳〵疲れたればこれにて失禮する。

終りに改めて新年を賀し奉り、强く君の健康を祈る。

筆おいて思ひもづるゝ雪のまど誰が身
によする墨のかほりぞ。

（三十七年一月八日）

下

一

十日歸校いたし候途中無事に候ひき、御安心くだされ度候、旅行の事一寸申上候。二日滝車にて好摩迄行きそれより徒歩にて荒屋に泊り申候、三日には花輪に泊り申候、鹿角郡にして秋田縣に今夜始めて泊り申候、此地は所謂美人胚の觸線ありと聞き居り候ひしが來て見れば成程その形跡のあきにも非ず候、されど一般に首短くスラリとしたる姿は一つも見えざるは憾に候、顏は蒼白にして活氣少しも無之たとへば蔭濕に咲ける花菖蒲の如くに候、山周四圍の當地の故にも候べく、又家庭の敎育は所謂格

言道德になじみ女大學以外に出でざるに原因するものならんと存候。小學校に就て聞く所によれば運動の不振なる驚くの外なく候、學校の運動場は十四五坪に充たざるは之を証し居候、女兒の活撥なる運動遊戯をなすものは凡てオキヤンとして見做さるゝ土風の然らしむる所なる由、敎員其人もこれには少なからぬ苦心しつゝありとの事に候、深窓に閉籠りて靑めたる幽靈の摸型的なる女子は此の地の賢婦椒女に候よし、此鹿角郡には花輪、毛馬内と申す二市街これあり候が、花輪は文に馴れ毛馬内は武に進むと云ふ現象を呈し居り候、花輪の女子の王朝美人を氣取るものまた遇然ならざるを信じ候、現に花輪には一家に學士二人を出したりなと云ふ所往々聞申候。

四日尾去澤（をさりさは）鑛山を參觀致し候、理學思想の幼稚ある我れには技師が說明もトント分らず候、今記臆に殘るものは精練所の硫黃臭と鑛夫の色黑きのみに候、此日我の最も感慨に堪へざりしは憐なる同胞を觀たる事に候、そは礦石を分解する工場に於ての事に候ひき。鐵索と申ものにて山より送らるゝ石は箱より下されて粗碎する場所これあ

り條が、そこより梯子にて下れば女雇數多居て大小を分ち居り候、そこをまた梯子にて下るれば細末の紛末を水にて分くる場所に候、都合此所は三階の下に當り候此所に至れば礦石の紛末上より下るもの下より飛ぶも此殆ど眼を塞ぐはかり塵芥濛々として鼻に迫り、加ふるに異樣の臭氣烈しく我等には堪へ得ざる程苦しく感じ候ひき。然るにかゝる中に多くの男と女とは頭より尻まで異樣の光を帶びて勞働しつゝあるなり、何々何々といふ器械の運轉は轟々の音をなして耳を掩ふに候、現世の地獄とも思ひ及ぼさる此の所に見よ！　玉の如き幼兒は（たらひの如き木製のものに入れられてあり）スヤスヤと眠りあるに非らずや、我は尙ほ筆してこの感慨を述ふるを欲せず兄よろしく賢察をたれられたく候。斯かる所に衞生を說くか兒童心理を云ふか我れは大に社會に問はんと欲するものあり、工場を出でゝ礦坑に入り申候、この坑千百間を入りて九十尺下に鑛夫三日前に五人入れりとは先導者の言あり、驚かれずや兄よ我れは好奇心に驅られぬ、如何なる事を爲しつゝあるべきやと即ち竹を燈して坑に入り申候。忽ち

聞く一聲轟然恰も陸軍演習の山砲の如きこれは即ちハッパに候由、時々礦胴を割るために用ひ候由、坑を行くに或は水あり或は石あり、暗黑にして前後覺束なく實に地獄と云ふ感を再びひき起し候ひき。漸くにして採堀の場所に至ればカンテラの火をたよりに金鎚の音ピン〳〵と、靑蒼の顏せる男數人あり此世の人とも思はれずカンテラの煙は始終彼等の面を嘗めて黑く黑く彩りつゝあるなど見るから殺氣に襲はれたる如くに候ひき、鑛夫の短命なりとの事は兼ねてきく所なりしか今日その事實なるを腦裡に確め申候、憐むべき彼等の生命を犧牲にして終日十時間余の勞働は僅に銀貨三十錢に價せずと云ふに至りては、情あるもの涙なきを得んやに候。

五日毛馬內を過ぐ、前に此地は武を好むと申候ひしが、市街の門札に海軍大尉何誰陸軍少尉何誰あどのポッ〳〵見へ候へき、日詰よりは少し大なる所よ候。錦木塚といふ昔の人の戀の跡をも見申候、今夜小坂鑛山に泊り候、尾去澤鑛山にて不快の感にのみ打たれし我は、又この山に來りて彼の感を繰返さと思へば、明日の參觀を何となへ

厭味に思ひて床に入申候。

六日今日小坂に滯在鑛山を觀申候、此の工場規摸宏大なるには一驚を喫し候、現世界の鑛業中礦石の產高製練器の雄大なるは實に第一位に居るとの事に候、然共惜むらくは金質不良の故を以て名を世に知れるなり云々と技師は語り候。毎日採堀礦石三百噸溶礦爐の大さ四間に十八間山下爐分銀爐回燒爐等の數殆三十に近し、電話交換所は五十番に上り鑛夫の戸數千戸に余り全山の人口一万餘と稱す以て一班を推され度候、今年益々擴張の由にて只今電氣鐵道敷設中に候、豫定線路は蜘蛛の巢の如くに候。新に設くる溶礦爐は七間に廿一間の由、其他電氣應用の製練所建設中に候、二百尺の燈筒は直經十八尺のよしこれも工事中に候、此工事落成後は尙ほ見るべきもの多かるべく候、今後の小坂は足尾などは眼中になしとは事務員の氣焰に候。

七日十和田に行き候、今日十和田に越ゆる山中にて路を失ひ日暮れて尙ほ人里に出でず困難を極め候、此山雪一面に有之深さ膝を殁し候、磁石と地圖とに手よりて坂を

上り川を越へ右往左往に迷ひ歩き候、足は疲れ腹は空き旅の憂さといふ事初めて身に染み候へき。午後七時頃漸く十和田湖の右なる山嶺に達し候ひき、只見る一面の鏡は暗き中にも光を浮べて我等を迎へたる我等の此の時の愉快は名狀すべからざるものに候ひき、それより谷に下りて宿につき候、この所絕壁にして雪なめらかに一歩を誤れば石を轉ずるが如く、落ち行く所に候て危險言ふばかりなく候。我も二三度三間許りつゞ雪に辷り落ち候手荷物帽子を失ひたる人も見へ候ひき。

八日十和田湖三里の水面を乱して風景の美に醉へり、水の清き事晶玉の如く松を載せたる島はちらほろと浮び其の儘の影を水に投けたるは繪筆なきを恨むばかり也。秋紅葉の景最もよしと舟子はいへり實にもと思ひやられ候、一度は必ず見るべき價値ある湖に候、湖に源そる相坂川といふあり我等はこれに浴ひて三本木に參り候。同地に一泊いたし候、相坂川の風景又凡ならず候、兩岸の岩角削立せる間に幾條となく細瀧のかゝれる殆と三里は皆然り、殊に山櫻の幼く笑へるなど添へて一層の眺矣に候ひ

き。

九月三本木より古間木と云ふ停車場へ出で尻内乘換へにて八戸まで參り候、徒歩して驛まで行き初めて海といふものに接し候、此日空曇り風烈しく波甚だ暴れ候ひき、漁舟木葉の如くとは書にのみ覺へ候ひしが、今現に我眼に入るものは實に木葉の如く波に弄ばるゝ數艘の小舟に候ひき、波は波を卷いて大より大に沖より襲ひ來りて岸をつく樣誰やらの言ひけん海陸の爭ひと云ふ事を想起し候。岩を叩いて白沫を散らす光景は白馬に長槍を提げたる勇者の嘯くにも似通ふに候はずや、唯か投げ棄てし白玉ぞと思ふまもなく飛上るを見ればかもめの群に候、美しき鳥に候。鹽燒く蜑子とか梶なき舟子とか世の文には海の人を憐れにのみ歌ひもしかきもしあるは多く見る所に候へ共、我れは此の海の人々に對して些も可憐の想を起し候はざりき、朝に夕に此の莊嚴なる雄大なる海に向つて語るの濱人は實に幸福の至るべしと存じ候、果てしもなき彼の沖！　所謂水天彷彿なるの所遠大の希望を滿たして余りあるに非らずや、若しそ

ねまばゆく太陽の紫雲を破る時よ、金波銀波は幸福の渦を卷いてこの海人に望まざらんや。激浪黑く又青く天に躍るの時、白煙岩を包んで暴勢風を乱すの時、この海人は双の力瘤に幾何の豪雄をか蓄へたる、雲は空に收まり風は波に消へて万里さながら藍を堪へたる時、そこに平和の色を見ずや、來りて海を見るもの鹽を燒くもの〻顏色の黑きに苦辛を想像するは或は易すからんも、彼等が藁屋に鮮魚を煮て甘酒を賞するの樂みは思ひ及ぶ所に非らず、浪に潛ぐるの難は見るを得れども呑舟の大魚を舷頭に提げたるの快は知る能はざるなり、海？海は宇宙の樂園なり漁人はこれに遊ふの仙客に非らずや。

これより歸りて八戸に泊り翌日中學校、女學校を見て令時半此所を發車し福岡に下り、末の松山を越へて一戸より再び氣車にのり歸校いたし候。

以上は其大体に候、餘は御面會の時に讓り申候、先般我れ歸郷いたし歸校の途に兄の御令弟に會ひ申候ひしが、其御話によれば兄には鎌倉あたりに遊ばれたりとの事。

御一人に興味を秘め玉ふも罪なるべし少しも御洩らしくだされずや、我れは旅行といふものは地に落ちてより此度は初めに候、實に愉快の者に候よ。

……（五月十四日）

二

嗚呼行く秋の空よ、雲南に流れて轉た愁怨に堪にぞ、君と別れて茲に幾日、未た筆を殺して寸簡を染めぞ、胸中万斛の熱情傳えて、餘溫を君に致す能はざりしを悔ゆるのみ。清雅の候益々神身の爽壯を祈る。

豐穰の收穫期は、天下の平福を增しつゝ迫り來れり、今日神嘗祭。

伊勢の祖神も笑を堪に賜ひしか。

日曜に續くこの二休日、些暇を借して筆を運ばしむ、紙に向ひては何れを先、何れを後と感ふは常なり、殊にこの永き間に君へ語るべき事の少なからざれば。

八釜しかりし縣社祭典の所感を序開とせんか、十月四日は來れりき、九つの山車は

引廻されたり、兄連と藝者連の狂喜乱聲はまきちらされたり、無慮數千の田舍人は繰り出したり、三日の好晴日たゞ以上の現象を繰り返したるのみ。此の三日間、實に火山的性質の日本人の特色（言ふべくんば）を發展して遺憾なかりき。特色とは稱賛すべき意の特色に非ず、記憶すべき三十五年の凶作は、全國の仁人が慈惠を煩はすべく、東北に劇しかりき、現に義捐金によりて口を糊するすの少々ならざる也。而も今秋の收穫を豫想して直に豐作となし、這般の大騷きを初め無益の投財を敢てす、眞に咽元過ぎて熱を知らざるものに非ぞや、花車引音頭を唄ふて嬉々たる彼等の聲は、昨夕他人の袖に縋りて施物を請ひし聲也。更に來年再び凶作あらば、泣號して復仁者の懷を探さんとするなるべし。

九つの山車は造られたれども、何れも遺傳的形式に則り、牡丹花、櫻花、瀧、岩を以て唯一の裝飾となし、所謂人形を載せたるに過ぎず。此の如きものにも多少の美術思想より割出したる改良を加へて欲しきもの也。紙の花だとか縮緬の花だとか、揃ひ

袢天が意氣だとか目を注がぬ人々にも、餘計な注文かも知れざれども。

田舍の群集、奢矯を追ふて飾立を都市風に摸倣すること、昨年より進めるを見る。是れ鳥の尾に孔雀の毛を附くるに似て猾聲なり、彼等は其身に羽織を着其子弟に袴を穿たしむることを知れり、而も學校の三大節式場に用ひずしてお祭見物に使ふ、何等の矛盾ぞや。尙一層惡感情を起さしむるは彼等のお祭を觀むずしてお祭を食ふ事也、食道樂の彼等は胃壁の收縮を防ぐるまで暴食を逞ふせざんばやまざ、巷頭に立つもの樹陰に息ふもの、一人として咀嚼筋を動さざるものなし、試みに露店の數を統計せは、酒食を賣るもの七八分に達すべし、其他店舗の群客あるものは皆飲食物を賣る所のみ、外形に醜陋を極め內部に健康を害す、愚も甚しい哉。……（晝食すべく筆を止む）

（三十六年神嘗祭の夕方寄宿舍にて）

白命遺稿 完

正誤表

小引――――

故人が里、煙山に生れたる小生の、公務もてるこの頃。佐々木、工藤氏と親しく印刷の場に臨むゑと能はざりしも、氏等の熱心なる力によりて、遺憾なく出版せられたるは、小生の幸榮とする所也。遽莫、數氏の手によりて輯められたる原稿の、誤寫脫字の個所も尠なからざりしかば、更らに故人が殘せる『遺稿』に照校して、其甚しきものを正誤して、聊か小生が本書に對する責免を重ずるもの也。

小笠原生

頁	行	誤	正
一	五	葉	華
二	一	かさけ	力さけ
九	九	怨み包む	怨みを包む
一三	三	あぐみの	あぐみての
一四	一	暉	暉（かゞ）
一四	二	予	矛
一五	五	春繫がん	春を繫がん

頁	行	誤	正
一七	九	櫻がなせる	櫻かざせる
一七	二	いひにたる	いひえたり
一九	五	うなばた	ふなばた
二一	五	つま	つき
二四	一	ぼし	ぼし
二五	三	微笑むとの	微笑むもの
二七	八	櫻	梅

頁	行	誤	正
二七	一〇	ゆけず	ゆけば
二九	八	ならん	なるらん
三六	一	志げさ	志げき
四一	一	みたれ	みとれ
四二	五	したけしく	したはしく
四三	八	あるぎ	あらぎ
四六	七	あらたたま	あらたま
五〇	七	たのしき	たしき
五一	五	休みて	休みの
五一	五	更	更
五一	一一	ひやかけき	ひややけき
五三	一	あやふき	あやうき
五四	一	かの	雪の
五五	三	五月の空	五月雨の空
五五	七	わめて	わめく
五五	九	たもとのうるほひて	たもともうるほひて

頁	行	誤	正
五八	九	かくも	かく
五九	七	ゆられ	ゆらぎ
六〇	一	柴	紫
六〇	六	(露の女に)	(露より女に)
六二	三	そが	ひろか
六六	五	おどり	おごり
六八	五	里森	黒森(わらんべ)
六九	九	童	童
六九	九	たいたり	たにたり
七二	五	荒び(あら)	荒び(すさ)
七三	六	友うる	支ゆる
七四	一	まろぶも	まろぶ
七六	九	籍	箱
八五	一	敗之	敗亡
八九	五	よせる	なせる
九五	三	強がて	強がつて

頁	行	誤	正
九七	八	いづたき	いたづき
一〇〇	五	はなげく	なげく
一〇〇	七	心せ	心も
一〇三	八	その日	その日の
一〇九	一一	今人と	今人も
一一二	五	今年と	今年も
一一二	一三	騒驚き慰ん	騒ぎ驚き譬へん
一一三	八	弟	第
一一五	七	穫	獲
一一六	五	穫	獲
一一七	四	なりし	かりし
一一八	三	かふず	ならず
一二〇	一	すすべし	すべし
一二一	八	これよりて	これによりて
一二五	五	なまじき	なまじひ
一三〇	二	而り	然り
一三〇	四	あらぬば	あらねば

頁	行	誤	正
一三〇	一三	操	撰
一三一	一	なかつ	なかつた
一三一	六	大	多
一三三	三	布	希
一三四	七	冠せられて	冠らせて
一三五	八	かいが	ないが
一三七	八	諭	愉
一四〇	六	遺	潰
一四〇	九	籏	旗
一四〇	一一	『血の涙』を	『血の涙』と
一四二	一	なけねば	なければ
一四二	六	叛	判
一四四	五	側	測
一四四	一〇	嬈	蝶
一四六	一三	侮の	侮妄の
一五二	四	止まぎ	止まらぎ
一五二	七	盛山	盛岡

頁	行	誤	正
一五二	一〇	靜恩	靜思
一五二	一〇	命ず	命じ
一五三		框内三行謂德の二字は前行山の下に並ぶべし	
一五五	四	憐	隣
一五八	一三	洗てふ	洗ふて
一六一	一一	ビ	ビ
一六二	四	ハ	バ
一六二	六	ゴ	コ
一六二	七	セ	マ
一六三	四	プ	プ
一六四	五	プ	プ
一六四	九	秋	科
一六五	六	此陸	北陸
一七一	二	これ志和村	これ志和の志和村
一七二	一	印	卯

頁	行	誤	正
一七二	四	果	里
一七三	三	二三里	三四里
一七三	六	志和村は遂に	志和村は後遂に
一七三	九	貫	縫
一七四	二	出でゝ國	出でゝ一國
一七四	四	而此	而して此
一七四	七	最區劃	最も區劃
一七四	一二	べし	べきなり
一七五	四	難は	難きは
一七五	五	斯の	斯くの
一七五	八	說に	說
一七六	六	紫波の	紫波郡の
一七七	六	傳法寺前き	傳法寺の前き
一七七	一二	もず	せず
一七八	九	御村帳	鄕村帳
一七八	一一	矢澤	矢次
一七九	二	矢澤村	矢次村
一八〇	一	たるものなり	たるなり
一八〇	二	或	或は
一八〇	九	方法は	方法には
一八〇	一〇	今の飯岡村	今の飯岡村永井
一八一	一	西村	兩村
一八三	八	此の	その
一八四	六	氣氣	氣氛
一八四	六	知詳	知其詳
一八四	七	湲	溪
一八五	一	窮	窺
一八六		框内三行謂德の二字は前行山の下に並ぶべし	
一八七		一頁框を施すべし	
一八八	二	創立	創建
一八八	五	いたり	いたる
一九〇	二	万	萬
一九〇	一二	祇陀寺あり	祇陀寺といふ寺あり
一九一	三	權現を	權現と
一九一	八	盾	質
一九一	九	今	兮
一九一	九	今	兮
一九一	一二	風	凪
一九一	一二	本池	本地
一九三	五	用村	用材
一九四	六	御尋	相尋
一九五	二	候也	者也
一九六	一一	云は除くべし	
一九七	九	祇陀	祇陀寺
一九七	一〇	徵	微
一九八	一二	南昌	南昌山
二〇〇	一	忘	妄
二〇〇	五	舊藩	舊藩主
二〇一	一	義義家	義家

頁	行	誤	正
二〇二	四	還跡	還筋
二〇二	九	かゝる	かゝり
二〇二	九	東願寺	東顯寺
二〇二	一〇	社前より	社前より曲り
二〇二	一〇	陀彌陀	阿彌陀
二〇三	一	あるべき	あるを
二〇三	六	救仰せ	暇仰
二〇四	五	一	へ
二〇五	一二	おさんとての次に「松の木を植ゑんことを其筋に願ひしに」を入る	
二〇七	三	あるせの	あるもの
二〇七	六	十七歩	十一歩
二〇七	一〇	穿ちし	穿ちて
二〇九	四	ありての	ありてこの
二〇九	八	西部大字	西部小字
二〇九	九	たるなり	たる所あり

頁	行	誤	正
二一〇	八	先達	先達も
二一一	一〇	然る所に	然る所に一度に
二一二	二	兵士	兵共
二一二	二	鬼神に	鬼神と
二一二	一二	挿	捕
二一三	二	志和と	志和氏と
二一三	四	肉路	肉胳
二一四	七	其路	其跡
二一四	九	各を	名を
二一六	三	同市	今同市
二一七	九	撿打	撿地打
二一七	一一	峯山	煙峯山
二一七	一一	秀與	秀與
二一八	五	『將盛岡記』	將『盛風記』
二一八	六	『盛岡記』	『盛風記』
二一八	九	『盛岡記』	『盛風記』

頁	行	誤	正
二一九	一	上	と
二一九	二	ありとの	ありしとの
二一九	五	一方に	一方の
二一九	六	右	名
二二一	一一	大閣	太閤
二二三	一〇	重直	直重
二二四	一二	顯	題
二二五	一	判	利
二二五	二	信直公の次に「利直公」の三字入る	
二二五	三	衡	衞
二二六	八	廿九日	廿八日
二二六	一〇	この	これ
二二七	二	東顯末	東顯寺末
二二七	六	水	永
二三〇	二	安	按
二三〇	五	是れの前に「其翌年更に鎮所を築きて夷狄をして再び窺ふの餘地あからしめんとせり」を入る	

頁	行	誤	正
二二八	五	觀し	觀請し
二二九	一二	組	祖
二四〇	七	群	義
二四一	六	志和趾	志和城趾
二四二	一二	後	俊
二四五	一	島	鳥
二四五	三	城	柵
二四五	三	する	するも
二四五	六	城の善知島坂	城趾の善知鳥坂
二四五	九	知善島	善知鳥
二四六	九	枝	拔
二四八	三	家	密
二四八	五	贊に	贊
二四八	一一	秀	季
二四九	一	安堵也	安堵候也
二四九	六	詮	俊

頁	行	誤	正
二四九	一〇	城趾	城墟
二五〇	五	橋	橋
二五〇	九	と云へり	一族と云へり
二五一	八	墓のこりて。	墓ののこりて
二五三	一三	動王	勤王
二五四	二	舊記	諸舊記
二五四	五	之記	元記
二五四	六	傾	領
二五五	一	之	文
二五五	三	地理	地誌
二五五	六	治郎	治部
二五六	三	三郎	孫三郎
二五九	一二	是下	是偏足下
二六〇	三	（顯信將軍政長に命じたるもの）の六號字を入るべし	
二六三	四	將	波

頁	行	誤	正
二六六	二	領記錄本	記錄數本
二六九	一二	下文	下降
二七〇	三	疊	壘
二七〇	六	一年	一千年
二七一	二	とい	いと
二七二	六	子に	子よ
二七六	三	六五日	五六日
二七六	一二	次に君の	次に□□君の
二七八	一	君の	□□君の
二七八	二	熟識	熟誠
二七九	五	團	園
二八一	三	なきと	なきを
二八三	一	至し	致し
二八三	八	と	も
二八四	一	並ん	並んで
二八四	三	園	國

頁	行	誤	正
二八四	一二	づ	で
二八五	一一	麿	磨
二八六	三	ないので	ないで
二八七	二	氣がつかない	氣むづかしい
二九〇	七	思つと	思つて
二九〇	七	せて	せと
二九一	一〇	考	者
二九二	五	さき	され
二九三	四	生き	生れ

頁	行	誤	正
二九三	八	病	質
二九四	一〇	我	栽
三〇〇	二	ハラ	ハテ
三〇八	一	條	候
三一三	一	ね	れ
三一五	五	するすの	するもの
三一六	三	鳥	鳥
三一六	五	觀むぞ	觀ず

梨の花續く十里の色をめて君白命

と文に名のりき　（桃村）

水晶のましら花びら天にうけ友が

み靈をつつむ梨の香　（迷宮）

明治三十八年十一月二十七日印刷

明治三十八年十二月一日發行

白命遺稿奥附

編輯兼發行者　岩手縣和賀郡藤根村六十二番戸　高橋松次郎

編輯兼發行者　岩手縣江刺郡愛宕村八十二番戸　高野俊治

編輯兼發行者　岩手縣紫波郡煙山村大字赤林五十三番戸　小笠原謙吉

印刷者　岩手縣盛岡市吳服町三十四番戸　工藤倉吉

印刷所　岩手縣盛岡市吳服町三十四番戸　富士屋印刷所

發行所　白命會

紫玉、堀内正夫君は、我等の事業に同情を表せられて、佐々木孤舟君と共に學課を排して、校正の任に當られつゝありしが。不幸、本月十四日の夜、盛岡病院に於て永眠せられたりと。茲に謹で哀悼す。

白命會同人